小金井みんなの公園プロジェクト

play here interview

これは、「みんなのための」そして「みんなによる」公園づくりを通して、「ここで遊ぼう」という想いを、誰もが叶えることができるまちにしていくためのプロジェクトです。

とはいえ、「みんな」という口当たりの良い言葉に頼りすぎることで、かけがえのない「わたし」という存在がおろそかになってしまうことは避けたいと考えています。また、プロジェクトを進めていくうえで、統計をとったり、データとして数値化をしたりすることで、判断材料を潤沢にしていくことはもちろん必要でありますし、進めていくべきことだと考えますが、かけがえのないそれぞれの「わたし」というものは、単なる数字やキャッチコピーのようなフレーズに置き換えられるものではないとも考えています。

公園は、かけがえのない、それぞれの「わたし」という存在にひらかれた場所であるべきです。そして、それを目指すこのプロジェクトも、それと同じようなものであるべきです。そうであるために、ではどうしたらよいのか？

このインタビューシリーズは、それを問い続け、応え続けていくためのものでもあります。しかしながら、まだまだ、お話をお伺いすべきであるにも関わらず、できていない方々がたくさんいらっしゃいます。時間の許す限り、このインタビューシリーズを続けていきたいと考えています。そして、随時更新公開をしていく予定です。是非、ご関心をお寄せくださいますと幸いです。

聞き手・執筆・写真：熊井晃史
校正：小林勢（小金井市環境政策課）、山﨑寛之（同経済課）、荒ひかり（パシフィックコンサルタンツ）

目次

やっぱりコミュニケーションを育まないことには	清野緑さん	3
試されることを待っているアイディア	横田宙士さん	11
あたたかい眼差しさえあれば	遠山敬子さん	22
理学療法や作業療法の知見を地域にひらく	中山雅和さん	32
ずっとみんなでなんとかしてきたんだよ	串田光弘さん	41
来づらい人がいるんじゃ、道理が通らない	前田多實子さん	52
生きることは愉しいよって背中で語りたい	亀井寛之さん	62
医療的ケアが必要な子にも勧められる公園を	田村利治さん、内田薫さん	74
やさしい日本語を、やさしいまちから	山脇弘美さん	82
安心と挑戦の拠り所としての公園	木本茜さん	93
怖くて公園に行けない人、たくさんいます	加藤さやかさん	106
共生社会を本当に願うなら	冨永美和さん	120
迎え入れることを備え続ける公園的な地域へ	阿部裕太朗さん	131
地域の植栽から考える、これからのインフラ	倉石篤さん	146
それぞれの経験が持ち寄られる地域を目指して	星郁子さん	153
こころとからだと環境は切り離せないから	鞍田愛希子さん	165

清野緑さん

やっぱりコミュニケーションを育まないことには

取材日：2024年6月19日

みんなでつくっていくということを、みんなで大切にするための方法

熊：私はこのプロジェクトに今年度から参加しているのですが、清野さんには昨年度にも当事者という立場からもすでにご意見を伺っていますので、そこからの進捗という意味でも少しご紹介をさせてください。まず、「インクルーシブ遊具の設置の前に、トイレが整備されていないと出掛けることができない」というお話があったかと思います。

清：しましたね。

熊：これまでの調査のなかで清野さんに限らず、当事者の方々からの同様の声を受け止めて、トイレといった基本的なところの環境整備に目を向けて、少しずつ具現化を図っているところです。やっぱり当事者の方々と議論や対話をしていきながら、プロジェクトとして持つべき理解度を深めていかないといけないと思いますし、そのプロセスも今回のインタビューの記事などを通して公開していきたいと考えています。

清：結論ありきではなく、プロセスも地域にひらきながら進めていくというプロジェクトのあり方は、よく言われていることだと思うんですけど、それが実際にできていることはどれくらいあるんだろうって思っていました。私が知らないだけかもしれないですけど。

熊：あ、いや、そう思います。形だけのプロセス公開型というか、話を聞くだけ聞いておいて、その後がおざなりになっているもの、多いと思います。

清：そうですよね。だからSNSの発信をすれば良いってことじゃなくて、実際にそれがどれだけ当事者や地域住民に理解されていくかっていうことが大切ですよね。なんというか、行政任せにしたいわけでもないので、「みんなでつくっていく」ということを、みんなで大切にしていくためにも、そういうことが必要ですよね。

熊：まさに、そういうことを考えています。

清：いろんなことで言えると思うんですけど、やっぱりステップが大事だと思っていて。今って、すぐ答えを出さないといけないことが多すぎると思うんですけど、そもそも、みんながみんな同じ意見であるはずがないですし、誰かしら何かしら思うところがあるはずなので、そこを恐れずに会話をしたり、対話をしたりしていこうよっていうことで、みんなで話し合って、折り合いつけていって、これやってみようあれやってみようっていうステップが増えたらいいなって本当に思ってて。

熊：プロセスの試行錯誤に意味があるというか、過程そのものも目的になるという感じはありますよね。

ありのままを受け入れられると試行錯誤ができる

清：なんというかその、子どもが特別支援学校に入ってそれをすごく実感したんですよね。息子は先天性の筋疾患で、一歳手前で診断がつきました。一般の子たちと一緒に保育園で生活をして、特別支援学校に入る段階で、それはもう決められているというか、もうそこ以外入れるところはないのに、その就学のタイミングでズンって心が重くなってしまって、「分断」という文字が離れなくて。

熊：ああ。

清：それで、今は小学２年生ですけど、１年生の秋ぐらいに発表会があったんですね。それを観て、これで良かったって思えたんです。息子もそうなんですけど、知的障害、発達障害と、いろんな障害のある子たちがそれぞれできることを、先生方が、失敗成功とかじゃなくって、それが上手くいくかどうかじゃなくって、その子の試行錯誤そのものを受け止めてくれているんですね。そうやって、子供たちが感じられる安心があるから、そこからちょっとずつ、これやってみようっていうチャレンジの気持ちが出たりとか、なんて言うんだろうな、成長が感じられるっていう。

熊：それはもう、障がいの有無に関わらず、すべての子どもたちに必要な環境だと思いますし、なんなら、子どもだけでなく、大人にとってもそうであるような気もします。

清：特性があるとか、この言い方もしっくり来てないんですが、発達特性のある子たちの存在自体が、生産性ばかりを求められる今の社会からどんどん欠けていく部分をなんとか保ってくれていると最近すごく思っていて。だから、その子たちに街のなかに出ていってもらいたいし、なんならもうみんなに特別支援学校に社会見学に来て欲しいです。

熊：ああ。ちょっと深堀りしたいところがたくさんあるんですが、プロジェクトに紐づけて言うならば、子どもたちが安心を感じることができて試行錯誤できる状況を社会に広げていくべきですし、その舞台に公園がなったらなと願います。

清：本当にそうですよね。

熊：ちなみに、発達特性があるという言い方にしっくり来ていないのは、どのような想いからなんでしょうか。

清：だって、特性があるかどうかでいったら、みんなそれぞれあるじゃないですか。特性が無いなんてことはないので。

熊：本当にそうですね。

街に、公園に、気軽に行けない

熊：なんか、えっと、プロジェクトがどうあるべきかって、公園がどうあるべきかという話はもちろんなんですが、社会がどうあるべきかっていうところとやっぱり筋を通しておかないといけないんだろうなという気はしています。そういう筋道で引き続き会話を続けていきたいのですが、公園ってどうですか？やっぱり気軽に行けないですか？

清：私たちって、街にトイレがないと思って出かけないじゃないですか。コンビニでもどこにでもあるし。子どもが小さいうちは公園でも敷物をひろげてささっとオムツを替えてたんですよ。大きくなってくると、流石に家の中でも友だちが来たりしたら、ついたては立てるようにしています。やっぱり、それぞれの尊厳があるので。でも、公園についたてを持って歩いて行くわけにもいかないですよね。だから、外への出やすさやアクセシビリティというところでは、身体が不自由な子どもや大人がオムツ替えができるトイレがあるっていうのが重要で。最近は、ユニバーサルベッド（大人サイズの横になれるベッド）のあるトイレが少しずつ街の中でも増えてきているようではありますけど、じゃあそれがどこにあるのかっていうのを意識して探したり覚えておかないといけないんですよね。

熊：当たり前にある、という状況ではないから、気にかけ続けないといけない。それはそれで、結構疲れますよね。

清：そうなんですよね。あの、その、このプロジェクトで検討してもらいたいな、でも、入れるとおおごとになっちゃうかなと思うのが…。

熊：え、聞かせて欲しいです。

清：やっぱり親が連れて行きやすい場所でないと、子どもが行かないというか、行けないというか。

熊：そうなりますよね。

清：みんなそれぞれ大変だと思うんですけど、公園だと、やっぱり遊具で遊ぶとなっても、自分の子どもが使える遊具が限られていたりとか、子どもを抱っこして、全部が全部、介助しなきゃいけない。よいっしょって、腕とか痛い思いをして、ブランコとか乗せないといけない。結構、ブランコって難しいんですね。なぜかというと、息子を車椅子から降ろして、いろいろと準備をしてるとどうしても時間がかかってしまうんですけど、そうしているうちに、他の子が乗っちゃうんですよね。

熊：横入りかあ。

清：近くで見てるちょっと大きい子がいたら、今この子が乗ろうとしてたよって言ってくれることもあるんですが、それは本当に稀で。それが、インクルーシブ遊具のエリアでも起きているんです。何回も抜かされるから流石にと思って、横入りした子にお願いしたら、泣かれちゃったこともあって。なんか別に、よその子を泣かせたくて公園に来てるわけじゃないしって、ブランコに１回乗るにもいろんなハードルがあります。

熊：心折れますね。

清：体力の面もハードルがありますが、やっぱり精神的な部分が大きいかなって思いますね。うちの息子も叫びますけど、どうしようもなく叫んじゃうとか、コミュニケーションが思うようにいかなくて手が出ちゃうという子もいる。特に子どもが大きくなってくると、なにこの人って見られたりとか、やっぱりそういうことは、いくら慣れてるお母さんたち、お父さんたちでも心が折れそうになる。どうしてもやっぱり少数派になるのでね。公園に行くと、まあ街に出ても少数派ですけど、うん。

熊：少数派。

清：そう。なんかワーッて遊んでる子たちを目の当たりにして、やっぱり比べてしまうことが息子が小さいときはよくありましたね。本当だったらこういう風に走り回れるのかなとか、走って自分の好きなところに行って、好きなことができるんだなとか。まだコミュニケーションが取りづらかった１、２歳ぐらいのときって、指さしすらままならなかったので、もうどれで遊びたいのかもわからないし、なんか私の都合でこれをさせちゃってるのかなとか思いながら、ああ楽しいねって笑いながら、でも、それ、カラ笑いで。

熊：楽しいから笑うのと、笑うから楽しいのとありますけど、そのせめてものカラ笑いで、気持ちを保とうとするというか。

清：はい。なんかすごい疲れて、滑り台なんて、もう１０回ぐらい頑張って滑って、次の日は背中が痛くなったりとかで。公園に行ってゼイゼイ言いながら疲れて帰宅して、そのまま夕方ご飯作ってとかいろいろあるっていう。

だからやっぱり、自分たちだけで行くのは結構ね、勇気も気力もいります。精神的にも余裕があるときじゃないと、公園は行けなかったですね。少数派な分、視線も集中しますし。

分け隔てなく接されたから、今はどんどん質問してって思えてる

熊：もの珍しげに向けられる眼差しは、キツイですよね。

清：はい。でも今は、どんどん質問してって感じなんですけど。ちっちゃい子とかね、息子の車椅子を指して、なんでこれ乗ってるの？とか、これベビーカー？とか、そういうのを無邪気に聞いてくれる。今は嬉しいと思うんですけど、それは保育園のお友達がみんな素直にそういうコミュニケーションをとってきてくれたからで。だから、私も公園でそういうふうに知らない子に聞かれても嬉しいって思えるようになったんだと思います。

熊：屈託がないというか、邪心みたいなものがないと、こちらも疑心暗鬼みたいな気持ちが晴れていくというか、それが生まれづらいというか。

清：うちの息子は理解のある保育園に恵まれて、そうやって混ざれてましたけど、でも保育園とか幼稚園に行きたいけど行けなかった子たちやその親御さんたちって、そういう経験が得づらいんですよね。保育園や幼稚園時代のそういう小さいときの、何も分け隔てなく接することができるときに出会える場所っていうのが、公園の本来の目的でもあると思っていて、そういうところが本当のバリアフリーというかインクルーシブな場所であるはずなんですよね。子ども達は「インクルーシブ」なんて言葉を知らずにできている。大人たちがこんなに頭を突き合わせてもできていないのに。

熊：はい。うん。はい。深く感じ入っています。

清：保育園や幼稚園に行くことが叶わなくても、公園に行けば、地域での触れ合いをお互いにすることができるっていう。一般の子たちにとっても大事な経験というのは、保育園の先生からもよく言われていたんですね。それで、当時の息子の発語が、単語が三つ四つぐらいでママとかマンマとかのときなんですけど、保育園の子たちから「お話できるよー」って。お友達と向かい合って、なんかごにょごにょとおしゃべりしているんですが、大人が聞いたって素通りするようなものでも、その子たちには気持ちで伝わっている感じがして。それと、保育園に新しい子が入ってきて、よかれと思って息子の前に絵本を一冊置いてくれたりするんですけど、そうしたら、他の子が、「ちゃんと自分で読みたいのを選べるから２冊くらい持っておいでよ」とか言って、レクチャーしてくれていたりするんです。

熊：はい。うん。はい。うん。

清：息子の場合はそうやって、理解のある保育園で、本当に温かく見守ってもらって過ごせたんですね。でも、それが叶わない子がいっぱいいるんですよね。特に医療的ケアが必要になってくると、一般の保育園や幼稚園に入ることがほとんど叶わない。本当は、そういう子たちを小さい頃から目にしていたら、チューブとか呼吸器をつけてる子とか、バギーで横になっている子を見て、心ない言葉なんて出ないはず。

熊：え、えっと、そういう状況に実際にいらっしゃったということですか。

清：え、はい。そうです。だから、公園とかでチラチラと横目にしているだけで、違うと思うんですよね。こういう子がいるんだって小さいときから感じていることができるって。

熊：まさに本当にそう思います。だからやっぱり、公園をどうしていくのか？という話は、私たちが自分たちの社会をどのようなものとして考えたいのか？というものと接続をしないと、結局ハード整備だけの話になっちゃうんですよね。

かわいそうな存在ではない

熊：えーっと、それで…、ちょっと声を大にして言いたいのが、もちろん大変な状況であるということはそうなんだけど、かわいそうな存在ではない、というもので。

清：そうそう。本当にそうなんです。

熊：かわいそうな存在として固定されるような眼差しを向けられたときの親御さんのつらさっていうのは、私自身も結構思うところがあるんですけど、そうじゃなくって、何か支援やケアをされ続ける受け身の状況だとしても、それが積極的な意味をこの社会で帯びるということが当たり前にやっぱりあって。あのー、そのー、私はずっと教育の仕事をしているんですが、教育や学びというものを、何かが一直線に出来るようになっていくということだけの話にはしたくないという思いが強くあるんですね。だって、みんながみんな最終的には歳を重ねて、何かができなくなっていく存在じゃないですか。そうしたときに、そういった考えだけだと、教育や学びというものがそこにないということになってしまう。

清：確かに。

熊：教育学者の佐伯胖という人が、寝たきりの方と目が合ったりした際にどこか心が通った気分になって、それを「理解（appreciation）」や「感謝（appreciation）」として、それに学びというものをみているんですね。それで、「生涯のほとんどをベッドの上で過ごし、形になるものはほとんど何も遺さなかったその人の一生が、最後の息を引き取る瞬間まで「わかる（理解する、感謝する）」という、最も文化的な実践に参加していた、ということを確信した（佐伯胖「『学ぶ』ということの意味」より）」と言うんです。なんか、とても大切なことを言っているような気がするんです。

清：なるほどです。

熊：と、なんかこう、プロジェクトとしての哲学というか、人間観というか社会観のようなものを豊かにしていきたいというのが根底にあるんです。同時に、じゃあどういうところを工夫しないといけないのか？という目の付け所というか、具体的なことも同時に考えていかないといけないわけなんですよね。

ささやかなコミュニケーションで救われる

熊：たとえば、先程インクルーシブ遊具のインクルーシブではない使われ方も話題にあがりましたが、じゃあ、どんな工夫ができるんだろうか？ということも少しずつ捉えていきたいんですね。

清：これをやったから１００％大丈夫というものはないと思うんです。ただ、ひとまずこれはやったらいいなと思うのは、ブランコでも、府中の森公園がそうだったんですけど、ロープがはってあったり、わかりやすい言葉で看板があったりして、どこに並べばよいのか、誰が先頭で次の順番なのかみたいなことがとてもわかりやすかったんですね。みんなちゃんとそこに並んでいたし。ただ、難しいのは、決して身体が不自由な子だけじゃなくて、待つのが苦手で動き回っちゃう子もいたり、叫んだりパニックになっちゃうとか、そういう子もいるので、本当は、理解してくれる人が増えていったほうが良いんですよね。

熊：本当にそうなんですよね。そもそも、障がいをもった方というのが、当たり前に同じ社会に街に暮らしている。にも関わらず、その方々をあまり見かけないということは、街に出づらいということだし、いるはずの人がそこにいないということの歪さがそこにあるんですよね。

清：体験して欲しいんです。たとえば、身体の不自由な子がバギーや車椅子に乗って横になっていたとしますよね。同じ目線を体験したら、空や木がこんなに綺麗に見えるんだって発見もあるかもしれない。

熊：ああ、また別の見方や考え方をもたらしてくれる体験になるかもしれないという。

清：っていうのも、息子と一緒に公園に遊びに行ったときに、一緒にゴロンしようって言ってくれた保育園のママ友がいて、実際に寝っ転がった後に、こういう景色を見ているんだねって言葉にしてくれたんです。そっか、普通はそういうことをあまりしないなって。体験を通して世界の見え方が変わったときに、考え方も少し変わっていきそうですよね。だから、車椅子の目線だったり、視覚過敏の子の光の眩しさとか、聴覚過敏だったらどう聞こえるのかとか。だから喜んで息子と一緒に駆け付けるので、本当に息子を使って体験してほしいですよ。なんていうんだろう、ちょっとやったことあるから車椅子押しますよとか、どういうときに困るの？とか、そういうコミュニケーションが少しあるだけで、親としては、今日は外に出てきてよかったと、本当にね、心から思えますよ。やっぱり外に出てみるもんだなって。捨てたもんじゃないなって。結局、人とのコミュニケーションを通して、安心感や肯定感を積み重ねていく、うん、それが結局大事なんだと思います。

熊：清野さん。ここ栗山公園では、来年度のインクルーシブ遊具の設置が予定されています。が、それをまさに遊具の設置で終わらせないために、そういうコミュニケーションが育まれていく機会であるとか、仕組みを考えていきたいんです。ちょっと今度、改めてそのことについて会話の機会を設けさせてもらっても良いでしょうか。たとえば、ハード整備といっても、そういった大掛かりな遊具の設置だけでなくって、落ち葉を捨てないで貯めておくことにして落ち葉プールにしてみたり、みんなで共通の話題になるような鳥の巣箱とか、車椅子の方でも関わりやすい菜園とか、もうすこし細やかなアイディアを検証していく必要があると思っているんです。

清：ええ、ぜひぜひ。ここは近隣に支援施設もたくさんありますし、リハビリテーションを学ぶ専門学校もありますし、そういうところとも連携をとれたら、良い拠点になりそうですよね。

熊：まさにです。

横田宙士さん

試されることを待っているアイディア

取材日：2024年6月28日

旅行も外食も、外に出かけづらいから

横：わたしの次男が特別支援学校に行っているということもあって、周りにも知的障害を持つ子が多いんですけど、たとえば電車の中とかで、体を前後にゆするロッキングをしたりすれば、なんだあいつって見られちゃうんですよね。だから、やっぱり外出はなかなかしにくい。旅行や外食だとか、そういう街に出ることを思うと、そもそもためらう人が多い。ということで、だったらそういう人専用のキャンプ場があれば、出かけやすいし、お互いに交流もできるんじゃないかなって、長野県の佐久市でいまちょうど準備をしているんですよ。

熊：おお。そういうタイミングだったんですね。

横：それを知っててインタビューの話があったのかと思うくらいドンピシャでした。それで、そういう場所で、全国の同じような想いの人が集えたら良いし、さらには、そのキャンプ場を一般の人も羨むようなレベルにまで上げれば、あのキャンプ場行きたいよねって思う人が出てくる。所ジョージさんの世田谷ベースってあるじゃないですか。あれをデザインした人にデザインをお願いしているんですよ。

熊：へー、スゴい。わくわくします。

横：いろんな人が来てくれたら嬉しいですし、そうすると、そこで立場を超えた交流もできる。もう土地は購入してて、整地が終わったところなんですよ。それで、まさに今、そのキャンプ場の中に遊具がある公園みたいなものをつくろうと思って、遊具メーカーとやりとりしているんですね。

熊：おお。

横：2社に声かけているんですけど、それぞれともに「インクルーシブってすごい今言われてるんだけど、どんなものをつくっていいのか正直困ってる」って言うんです。だからわたしみたいな人とタッグを組んでつくるっていうのはすごくありがたいって。

熊：知見の蓄積というか、知見を遊具的なものへと反映をさせていくことの知見とでも言えるものが不足しているんですかね。

横：そうなんですよね。実は私も勉強した方がいいと思い「強度行動障害支援者養成研修」を受講してみました。そこでも、やっぱりパニックが起こってからどうするかではなくって、パニックが起きないようにどうするかという予めの対処が大事なんだって言われていて、だから、これからつくるキャンプ場も、そういう子だとか、もしくはそういう子の保護者や支援者の方々が楽しく過ごせる場のあり方をよくよく考えるっていうのは、すごく大事なことなんだなっていうのを思います。

環境がそうさせている

熊：本人やその支援者の方々にだけ努力義務を押し付けるのではなくって、そもそもパニックなどが環境要因によって起こるわけだから、その環境そのものにアプローチをしていくということですよね。

横：そうです。知的障害者はわがままだってよく言われるんですけど。

熊：え、そうなんですか。

横：はい。要するに知覚過敏で、光や音などの刺激に対する感受性が強い。イヤーマフとかをしてますけど、夏の強い日差しも苦手だったりします。だから、たとえば日陰のスペースをつくりましたってなると、「子どもは太陽の下で遊ぶものだ」とか「過保護にしすぎだ」とか言う人もいるわけですよ。

熊：うーむ。

横：そういう子たちが好きな王道の遊びは、ブランコとトランポリンと水遊びっていう3点セットなんですけど。

熊：それ、みんな好きですよね。

横：まあ、そうですよね。それで、その3つを整えてもやっぱり日差しがガーッと厳しいと、そういう子たちが安心して遊べないんで。

熊：甘えとか過保護とか、そういう話ではないですよね。要するに、そこにつらさがあるわけで。

横：はい。だから、今、考えているのは、シェードみたいなもので遊具全体を覆って半室内のようにして居心地を良くできないかなっていうものなんです。それって、一緒にいる保護者もカンカン照りの中にいるよりは良いですよね。

熊：ほんと、そうですね。

横：基本的には、障害をもつその本人ばっかりに目が行きがちなんですよね。本人だけじゃなくて、周りの支援者も同じように大変だったりする。そもそも、本人が楽しく過ごすためには、周りも楽しく過ごせてないとだめなんですよね。

熊：ああ。

違いを理解したくなる状況をつくる

横：物理的な支援も必要なんですけど、それだけじゃ足らないんですね。じゃあ、何がいるんだっていうと、やっぱ周りの人の心の理解。ただそれって、目に見えるものではないんで難しいんですよね。だからこそ、やっぱり周りの、もっと言えば一般の人も含めたみんなの心の理解を進めることができる公園というのが、究極のインクルーシブ公園なんじゃないのって、わたしは思っているんですけどね。

熊：まさに、ハード整備をして終わりではないという意味でも、本当にそう思います。

横：ただ、インクルーシブ公園って呼ばれているところに視察をしに行っているんですけど、車椅子の人でも利用できますみたいなスロープがついていたりもしますけど、要するに知的精神の方に向けてつくられてはないんですよね。

熊：ああ。インクルーシブ公園と呼ばれていても、そこには対応の偏りがあると。

横：そう。視察先でもらった資料に、「うちの子は年齢も見た目も大きいけど小さい子用の遊具がとても好きなんです」っていうアンケートの回答があったんですけど、そういうことってたくさんあるんですね。たとえば、わたしのママ友の子もそうだったんですけど、ブランコがとにかく大好きだと。ただ、並ぶのが苦手だし、1回始めるとなかなか終わらない。そうすると昼間に行くと「なんであんな大きい人が、ブランコをずっとやってるんだ」と周りからすごい白い目で見られちゃう。だから、早朝の人がいない時間にわざわざ行くんだっていう。

熊：公園で遊ぶために、時間をずらさないといけなくなっている。

横：そう。でも、そんな早朝に早起きをしていくのは大変ですから、本当は昼間に公園に行きたいわけですよ。ただ、子ども用のブランコって小さいじゃないですか。からだが大きくなった人が楽しそうにずっと遊んでいる風景というのは、異様に写ってしまうと思うんですよ。だから、その隣に大きいブランコをつくってくださいと遊具メーカーにお願いしようと思っています。

熊：キャンプ場もそうですが、まだ世の中で試されていないような具体的なアイディアをたくさんお持ちですよね。

横：こっからがミソで、そこに看板を絶対つけて欲しいわけです。ちっちゃいブランコと大きいブランコが並んでいたら、なんだこれってなるじゃないですか。それがチャンスで、いろんな人がそれを読んでくれる。たとえばそこに、そういう特性についての解説があったり、「そういう特性を持つ人にとってもその大きいブランコは良いけど、それだけじゃなくって、大人になってもブランコを楽しみたいという人も是非どうぞ」みたいなことが書いてあるという。

熊：わ、なるほど。

横：そういう解説を一方的に読んでと言っても、なかなか難しいですよね。だから、遊具や公園という場をつかって、そういう理解を深める仕組みっていうんですかね。そういうことができたら良いですよね。

熊：本当にそう思います。

どうにかしたいけど、どうしてよいかわからないという問題

横：きっとまだまだ、いろんな工夫をしていけると思うんですね。たとえば、このあいだスウェーデンに視察に行ってきたんですけど、学校のなかにタイマーもあって、残りの時間ややることがしっかり見える化されているんですよね。そうやってちゃんと見通しが立っていれば、自分から行動に移していけるんです。公園でも、遊具の順番を譲ったり、交代していくようなことも、そういう仕組があればスムーズかもしれない。

熊：なんかそこの議論があまり活発化していないように思うんですけど、どうなんでしょう。

横：遊具メーカーさんも言っていたのが、「自分たちでも、つくってるインクルーシブ公園の遊具が、身体障害者向けが主だよねっていうのは、実は気づいてます」と。法律上で言うと、障害者というのは、身体・精神・知的って3つあるわけだから、精神知的の方に向けての遊具も作りたいと思ってるそうなんですけど、要するに「どうしたらいいかわかんない」って。それって、遊具メーカーだけじゃなくて、ほとんどの世の中の人たちが同じような想いを抱いてるんだろうなって、わたしは考えているんですよね。

熊：どうにかしたいけど、どうしたらよいかわからない。

横：心の奥底では人のために役立ちたいっていう気持ちは、多くの人にあると思うんですね。でも、精神知的の方に対しては、何を自分がすれば支援になるかっていうのが全然わからない。街でそういう方を見たとしても、どう

いうふうに接したらいいのかわからない。だからなんて言うんですかね、別に嫌いなわけでもないし、やりたくないわけでもなくって、単にやり方がわからないっていう。

熊：自分も含めてそうかもしれません。

横：だったら知見を共有できれば良いじゃんっていうことで、実はキャンプ場ともう一個並行して、もっとスマートに情報を発信できるようなコンテンツをつくることも考えているんですよね。WebでもTikTokでも、世の中に発信するチャンネルってたくさんあるじゃないですか、そういうのを駆使して伝えていくっていう。公園の話とずれちゃうかもしれないんですけど。

熊：話がずれていくの大好きなんですが、とはいえ、全然ずれてないと思います。

横：やっぱり心の理解っていうものを、絶対忘れないようにしないといけない。

そう簡単には伝わらない

横：視察にいったインクルーシブ公園の利用者アンケートを見ていても、設備をがんばって整えているのに、「この公園は、障害者も一緒に遊べるようなことを目指してつくられたってことをご存知ですか」みたいな質問に対して、3割しかYESって答えてなかったんですよ。すなわち7割の人には想いが届いていない。

熊：なるほど、難しいです。

横：要するに、物を整えればいいという話ではないんだよねっていうことを表してもいるんだろうなって。

熊：だから周知っていうか、そういうことを伝えていくメディア的な活動の必要性を感じられて行動に移そうとされているというわけですよね。

横：そうですね。今はこれだけネットだとかで情報が溢れているのになかなか届かないし、伝わらない。だから、そういうこともやらないといけないんだろうなって。わたし、今回こういった事業をやるために消防士を辞めて。

オープンな仕組みの必要性

熊：え、消防士を辞めてまで、、、というのは、やっぱりご自身のお子さんのことも考えて、という。

横：それもありますが、わたしの姉がダウン症で、生まれたときからもう家族に障害者がいたわけなんで、昔から家族会のようなものに参加したりしてたんですね。だから、一般の人たちに対しての理解を進めていかないとなんだろうなとずっと思ってました。だからまあ、障害者との関わりがないような人たちにも理解をどう深めてもらうのかっていうのが究極の問題解決だから、そこにうまくアクセスできるようなシステムっていうんですかね、そういうものができたらいいなって。

熊：そうですね。そのシステムとおっしゃっているような、仕組みや制度のようなものにある程度は落としこんでいかないとなって感じているんですね。というのも、合理的配慮という言葉もありますが、誰か個人の配慮というか思いやりがあるかないかというように問題を捉えるというよりも、配慮を調節と言い換えている文献もあったんですけど、目が悪くなったらメガネを掛けるというような、ある意味あたりまえのこととして調節していくような社会のシステムがうまいこと構築されているかどうかという視点で考えたいな、と。ちょっと分かりづらいですが、ただまあこのプロジェクトを小金井市という行政の仕事として捉えたときには、そういう視点は外せない気がしています。もっと言うと、システムと言ったときに、それを再現性と呼び替えても良いんですが、まさに「物」の話の方が簡単なんですね。インクルーシブ遊具を、ここあそこに買って置きます。それを増やしておきますって。でも、このプロジェクトでは、「物」の話で終わらせないで、まさに、横田さんがおっしゃる心への理解だったり、人の関わりといったところに目を向けているという感じなんです。それをいかに仕組みにしていけるか。そのための論点というかキーワードを一生懸命抽出しているところです。

横：「play here」の資料にもあった「遊具に頼らない遊びの例」というのも良いですよね。

熊：そうそう、ありがとうございます。大きなインクルーシブ遊具の整備だけを論点にしなくても良いということを表したくて、「遊具に頼らない遊び」というものもたくさんあるよねって言っています。花壇や菜園もそうですし、キュウリなんかを植えて植物のトンネルのような日陰をみんなでつくっても良いかもしれませんし、落ち葉を捨てないで貯めておいて落ち葉のプールのようなものがあっても良いかもしれません。なんなら、木陰やそよ風を楽しむだけでも良いはずなんですよね。大きなハード整備じゃないところに目を向けると、まさに人と公園、人と人との関わり方に意識が向いていきやすくなる気がしています。

横：その通りだなと思います。

熊：なんか結局、大きなハード整備だけを論点化していくと、お金の話に直線的に直結していくんですね。遊具一つで1000〜2000万円かかってくる。整備したとしても、その後の維持管理コストも発生していく。そうなると、財源があるかないかで話が終わってしまうんです。もちろん、そのあたりもしっかりと議論していきながらですが、大きなハードに頼らない遊びの大切さもしっかり論点化していかないと、「関わりしろ」のようなものがなくなっちゃうんですよね。「遊具が欲しい」「でも、お金がない」って、議論がそこで終わってしまう。そうじゃない議論の筋をちゃんと豊かにしておきたい。そういう想いが強くあります。

横：資料にも、「本来、子どもたちは何もないところから遊びを生み出す創造性を発揮する存在であるはず」ってありますよね。確かにその通りなんですよね。

何が伝わると良いのか

熊：さきほどから、なかなか伝わらないという話もあがっていますが、これはまず伝わると良いなっていう話ってありますかね。

横：うーん、やっぱりいろんな行動には理由があるということなんじゃないですかね。

熊：理由。

横：イヤーマフは、音への感受性が強いのでそれを和らげるためですけど、他にもヘッドギアをしている人もいますよね。あれは、てんかんで倒れた時に頭を打たないためです。そういうのは理由を知らないから奇異に見えて、変な人ってなっちゃうから、やっぱりその理由をちゃんと伝えていくようなシステムがあればいいなって。

熊：ああ、確かに知る機会がないように思います。

横：他にも、からだを前後に揺らしたりして同じ行動を繰り返すロッキングというのも、身体的に結構気持ちいいというかしっくりくるようなんですよね。

熊：なんか、そのしっくりくる感じはわかる気がします。

横：まあ貧乏ゆすりみたいなものですからね。公園で言うと、ジャングルジムとかの高いところに登って、うわあうわあと叫んでいるとする。これは、眺めが良くて気持ち良くて大声を出しているわけです。

熊：山登りして、頂上でやっほ〜ってやっているのと同じですね。

横：そう。でも、シチュエーションが公園だと、そういう特性を知らない人からすると、近寄っちゃいけませんよみたいな反応になるわけです。

熊：ああ。

横：だからまあ、そういった行動には理由があるということがわかるような情報提供があれば、なにも周りをびっくりさせようとしているわけじゃないし、楽しんでいるんだったら、一緒に楽しんじゃおうかなみたいなことになるかもしれないじゃないですか。

熊：楽しい気持ちって、伝播したりしますしね。

横：そうそう。ほら、日本人特有の他人に迷惑かけちゃいけないみたいな美徳みたいなものがあって、迷惑をかけるくらいなら、そもそも公園に連れて行くべきじゃないみたいな自主規制のような空気が昔はよくあって、まあ、今もあると思うんですけど、一般の人も接する機会もなくなっていく。それが悪循環。保育園や幼稚園や学校のことも考えても、当然、障害に配慮した教育は必要だと思うんですけど、離し過ぎちゃうのも、ちょっとやりすぎだよねって思うわけです。ちょうどいい距離感、もしくは、ちょうどいい壁の高さってあると思うんですけど、日本はその壁が高すぎる。

熊：お互いに見えなくなっちゃっている。

横：そうなんですよ。障害者ってレッテルを貼られた時点で、もうそのレールにもう完全に乗せちゃおうとするというか、一般の人とはもう切り離された存在みたいなところに追いやっちゃってると言うんですかね。

同じ人間同士であることを忘れないために

熊：どういう公園にすべきか？という話は、ほとんど、どういう社会にしていきたいか？という話と同じになってくると思うんですね。なので、そのあたりのこともしっかり考えておきたいです。

横：視察してきたスウェーデンでは、それこそ保育園や幼稚園から一緒なわけですよ。一緒に混ざっているわけですけど、配慮するべきところは分けて、配慮が届くようになっているんですね。学校も、日本だと特別支援学校と普通の学校って完全に場所も建物も別じゃないですか。ところがスウェーデンは必ず一緒なんです。同じ敷地内に普通学校と特別支援学校があって、つながってるんですよ。うまくそこを行き来できるようにできてるんですよね。だから、たとえば運動会とか音楽会とか、そういうのはもう基本一緒にやるっていう。でも配慮が必要なときはうまく分ける。そこの線引きというか、壁の高さが絶妙なんですよね。

熊：なるほどです。

横：ところが日本では、区切りたがるし、分けたがる。でもお風呂の温度とか料理の味付けだって「丁度いい」ってあるじゃないですか。だから、精神障害がある方向けのグループホームの建設が、その地域の9割の住民による反対運動で頓挫するみたいなことも起こるんですよね。

熊：胸が痛いというか、区切って切り離して、見えないところに追いやりたいとしてしまうことの歪さは感じます。

横：反対運動をしている側の言い分を読んだりすると、子どもたちの安全を守れとか、地域の安全を脅かすなってあって、障害者のことをライオンかなんかだと思ってんのかなって。

熊：笑えないです。

横：ただそれは要は多分情報がないからだと思うんですよ。さっき言ったように距離感が遠すぎるから、知らない人間のことを怖い存在って、やっぱり思っちゃうと思うんですよね。

熊：うーん。

横：知らないが故に怖いという感情が出てくるんだから、だったらちゃんといい面も悪い面も正しく伝えるっていうことが必要なのに、さっきもちょっと言ったように、精神知的障害者に対する正しい情報を発信するコンテンツが日本では非常に少ないんですよね。だからそういう反対運動が起きるっていうのも、ある意味必然なのかなと思ってね。

熊：うーん。

横：ただ、そういうコンテンツを用意したところで、ほとんど誰も見に来ないよって、いろんな人に言われています。そもそも興味がない人は自分から見に来ないって。

熊：うーん。

横：だから、公園に話を戻しますけど、いろんな人が集まる公園というものが、そういうことを知るきっかけになる場になれば嬉しいというか、社会的に意義のある取り組みになっていくんじゃないかなって思いますよね。

熊：ああ、公園という場を、ひとつのメディアやプラットフォームとして捉えて、伝わるべきメッセージを乗っけていくということの必要性があるということですよね。

横：そうです。

保護者の学びと交流の場

横：姉のこともあって、昔からダウン症の親兄弟の会っていうのに入ってて、そこで仲良くしてる人で、療育施設のセンター長をやってる人がいるんですけど、そこに見学に行ってきたんですね。療育施設って、専門家の人が一時間くらい、その子どもと遊ぶんですけど、大抵マジックミラーになってて、保護者がその様子を見られるようになっているんですよ。それで、たとえばその子どもがこんなおもちゃ嫌だって、おもちゃを投げたりしたときに、その対応や接し方の参考にできる。

熊：なるほど。そもそも、それこそ子育ての様子も普段はなかなか見る機会がないから、知る機会が必要ですよね。

横：大人にとっても学びの場なんですよね。小金井の児童発達支援センター「きらり」にも、同じように保護者の待合室があって、一時間の枠で2人とか3人とかの子どもを受け入れているんで、保護者同士の交流にもなりやすいんですよね。

熊：なるほど。公園がそういう、大人の学びだったり交流の場として機能したら良いなって素朴に思っちゃいました。

横：そういうポテンシャルがあるはずですよね。

自分たちごとにしていくために

横：そうそう、この間、そこの小金井橋で1人で自転車で待ってたんですよ。そうしたら、生活実習所っていう大人の知的障害者のための施設があるんですけど、その支援者の方が二人、先頭と後ろにいて、それに挟まれるように5、6人かな、利用者の方がいて、晴れているけど長靴履いていたりとかして、まあ奇異に映る集団ではあるんですよ。「お疲れ様です、わたしもお世話になっているんです」なんて一声かければ、支援者の方も、うんそうなんですかってなったと思うんですけど、ちょっとそのときは気が回らなくて、ちょっとチラチラ見るぐらいで終わっちゃったんですね。だから、支援者の方からすると、そのわたしのチラチラが、奇異な眼差しとして感じられちゃったかもなって。それで、そのときに思ったんですけど、自分が協力的で少なくとも理解をしようとしてますよってことを表せる何かがあったらいいなって。

熊：なるほど。

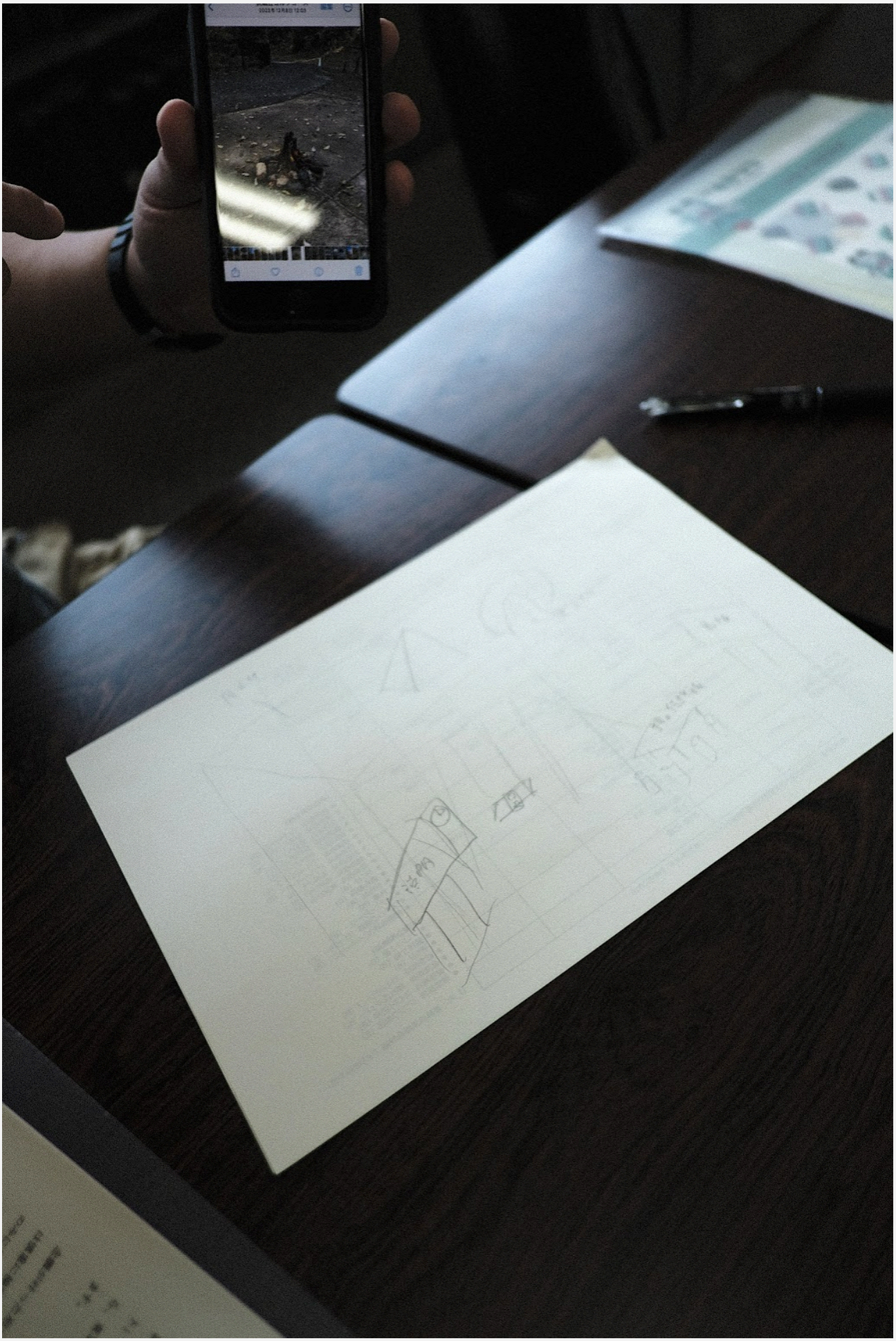
横：たとえば、電車の中でも、そういう方がいたときに、もしなにかあったら手伝いますよみたいなことがわかれば、ちょっと嬉しいじゃないですか。

熊：なるほどなあ。

横：ひとつのヒントになるかもしれないんですけど、3月21日って、国連が制定した「世界ダウン症の日」なんですけど、スウェーデンでは「ロッカ・ソッコールナ」って言って、みんなで左右違う色の靴下を履くんですね。結構普及していて、その日は、大人も子どもも、それこそ総理大臣もみんなでそうすることで、そういう理解を社会全体で深めていこうとしているものなんです。「ロッカ・ソッコールナ」って、直訳すると「靴下でロック」で、要するに「左右ちぐはぐの靴下で社会を揺さぶる」という意味がこめられているんですよね。

熊：なんか素朴な感想として、そういうのかっこいいですよね。それと、うーんと、なんと言いますか、なにか答えなるものを欲しいとしたときに、あんまりパターンって無い気がしているんですね。答えを持っていそうな外の人に教えてもらうか、自分か自分たちでどうにかするということだと思うんですけど、地域のなかに詳しい人や想いがある人が必ずいらっしゃるはずだから、そういう方々と答えを一緒につくっていくようなことをしたいと、このプロジェクトでは強く感じていたんですね。それでまあ、当事者の方々が詳しいということは、ある意味でいうと、そうせざるを得ないような状況だったとも言えると思うんですけども、とはいえ、とにかくじっくり話を聞かないことにはということで、このインタビューを続けているんです。それで、横田さんって、まだ2時間も経ってないですが、まだ日本で試されていないけど、でも試したほうが良いアイディアみたいなものをたくさんお持ちだなって思って、さらに素朴に思ったのは、それらを少しずつ試行錯誤して、より良い状況に近づけたら良いじゃんって感じちゃいました。試されるのを持っているアイディアがたくさんあるって。

横：いろいろとやってみたいんですよね。



遠山敬子さん

あたたかい眼差しさえあれば

取材日：2024年6月28日

あたたかい眼差しさえあれば

遠：「play here」の資料を読んで、自分が感じてきた生きづらさと、不便さと、それと疎外感とかが言葉にされてるのを初めて見たなって感じました。

熊：たとえば特にどのあたりが印象的だったかということをお聞きしてもよいでしょうか。

遠：今、息子のママになってもうすぐ10年で、それまでは自分はマジョリティー側で生きてきたわけなんですけど、子どもができてマイノリティになって、そっち側にいたときは気がつかなかったことがたくさんあって、無意識にやってきたことが、生きづらさとか不便さというものを生んでしまっていたんだなってことが、客観的に理論的に言葉にするとこうなるんだなっていうのをまず感じました。

熊：それは、『「社会」を扱う新たなモード　–「障害の社会モデル」の使い方』という書籍から引用しているところあたりですね。このインタビューの依頼があったときには、どのようにお感じになられましたか。

遠：10年経って、やっと来たかって。遅いなっていうのと、ありがたいなっていう両方の言葉がわたしのなかに浮かんで。

熊：ああ。

遠：子どもが小4になって、私だけだったら対応できない大きさとか重さになってきているんですね。それと、平日は人が少なくてストレスがないんですけど、土日に自分1人で遊びに連れて行くとなると、なにかこう、人々の目に殺されるっていうか、つまり、どんな公園があったとしても、その子たちへの理解とか、親の気持ちの汲み取りとか、少しでもそっち側の発想になるきっかけがないと、行きにくい。

熊：突きつけてくるような眼差しに晒されることの生きづらさ。

遠：そう。いろんな目で子どもが見られる。本当に見たことないような怖い目で見てるよっていうことを伝えたいっていうのが本音です。

熊：そういった目が、公園に行きづらくしている。

遠：そうですね。公園でなくても、道を歩いてるだけでもそうですね。うちの子はダウン症なので、やっぱ顔つきが特徴的というのと、もうある程度大きいし歩き方も不安定なので、まず公園の中の遊具に行くまでが一苦労っていうか、だからまあ、一つ一つがちょっと目立っちゃう。で、あと、こだわりがあるから遊べる遊具が限られて、ずっとそれをやってる。

熊：ずっとやれちゃう。

遠：うん。他の子どもたちに譲りづらい。だから、「貸して」って言われて対応をするのもキツくて、結局、わたし一人で公園に連れて行けなくなったというのが現状で、わたし一人で連れて行くと心がやられるから。

熊：心がやられる。

遠：そういう困り事を、いろんな人と交流して自分でいろんな人に伝えてくださいねって言われたとしても、絶対嫌。

熊：心がもたない。

遠：もたない。

熊：お聞かせいただける範囲で、お聞きしたいんですけど、やっぱりそういう眼差しのつらさとかも含めて、ある種当事者じゃないとわかり得ないものって当然あって、だからむしろ簡単にというか安易に理解を示されることのつらさもあるというニュアンスもあるんでしょうか。

遠：みんな、多分言ったらわかってくれるんだろうけど、想像を絶する世界…だから、何から伝えたらいいのか正直わかんないです。

熊：ああ、ありがとうございます。今回のインタビューの趣旨というか、インクルーシブな公園を目指すとなったときにまず本当に何をすべきなのかという問いに応じようとしてくださっているわけですよね、今。

遠：そう。スロープがあったり、遊具がインクルーシブ対応していたりすることがベストなんだけど、その前に捉え方とか、向ける目を気をつけてねってところがないと本当の解決にはならないです。

熊：おっしゃる通りと思っていて、ハード整備をしてお終いではないはずで、そういう理解というものが促進されることが必要って、強く考えているんですね。それで、えっと、そうしたときに、行政施策とかでよくあるのが、地域の方に集まってもらって、当事者の方の話を聞く勉強会というか講演会のようなものなんですけど、それはそれで重要な機会であると思いつつも、一方で、常に、当事者の方々が説明責任のようなものを背負わされるというか、その説明や説得のようなことを、当事者の方々に丸投げするようなことは違うよなとも思っているんですね。それで、気になったのが、先ほど、「色んな人と交流しながら、困り事を説明してください」みたいなことも心がもたないという話をされていて、そこにある切実さというか、そのあたりのことをもう少しお聞きしたいです。

遠：やっぱり外へ出たら、自分のかわいい子が、怖い目で見られるということが、シンプルに傷つく…。それが、積もり積もって…、うん、トラウマになっちゃった。

熊：うん…。ちょっとごめんなさい、言葉が出ません。

小：わたしは、妹が知的障害をもっていて、その向けられる目というのは、わたしも経験をしていて…、いま、せっかく仕事をさせてもらっているんで、ひとりでもそういう方が公園に来たら、ちょっと落ち着けたり、その後の家事とか育児とかをがんばろうと思えたりとか、そういう場を公園ならつくれるんじゃないかなと思って…。

熊：小金井市の小林さんとわたし二人して…言葉が完全に詰まりました。

小：すみません…。気持ちがわかると言いたいんですけど、でも障害といっても個人個人に違いがあるし、それぞれ気持ちも違うので、たとえ同じ境遇だとしても感じ方も違いますし、だからその…完全にわかることができているかというとそうは思えなんですけど、だけど、こういったプロジェクトやチームを通して、しっかり伝えていくということが本当の目的だとも思っているんですね。そういったことは、これから生まれて来る子もたくさんいるんで、時間がかかるからこそ、早くはじめて浸透させて、少なくともせめてこの地域だったら理解があって良かったって言えるようにしたいって…。

遠：そうなったらすごいですよね。そう…、涙が止まらなくなるくらい…、そのくらいの大変なことだっていうことなんですよね。そういう目線に関しては難しいですけど…うん…福祉関係の人とか、そうかなみたいな子のママとかは、やっぱりお互いにニコニコするからわかる。後から、やっぱりそうなんですねってなります。

熊：そうですよね。だから、そういうあたたかい眼差しが交差する状況を目指したいと思うんです。

遠：うん…。今は、そういう子を目にする機会がなかなかなくて、だから一瞬怖いと思うから、そういう鋭い目を向けるんだと思います。

熊：普段接する機会がないから、目つきが鋭くなる。その鋭い眼差しによって、そういった方々がますます外に出ることが出来なくなる。そうなることで、より一層、普段お互いに接する機会がなくなる。これって、悪循環ですよね。それで、その悪循環を断ち切るために、そういう眼差しを向けられている側に、気にしないようにしましょう、我慢しましょうとは言えないです。でも、その悪循環は断ち切られるべきだとも思います。

遠：わたしからは、思っている以上に鋭い目つきをしているかもしれないから、ちょっと意識をしてくださいねって感じの言い方をするくらいがやっとで。

熊：なんというか、当事者の方々からお願いされないと変わることができない状況というのも、ちょっと違うというか、先程の説明責任を一方的に背負わせるのも違うという話と同じように、そもそも当事者の方々が懇願というか、お願いをしなきゃいけない状況そのものを変えていかないといけないような気もするんですよね。お願いをする・されるではなくって、それぞれの経験や想いを持ち寄って一緒に、より良いものをどうやって実現していけるのか、っていう。

トイレという、いろはのい

遠：わかりやすいところで言うと、トイレが...。

熊：そうそう、「みんなのための公園を」ってなっても、インクルーシブ遊具ばかりに目が行ってしまいがちで、そう、そういうところなんですよね。

遠：きれいな車椅子用のトイレがあるのは必須です。うちの子は日中はオムツがとれてますけど、外に出るときは、うんちなのかおしっこなのかわかんないとかで間に合わなかったり、他にも待っている人が並んでたりとかで漏らしたら、もう、うわあああああってなるから、オムツしてるって感じで。歩行を補助する装具もゴツいんで、トイレにベッドがあって、ちょっと座らすことができないと、もうオムツ替えは無理。

熊：ベッドが必須という声は本当に良く聞きます。なかなか身近な公園での整備が追いついてないですよね。

遠：そう。赤ちゃん連れも来るし、時間もかかるから、本当は2つぐらいあったらいいなって。

熊：今だっていうときに入れないと...ですもんね。

遠：はい。それと、男性の方って個室が少なくてオムツ替えスペースがなかったり、あってもそもそも少ないことってめっちゃあるから、パパ1人のときはパニックみたいになったり、2人でいても結局なかったよってことでママが連れて行くことになったりします。だから、ベッドがオムツ替えのために必須で、ベッドがなくても着替えるための台みたいのでもすごい助かる。

熊：空港のトイレとかにある、靴を脱いで上がる「チェンジングボード」みたいなやつ。

遠：うん。女子だったら、ストッキングが伝線したときに使ってくださいねみたいな感じで、女子の方の個室には結構あるんです。

熊：あ、そうなんですね。

遠：それが男子の方にもあると、パパが連れてても困らない。

熊：そうか、なるほどです。このプロジェクトでも、トイレのユニーバーサルベッドの必要性というのを重く受け止めていて、なので公園の既存のトイレに追加で設置しようという動きもとっていたんですね。でも、そもそもトイレが狭くてベッドが置けないという現実に直面していたんです。トイレを新設する際には、だからそのあたりも考慮していかないといけないと感じているんですが、一方で、今あるトイレをどう活かしていくかということも考えないといけないとも感じていたんですけど、ベッドが置けないからお手上げとかじゃなくて、そういう台があるだけでも、少しはマシになるかもしれないということですよね。

遠：公園のトイレって床が汚いから、そういう台とかで、床から一つ上がったところがないと、オムツ替えとか無理ですね。

街や公園に出れない、家族と一緒に遊べない

熊：うーん…。少し想像しただけでも、先程の鋭い眼差しを浴びるということや、人間の生理現象でもあるトイレもままならないとなったときに、心が折れるというか、どうやって公園や街なかに出掛けることができるんだろうかって。

遠：なので…まず…出ない。それでわたしが今、鬱になっちゃったので、まず出ない。子どものためにってがむしゃらにやってきたら自分が倒れちゃったから、今、自分のために出ない。

熊：ああ…。

遠：「移動支援」っていう支援があるんですけど、一対一でヘルパーさんが余暇活動をしてくれるんですね。公園でも遊んでくれる。うちの子は今10歳で、去年から利用し始めたんですね。土日は家にいても弟くんもいるし、家にずっといてもつまらないだろうし、だからヘルパーさんに吉祥寺とか、それこそ府中の森公園のインクルーシブ遊具のところに連れてってもらって、わたしは回避できている。土日の人混みの人の目と、トイレの困難さを。

熊：心やからだが壊れてしまわないための、瀬戸際の方法って感じがします。

遠：なんですけど、その移動支援をしてくれていた事業所が経営困難で潰れちゃって、必死でまた探して、また見つけてっていうことをしていたんですね。まず、そういう事業所が潰れるのがおかしくないかっていう。

熊：正直に言うと、こうやってインタビューをしっかり重ねていかないと、その逼迫した感じでの移動支援の重要性というものには意識が向かなかったんですね。でも、よくよく考えてみたら、公園のなかだけを整備して、「みんなのための公園です」なんてやってたとしても、そもそもにたどり着けない状況があるというのは、あまりにも切実で、そこを直視しないことには、このプロジェクトも絵に描いた餅だなって、強く感じました。

遠：子どもが今は連れていける大きさだけど、中高生とか大きくなった子の親はもっと困っていると思います。

熊：そういうことなんですよね。えっと、遠山さんの上のお子さんが10歳で、下の弟さんがおいくつなんですか。

遠：2歳です。

熊：うーんと、そうなってくると、一緒に出掛けるということがかなり…。

遠：歩行が不安定なお兄ちゃんと、2歳の弟くん、どっちも遊ぶときには補助が必要で、同時にというのは不可能です。

熊：どうしてもそうなりますよね。

遠：お兄ちゃんだけ移動支援で行って、弟くんはわたしと家や近所で遊ぶとか、逆に弟くんを土曜日の保育園に入れたりとか…。

熊：やりくりをしないといけないことが膨大過ぎます。

遠：どうしても弟くんもお兄ちゃんと遊びたいってなるし、遊んで欲しくもあるから、3人で遊ぼうと思ったら、移動支援のヘルパーさんに来てもらって、同じ公園で一緒に遊ぶ。

熊：それって、鋭い眼差しが注がれてしまうという話もありつつ、それと同時に、子どもたちの命を守るというか安全管理という意味でも、物理的に無理があり過ぎるというか。

遠：お兄ちゃんがギリギリ乗れそうな大きめのベビーカーを買って、弟くんが走ったら、それにお兄ちゃんを乗せて追いかけようかなとか、最初考えてて。

熊：そこまで…。

遠：そこまで考えなきゃいけなくて。でも、弟くんはイヤイヤ期だから、もう全部イヤイヤってなるから、結局、実質無理。だから、パパの仕事が休みのときに、大丈夫だったら連れていってもらって、パパがお兄ちゃんを遊具に乗せたりとかしてくれますけど、パワー的にもわたしだと大きさ的に無理になってくるから。

熊：そうですよね。

潰れるまでいかないと、支援を求められない

熊：んーっと…これ、ここまで少しお聞きしただけでも、心が折れるというか、潰れるというか、一人の人が背負うことができるキャパシティをかなり超えているというか…。ちょっと安易な質問な気もしますが、みなさん大丈夫なんでしょうか。

遠：わたしは大丈夫じゃなかったというか、最初は自分の子を他の人に任せられないよって思ってたのが、病んじゃったから、もう抱えていたものを強制的に手放すことができたようなものですけど、他のママたちは、うちぐらいにいろんな支援を利用してないと思います。自分がやんなきゃとか、自分がみてないとかわいそうだからっていう気持ちが勝っているから。利用したくても、ヘルパーさんが足りなくて利用できないという方も、もちろんいらっしゃると思いますけど。

熊：んー。いやでもそれって、なにかこうギリギリの線にいらっしゃる方が多いという状況ではあるじゃないですか。言い方が適切じゃない気もしますが、遠山さんは、要はぶっ倒れたから、そこで初めて自分自身をケアすることにやっと踏み切れたわけですけど、逆に言うと、ぶっ倒れてなかったら、もう、それ死んじゃうよみたいな話になってくる。

遠：結局、子どもを生んだときから無意識に、一人目だったから健常児を育てたことがないなかで、お母さんだからこういうもんだと思って生きてきて、二人目が生まれて全てがやっつけの状態で崩壊して鬱になって倒れてやっと、普通の生活をしてなかったんだって初めて気づいた。ご飯も洗濯も掃除も別に何も完璧じゃないのに、母親として完璧にやらなきゃって思い込んで、決め付けて頑張っちゃってた。お母さんだからこういうもんだとして生きてきて、子どもを可愛がって世話してきたこと、それが崩壊したときに、そもそも自分がオーバーワークだったんだって。そう言いたかったんだけど、言えなかった。というか、そう思いもしない。

熊：発想の選択肢に…。

遠：そう、発想にも浮かばなかった。けど、そうだという現実がある。ランチ会とかでも、喋り倒して愚痴愚痴は言うから気づいてそうで、やっぱり気づいてない。頑張っちゃってるから。

熊：愚痴は言うかもしれないけど、もう自分のことを気に掛ける余裕もないし張り詰め続けている。助けてなんて言う選択肢も発想も浮かばない。そもそもオーバーワークをしないと子どもたちのケアができる状況じゃなかったから、そのオーバーワークがデフォルトになって、その異常さを感知できない。

遠：子どもが言えない分、今、喉乾いてないかな、お腹空いてないかな、トイレ大丈夫かなって。怪我したら、どこが痛いのかなって。風邪でも、喉が痛いとか、お腹痛いとかもすぐはわからないし、鼻水出てるから、多分鼻と喉がきついんじゃないかって。そんな発想で全部汲み取って、拾い上げて…。

熊：常にそういうことを、息つく暇なく気を回し続けなきゃいけない状況なわけですよね。

話を聞かれる機会がない、話を本当に聞くということ

熊：今日のこのインタビューの冒頭で、「10年経って、やっと来た」という感触を寄せてくれたじゃないですか。やっとこういう取り組みが始まったということと、やっと話を聞きに来たということ。その両方の意味で受け止めていたんですね。話が巻き戻ってしまうんですが、そのあたりのニュアンスをもう少しお聞きしたいのです。

遠：それはもう、全部。

熊：全部。

遠：なんかインクルーシブ公園って最近いろいろとできてきているから、行ってみると使いやすいなとか、うちの子が初めて高くブランコ乗れたわとか。

熊：ああ。

遠：うちの子は体幹が弱いから、これまでちょっとしかブランコができなかったんだけど、インクルーシブ遊具のブランコって、ガシャンってからだを固定してくれるから、すごい高いところまでいけて、すごいニコニコになって、ああ、すごいわって。だから、もうちょっと早くからそういう公園があったらよかったなって。「やっと来た」ということで、でも、別に遅いよって責める気持ちはないですけど。うん。なんで…、ありがたいし。あと、うちの子は、4歳ぐらいで歩いてるので、そもそも公園を抱っこで回ったり、滑り台に乗っけて、ちょっと滑れるかなとか、そんな感じだったけど、たとえば自閉症の子たちだったら、多分2歳とかからバンバン遊べるから、その視点で話せる人もたくさんいるし、話たいだろうし。うん。だから、そういう感覚です。

熊：これまでにない笑顔を見るとか、初めてのことが叶うというのは、何事にも代えがたいものがある気がします。それで、えっと、このプロジェクトで気にかけていることでもあるんですが、話を聞くということが、いったいどういうことなのかっていうところを、ちゃんと考えていくと、結構難しいことだと思っているんですね。それは、今回のようにちゃんとじっくりお時間を頂いて聞くという深さと、いろんな人からちゃんと聞くという広さという意味でもそうなんですけど、大事なのが、話を聞いた後に変わる覚悟があるかどうかというところで。変わるというのは、自分たちが話を聞く前と後ではちょっとまた少し別の人になっているというか、そういうことの連続なんですね、このインタビューの取り組みが。で、それだけじゃなくて、プロジェクトそのものも、お聞きした話を解釈して反映して、やっぱりそのプランや考え方を更新していかないといけない。自分たちもプロジェクトも、変わる気がないのに話を聞くことって、めちゃくちゃ失礼なことだと思ったんですよ。だから、なにをもって話を聞いたこととするかっていうのが、とても繊細なことだと感じているんです。

ここに居てもいいというメッセージをどうやったら伝えられるか

熊：それで、それこそ今日お話をお聞きしながら、たとえば「眼差しに殺される」といったことが、もはや比喩でもなんでもなく現実味を帯びる言葉として、自分のなかで響いているんですね。で、それってつまり、「包摂」という意味をもったインクルーシブという言葉の反対側にある「排除」という言葉にもつながってくる。だから、体感として「ここに居たい」とか「ここに居てもいい」という安心感が奪われてる。

遠：はい。

熊：トイレとか遊具とか、そういうことの整備であるとか、移動支援のようなことへのケアの必要性ということも前提に置きつつ、何ができるんだろうって。それで、今回、大きな遊具といったハード整備で終わらせないというためにも、菜園とか花壇、鳥の巣箱とか、まあそういった中規模、小規模な工夫も視野にいれたいと考えていたんですけど、やっぱりそういったものを、みなさんと一緒にできないかなって。

遠：うちの子は、公園をただぐるっと回るだけでも楽しくって、そういう意味でもお花っていうのはすごく良い。

熊：そうそう、「play here」で言っている遊びって、なんというかお散歩とか日向ぼっことか、そういうことも含めてのものだと思うんですね。だから、ただ別になにもしないことの自由だってあるし、風が気持ち良いなってだけでも良いし。それでですね、その花壇とか鳥の巣箱とかをつくる作業を、作業そのものが出来るできないは置いておいて、一緒にできないかなって。そうすることで、その子や保護者の方との公園との関わりが、ちょっと踏み込んだものになるから、少しでも「ここに居ても良い」と感じられる機会にならないかなって。みんなで一緒につくるというか、そのスタートの時間をともにできたら、そのあとは、ああ、あの花が咲いたかなとか、鳥が来てないかなって、公園にいくきっかけにもなるし、人と人が会話するきっかけにもなるでしょうし。

遠：それ、いいですね。

熊：大きな理想を持ちつつ、小さくちょっとずつ、やってみたいんですよね。

中山雅和さん

理学療法や作業療法の知見を地域にひらく

取材日：2024年7月12日

必要としている人たちに届く仕組みを

中：子どものリハビリに関わり始めて、もう十数年ぐらいになるんですね。小金井市の児童発達支援センターの「きらり」さんでお仕事をさせていただいたのが最初で、それは非常勤で今も続けてるんですけども、そのなかで親御さんともいろんな話をする機会があって。親御さんも通い始めは、やっぱり当然ショックを受けておられている状況ではあるんですけど、リハビリのプロセスのなかで子どもが成長していく姿を見るにつれて少しずつ安心されていきますし、その中でご自身のお子さんの現状を受け入れていくっていう。そういう流れを見る機会がたくさんあったんですね。

熊：ああ、そうか。とても切実で、大切な支援ですね。

中：ただ、そういった支援センターにアクセスすることができるお子さんや親御さんたちはそうなんですけれども、今、小学校などの環境のなかでグレーゾーンに立たされているお子さんたちが本当にたくさんいる。でも、どこに相談していいのかわからないとか、或いはその相談に行くことで、自分の子どもがそういうレッテルを貼られるんじゃないかっていう不安でもって踏み出せない親御さんも地域には多くいらっしゃるんじゃないかなって思っています。なので、そういう支援センターとかにも全く接点がない親御さんや子どもさんにも向けて、関わりをどうやって広げていけるかなってことも考えてきたんです。

熊：支援を必要とされている方が潜在的にとても多いけど、なかなか接点を持ちづらいと。

中：はい。たまたま知り合いの方で、小金井市内に住んでる言語聴覚士さんがいらっしゃるんですね。その方が、言語聴覚士の仕事をやりつつ、自分でカフェをやってるんです。そこが「まちの保健室」みたいな感じになっていて、近隣に住んでる方たちが、少しずつ集い始めています。そうすると、自分の子供の不器用さがちょっと気になるとか、言葉がちょっと遅いんじゃないかとか、そういう話が出るようになってきて、その流れで「理学療法士さんにみてもらえるよ」っていうことで、わたしも時々そこに呼ばれて、親御さんからの相談を受けるという機会が、どんどん増えていったんですね。

熊：接点がなかっただけで、良い出会い方をしていれば、その必要性というものが具体的になっていくという。

中：そうなんですよね。ADHDやダウン症のお子さんを持つ親御さんも多くいらっしゃるので、次第に、勉強会をやってほしいっていう話が出るようになりまして、どういう関わり方が必要かっていうことを集まってくださった方々にお伝えしていくことになったんです。そうすると、どんどんいろんなお子さんや親御さんとつながるようになっていく。ですけれども、自分一人の力で続けていくのには限界がありますし、そもそもカバーできる幅も狭いなと感じていたんです。そういったなかで、今度はその言語聴覚士さんが所属してる訪問リハビリの事業所から、非常勤でいいから関わってくれないかっていうお話をいただいたんですね。

熊：おお。必要性に突き動かされていっている感じですね。

中：訪問リハビリであれば保険が適用になりますし、やっぱりそういう制度があったほうが支援を受けやすくなっていくっていうところがあって。たとえば本来ならば診断がなかなかつかないようなお子さんたちにも、お医者さんと相談をしながら訪問リハビリができるようにしていて。

熊：グレーゾーンの状態って、制度的なカバーも難しいのでそういうコーディネーションも求められますよね。やっぱり制度的な担保があると、活動は続けやすいですか。

中：はい。今、月に1日のペースですけども、訪問リハビリの制度を活用して、5件くらいのご家庭に関わらせていただくことが叶っています。

熊：えっと、中山さんは、社会医学技術学院の理学療法学科長補佐というお立場もお持ちですけども、学校で理学療法士を目指す方々に向けた先生もやりつつ、そういった活動をされているんですよね。

中：そうです、そうです。

公園と、そこにいる人の重要性

中：お子さんに関する理学療法の関わりって、歩けるようになるまでがゴールになりやすいんですけれども、本当の問題って実はその後にあることが多いんです。お友達のように速く走れなかったりとか、ジャンプができなかったりとか、そうすると日常の集団生活の中でも、置いてかれてしまう状況が出てくるので、訪問リハビリでは、そういうところをみているということが多いですね。

熊：暮らしや生活ということを考えると、丁寧にそれぞれの状況にみあったゴール設定をすることが求められるということですよね。

中：そうですね。歩けるようになったんだけど、走るのがおぼつかなくてとか、バトミントンのラケットの操作ができなくてとか、いろいろなんですけど、個別の困りごとに対応をしています。なので、わたしの訪問リハビリでは、公園で子どもたちと一緒に遊んで、からだを動かしているんです。

熊：え、そうか、そこで公園が出てくるんですね。公園が楽しいリハ室になっているという。

中：公園はすごい大事な環境だと思っていまして、外遊びの大事さとか、遊具の効果といったことも講演会とかでお話をさせていただくことも多いんです。

熊：公園の重要性。

中：子どもの発達のために、外遊びや遊具といったものが重要というのはもちろん、別の観点でいうと、先程から挙げているような、本来必要としている方々との出会いの場としても、公園というものは重要だと思うんですね。

熊：ああ、まさに、地域の中で公園というものが持っているポテンシャルというものをしっかり顕在化していかないといけないような気がしてます。人が想像力を発揮したり、出会ったり、関わり合ったりするという。

中：人の存在って重要ですよね。「play here」の資料にも、ハード整備だけだったら不十分だって書いてあったのを拝見したんですけども、本当に全くもってその通りだなと思ってまして、昔はもう遊具なんてほとんどないような公園でも、しっかり遊んでいましたよね。どんな子どもでも、遊びを自分でクリエイトしていく能力を持ってるんですよね。ですから、遊具を整備してお終いにするんじゃなくて、遊び方をたくさん教えてあげるっていう、そういう人の存在や、人と人同士の関わり合いみたいな方が大事じゃないかなと思うことが多くて。

熊：まさに、そう思います。

中：小金井市内でも「プレイパーク」をやられていると思うんですけども、そこの「プレイリーダー」みたいな、上手く遊びを誘発していけるような人がいる状況が常であるような環境づくりができると、子どもだけで公園に遊びに行きやすくなりますし、子どもも公園での遊び方を自分で広げていくっていう経験になっていくので、将来の糧になっていくんじゃないかなと思います。なので、むしろハードよりもそういったソフト面というか、人の存在でカバーできるものが多くあるだろうなって、ずっと思っているとこだったんですね。

熊：まさにまさにというところで、今回のこの事業でどこまでカバーできるかということは考えないといけないんですが、だとしても理想像といったものはしっかり持っておいたほうが良いんじゃないかなと考えているんです

ね。で、おそらく人の介在を減らすためのハード整備ではなくって、むしろ人と人の関係性を育んでいくためのプロセスを含めた環境整備ということが、目指すべき姿だと思っているんです。

制度や仕組みを使って、後押しすべきものは何なのか

熊：理想をしっかり持つという意味では、あえて風呂敷を広げるようなことを意識的にしていかないと、安易にすぐできそうなことだけをやって終わらせてしまうという事態を招いちゃいそうな気がしていまして、なんで、そのためにも少し質問を重ねていきたいんですけど、先ほど、一人の力で続けていくことの限界ということもおっしゃられていたじゃないですか。

中：個人のボランティアベースでの活動の限界もありますし、訪問リハビリでいうと、わたしが自分でみることができるのは月に5人ぐらいが限界です。

熊：当然、そうなりますよね。それで思うのが、行政という立場での仕事になってくると、というか社会をどうやって前向きに進めていくかでいうと、それって、誰かの困り事をみんなで解決したり、良い兆しをみんなで後押しして広げていくことによるものだよなってことなんですよね。つまり、必要としている人にちゃんと行き届くような、持続的で広がりをもった施策や制度にしていく必要があるということなんですよね。なので、福祉サービスのようなものを、必要としている人にどう届けていくのかというところが重要なポイントになる。で、それを前提にしつつ、その手前の話として、そこにある困り事や良い兆しがどのようなものなのかっていう理解を深めたいという気持ちもあるんです。なので、冒頭で理学療法を受ける中で、「自分の子どもの現状を受け入れていく」という話もおっしゃっていたと思うんですが、そのあたりも少しお聞きしたいです。というのも、理学療法として一般的なゴール設定であるという「歩けるようになる」ということと付随して、その受容というようなことも、切実な必要性として捉えることもできると思うんです。まさに、僕の息子が希少難病ということもあって、自分自身の経験にも重なるんですね。

中：ありがとうございます。自分自身が障害を持った場合もそうなんですが、自分の子どもの発達が遅いとか、何かしら障害があるっていう場合、やっぱり当然ショックをどんと受けるものです。特に自分のことではなく、子どものことになると、ともすれば自分よりも大事な存在であって、そこに対しての親御さんの責任感やショックっていうのは、本当に計り知れないぐらいの大きなものだと思うんですね。そんななかで、やっぱり、できることならこの子がリハビリをしていく中で、普通の子と同じようになって欲しいなっていう想いを持って来られる方が多くいらっしゃるんですけれども、その段階でわたしは理学療法士として、どこまでできるようになるかとか、ある程度の見通しはお話することはあるんですけれども、でも、そういう遠い未来の話っていうよりは、まず今、この子がこの位置にいて、ここから一つ階段を上がると、こういうことができるようになるんだよっていう目の前にある目標に、目を向けるようなお話をしていくんですね。

熊：今・ここという感覚のなかで、はたらきかけをすべきところを明確にしていく。

中：はい。おうちではこういうことをやって欲しいとか、リハビリの目的とかの話を一つ一つしていくんですけども、そうすると、普通の子と同じようにっていう漠然とぼんやりしたものから、個別具体的な目標が見えていくようになっていくんですね。それを一つずつクリアしていくなかで、親御さんもできたっていう実感になっていくし、お子さん自身も成功体験を積んでいくことになっていくんですね。子どもたちはみんな探究心のようなものがあるんで、一つできるようになったことによって、子どもの生きている世界ってぐっと広がる。この広がったとこ

ろで、また新しく興味関心があるものをみつけて、そこに向かってまた自分で、心やからだを動かしていくっていう流れが生まれていくものだと思っているんですね。そういうお子さんの姿を見ていくと、親御さんもいつの間にか、普通の子と比べてっていうよりも、その子自身のことをちゃんと捉えれるようになっていくので、そこで受容が進んでいくっていう過程をよく見ているんです。

熊：自分自身のことを振り返ってみても、とても腑に落ちる話です。

中：本当に人間ってみんなそれぞれに個性を持っているものなので、「人それぞれ」っていう言い方があると思うんですけれども、でもそれってやっぱり、なんて言うんですかね、そう簡単に投げかけられる言葉ではなないと思っているんですね。そういう経験をしてきて受容をしてきた親御さんだからこそ、「人それぞれだよね」って言えるんじゃないかって、わたしは思うんですよね。

熊：それも、非常に重要な感覚のように思います。シチュエーションにもよると思いますが、安易に「人それぞれ」っていう言葉を先回りして持ち出すことによって、そこで会話や対話や議論といったものが終わってしまうような、ある意味ちょっと暴力的なはたらきを持ってしまうというか。なので、このプロジェクトでも、なんと言いますか、思考停止のような状況にならないためにというか、会話や対話や議論を遮断するような言葉使いを避けるための努力はしているつもりです。

中：そうですね。「みんな違って、みんないいんだよ」っていう言葉を、言葉だけで捉えるのと、身を持っての経験を踏まえてそう至るのとでは、大きな差があると思います。リハビリをしていくなかで、全員が全員歩けるようになるわけではないんですね。それはあくまでも一般的なゴールなのであって、それこそ、みんなそれぞれに違うゴールというものがあるんで、それを個別具体的に取り組んでいくなかで、やっぱり親御さんの表情も変わっていきますし、リハビリが終了しても、お手紙を頂いたりしてやりとりが続くこともあります。そういう手応えがあるから、わたしのような仕事は頑張れるということがあると思います。

先生というより、伴走役

熊：僕自身が、理学療法や作業療法といったことの仕事の、ひとつの側面しか捉えることができていなかったような気がします。というのも、運動機能の維持改善みたいな話かと思っていたら、そこに心のケアみたいな話も入ってくるんですね。それって、理学療法や作業療法の領域では、一般的なものなんですか。

中：わたしはそうだと思っています。やっぱり、寄り添っていくっていうのが基本なんですよね。病院とか医療関係のところだと、医師は先生ですし、わたしたちも先生なんて言われることが多いんですけれども、先生と患者さんという関係ではなくって、つまり上から見ているような存在では全くなくて、二人三脚でお子さんやご家族と一緒に歩んでいく存在としてあるんで、やっぱり心の部分も含まれていくのは基本だと考えています。

熊：なるほどです。希少難病の息子を持つ親として自分自身のことを振り返ってみても、かけがえのない自分の子どもを、そのかけがえのなさでもって受け止められるような眼差しの獲得というか回復というのは、上から答えを教わるようなものではなくって、伴走してもらうことで得られていくものだということは腑に落ちるものがあります。中山さんの課題意識としては、そういう伴走役を必要としているのに、そこに出会えないというかアクセスできないような状況の人にまで、どうやってそういった機会を行き渡らせることができるかというものなんですよね。

理学療法士や作業療法士に気軽に会いに行ける街

中：講演会でお話をさせてもらったときに、ぜひ何かお子さんのことで気になることがあれば、地域の理学療法士さんや作業療法士さんに気軽にご相談くださいねって、ポンッとお伝えしたんですけれども、終わった後の感想で、「身近に相談できる理学療法士さんや作業療法士さんがいないんですけど、どこに行けば会えますか」っていうコメントがすごく多くて、それに愕然としちゃったんですね。地域で活動することの重要性って、リハビリテーションの世界でもよく言われている割には、全然地域に浸透してないじゃないかって。仕事として地域に関わるっていうのは、やっぱり限定的になってしまっていて、そうすると本当の意味で、地域の人たちにとって接点を持てる存在にはまだなってないんだって思うと、結局、やっぱり採算度外視で個人として動くというか、ある種そういうことじゃないと、地域の人たちの本当のニーズに応えられないんじゃないかって。

熊：現状の制度や仕組みに隙間というか、届かないものがあるから、先程のカフェとか、中山さんみたいに、ボランティアというか、なんならときには持ち出しで、そういう活動を起こしてらっしゃるわけですよね。「地域包括ケア」みたいに、高齢者の方々に向けた地域の連携システムというものは結構議論が活発化してきている印象があるんですが、一方で、そういった子どもたちや保護者の方に向けた対応というのは、まだなかなか制度が追いついていない印象があるんですけど、どうなんでしょう。

中：本当におっしゃる通りなんですよね。置いてきぼりなんだなって思っています。もちろん高齢者の方々にとって安心して暮らしていける街というのも大事なんですけど、とはいえ同時に、子育てがしやすい社会にしていくためにも、そのあたりのことも活発にしていけると良いですよね。なので、理学療法士や作業療法士を育てているうちの学校なんていうのは、本来もっと地域にひらかれるべきだと思っているんですね。子どものことで気になることがあれば、どんどん気軽に入ってきて、ちょっとみてくださいって言える学校になればいいなって思っています。

熊：それは、めちゃくちゃ嬉しい話です。

中：個人の活動ではなくって、学校の看板をもってやるということでは、もちろん慎重にならなければいけないこともたくさんあります。ただ、うちの学校はこの小金井の土地に建って40年ぐらいになるんですけども、小金井生まれ小金井育ちの親御さんから、「あそこに学校があるなんて初めて知りました」って言われたこともよくあって、やっぱり地域にいかにひらいていくかっていうことを考えていかないといけないんですよね。なので、うちの学校には地域貢献委員会っていうのがあるんですが、その枠組みで市民公開講座を、コロナもあったのでようやく久しぶりにやるんですけれども、それが子どもの発達に関連する内容なんですね。それを皮切りに、ちょっとずつ子どもの相談ができる学校としての認知が広まったりとか、そういう場所にここがなっていくといいなと考えています。

熊：それは、うん、めちゃくちゃありがたい話です。

そもそも当たり前は、当たり前じゃない

熊：ちょっと自分の話をしちゃうんですけど、自分の息子が希少難病であるということがちゃんとわかったのって、結構後になってからのことで、そのことで結構苦労をかけちゃったなと思っているんですね。それこそ、ちょっと歩き方はおかしかったんで、親からも病院に行け行け言われて、心配性だなあなんて気持ちでスルーしつつ、とはいえ最初は整形外科にいったら外反母趾ですねえみたいな感じで。で、まあしばらく、そんなもんかと思っていたんですけど、まあ親として、ちょっと怖さもあったわけなんですけど、それこそ姉の夫婦が二人して理学療法士で、ここ社医学の出身なんですけども。

中：ええ、そうなんですね。

熊：はい。なんで、もう四半世紀くらい前ですけど、ここの文化祭に遊びにきたこともあります。それでまあ、家族の正月の集まりで、その理学療法士の姉夫婦から、これはもうただ事ではないぞというアドバイスがあって、年明け早々にバタバタして小児科にいったりして、結局入院して精密検査することになってという流れだったんです。それでまあ、思ったのは、学校の健康診断もありますけど、理学療法士という専門性がないと、気づいてあげられなかったということで。うちは、たまたま親族にそういう人がいたから良いですけど、「理学療法士に気軽に会える」ということの必要性というのは、非常に良くわかるんですね。それでまあ、たとえば足首を曲げたりができないんですけど、そうなると学校でよくやる縄跳びとか徒競走とかが、まあ無理なわけです。それは病気で無理だったわけなんですけど、病気ということがわからなかったので、努力不足みたいな扱いになってたんですよね。そういうことが具体的に上げればきりがない程にある。手先の筋力の問題で不器用さもあって、たとえば家でポテトチップスの袋をあけようとしても無理で、でも病気という発想がなかったんで、「おいおい、がんばれ、もう高学年だし」みたいなことにもなっていたんですよ。ただ、今になって思うのは、手で開けられなかったらハサミをつかえばいいし、なんなら周りの人に手伝ってもらえばよいじゃんっていうことで。

中：すごくわかると言いますか、リハリビリテーションのなかでも、必ずしも関わったお子さんみんなが歩けるようになるわけでもないですし、日常生活身の回りのことが全部自分でできるようになる子の方がむしろ少なかったり、何かできないことが必ず残ったまま成長していく子どもたちの方が多いんですよ。

熊：長い目で見たら、どのような人であってもどのみち歳を重ねていけば最終的にはできないことを携えていくことになるじゃないですか。だから、そのできなさをも肯定していきたいとは思います。

中：そうですよね。自分で、これができないから助けてって言えることって、一つのスキルとしてすごく大事だと思っているんですね。年齢を重ねていくと、羞恥心だったりとか、いろんなものでだんだん蓋をしていっちゃうので、それが難しくなっていくと思うんですが、でも、小さい頃から、いろんな子どもや大人との関わり合いの中で、自然と助け合うようなことが習慣化していくような形になっていくといいなと思います。そもそも得意不得意なんて、みんなにあるわけで、なんというか、できることが当たり前だっていう感覚を一回リセットさせないといけないのかなと思っていて。

熊：ああ。

中：ポテトチップスの袋を開けるのだって、どうやってからだをつかっているんだろうねとか、身近なことの不思議を感じるというか、そのための問いかけを子どものときからたくさんしていくことが良いのかなって思います。

熊：だいたいこうやって、しゃべっていることの不思議さもありますもんね。中山さんがおっしゃる、その「できるということが当たり前という感覚のリセット」をしてからじゃないと生まれない、会話や議論や考えというものがたくさんある気がします。

地域のおじさんになりたい

中：今、一般の小学校では、運動支援として理学療法士が関わっていくようなことが制度として成立していきそうなんですね。

熊：へー、知らなかったです。

中：政策のビジョンとしては、そういう方向で動いているんですね。でも、小学校に通う前の年代のお子さんのことを考えたり、不登校の状況にあるお子さんも増えていっていることを考えると、やっぱり地域にそれをカバーできる状況があった方が良いと思うんですね。究極を言ってしまえば、ある程度の規模の公園に、毎日じゃなくても良いので、理学療法士や作業療法士が常駐できるようになったらなとも思います。

熊：わー、なるほどです。

中：こういうこと言っちゃうとなんなんですけど、わたし個人としては、「地域のおじさん」になりたいなと思っているんですね。運動も遊びも教えるし、なんだったら小学校の勉強ぐらいだったら寺子屋みたいに面倒見てやるよぐらいな気持ちもあります。そういうふうに、理学療法士や作業療法士が、地域のあちこちに点在していけるのが理想かなって。

熊：専門性を持って、でも、敷居が高くない人が、生活の身近なところに自然といる状況って良いことですよね。それって、確かに理想ですよね。ぜひ、このプロジェクトでその皮切りというかトライになるような取り組みができたら嬉しいです。あ、そうだ。学校の隣の栗山公園なんですけど、学校関連の授業やイベントであれば、申請は必要みたいなんですけど、使えるそうなんですね。なんか、子ども連れとかで公園に遊びに行って、理学療法士や作業療法士の卵の方々がなんかやっていたら、そこでの交流も生まれそうです。顔見知りにもなりそうですし。

中：ぜひぜひ、公園を舞台になんかご一緒できたらと思います。学生の勉強にもなるだろうし、地域の方との交流の機会を作っていければと思います。

専門学校 社会医学技術学院

串田光弘さん

ずっとみんなでなんとかしてきたんだよ

取材日：2024年7月12日

梶野公園ができるとき、市の職員も地域もひたすらがんばったよ

串：梶野公園が今のような防災拠点になるときに、市の職員がひたすら頑張って補助金を取ってきてリニューアルすることが叶ったんですけど、そのときにすごいなと思ったのは、当時のその職員の方が考えたんだろうか、ワークショップを3年かけてやったんですよ。どういう公園にしたらいいかっていうんでね。

熊：3年がかりで、地域の方々と考えてきたんですね。

串：あそこは、もともと芝生の広場で、まわりに樹が茂っていてね。このままでいいんじゃないのと。私は、自分の子どもが小さかったときに連れて行ってたんですけどね、鍵が掛かっているわけじゃないんですけど、柵が閉まっているからか、誰も遊びに行かないんですよ。知っている人しか中に入らないっていう、すごい静かでいいと

ころでね。リニューアルするってなったときは、芝生があって樹があって、のんびりしてお年寄りも気持ちがいいなっていう、そういうのが残ればそれでいいだろうと思っていたんですね。そしたらば、いやいやテニスコートが欲しいとか、野球場が欲しいとかね、もういっぱい出てくるわけなんです。

熊：そうか、そうだったんですね。梶野公園が、テニスコートとかになっていたかもしれないという可能性があったんですね。

串：あった、あった。ただ、静かなゆったりした公園にしたいという声や、昔のように自然のなかで遊べるようにしたいっていう声もたくさん集まって、よかったよかったって。

熊：なるほど。

串：公園のボランティアグループっていうと、通常は「美化サポーター制度」っていうのがあって、花壇を作ったり掃除をしたりゴミ拾いをしたりとかね、そういうのが活動の範疇だったんですけど、あそこは違ったんですよね。「遊び場の会」っていう、子どもたちが自由に遊べるようにっていうことを考えていく分科会をつくってね。それから、犬の散歩もしてもいいんじゃないかって、犬の出入りを許可する公園にしたわけです。

熊：僕も犬を飼っていますけど、犬が入れない公園の方が多いと思います。

串：マナーの問題が出てきますからね。その問題は、今でもひきずっていますけど、「ワンワンパトロールの会」といってね、犬の散歩を通して地域の見守りや防犯や、そのマナーの向上といったことをする分科会も立ち上がって。

熊：いわゆる住民参加型で3年かけてみんなで準備をしてきた流れで、「梶野公園サポーター会議」というものがあって、その中で、いろんな分科会が出来ていくんですね。

子どもたちとハイタッチ

串：うん。分科会の一つとして、「花ボラの会」というのもあって、私がつくったわけじゃないのですが、今、そこの会長をやらせてもらっています。梶野公園の花壇というのは、ちょうど入口のところにあります。そうすると、来た人がまず最初に目にする。通常は午前中に保育園の子供たちがいっぱいいます。

熊：たまに通りかかりますけど、すごいたくさんの子どもたちが遊んでますよね。

串：すごいでしょ。おはよう〜って声かけると、おはよ〜！って返してくれます。先生に、ハイタッチってしても良い？って尋ねてみたら、ありがとうございますって。だから、子どもたちとハイタッチもして。

熊：良すぎます。

串：お花がキレイね、なんて言ってくれる子どもたちもいてね。それと、みんなのことを見ていると、ここは遊具がないですからね、ただただね、何をするってものじゃなくね、駆けずり回っていたりしてね、いいなって。子どもたちって、これでいいんだよなと、何もいらないなと。

熊：「名前が付けられていない遊び」ってたくさんありますし、あるべきですしね。

串：そうそう。そのためにも、広い原っぱが必要でね。夏休みになるとね、小学生の子どもたちも遊びに来るわけですよ。井戸があるから、水で遊んだりなんかするけど、こっちがいろいろと花壇の作業をしていると、何してんのって来てね、手伝う？って言うと、うんって言って一生懸命やったりするわけですよ。

熊：良すぎます。

串：だけどね、10分もするとね、あ！ダンゴムシとか言ってね、もう全然違うことを始めたり、別のところにすぐ行っちゃうけどね。でも、それはそれでいいんじゃないかなと。

熊：それも、良すぎます。

串：あれしろこれしろとかね、抜いちゃダメ、触っちゃだめとかね、なんかごちゃごちゃ言わないでね、子どもたちとは、なるべくそういう形の接し方をしようと。

熊：え、それはメンバーのみなさんで、示し合わせているんですか。

串：自然にできてます。私は、一応代表になってるけども、私がそういうふうにしようとしてるっていうんじゃなくて、自然に。これはね、メンバーに恵まれているなって思っていることの一つです。

花と場を、大切にし合うことさえできたら

熊：もちろん大切な花ではあるので、たとえば、その花に子どもたちが触ろうとしたら、ストップをかけるようなことの方が一般的には多いような気もしますけども、そのあたりはどうなんでしょう。

串：花壇をね、自宅でやりたくてもできない。そういう方のためのコーナーもつくったわけですよ。ここでは、それだけのスペースが使えているということですよね。でもね、やっぱりここは公園なんですよね。自分の家ではない。それに実は、ここの花壇は私の好みでは全くない、真逆なんですよ。だけど、それはそれでということにしていかないと、問題がいっぱい出てくる。

熊：自分の場所で自分のためにやるということと、みんなのための場所で自分を活かしていくということは、やっぱりちょっと違うということですよね。

串：そうですね。公園の花壇っていうのは、誰が楽しめるものなのかっていうことですよね。ただ、「花ぬすびと」はいっぱいいます。植えた苗を持ってっちゃう人も。

熊：うう、そうですか。

串：いっぱいいますよ。それからね、すごいのよ。ユリがそろそろ咲くなっていう頃に、すぱっと切って持っていっちゃう。

熊：どひゃあ。

串：それはね、市に報告するようなことでもないし、とはいえどうするかといってもね、「花ぬすびと」という言葉があるぐらいだからね、江戸時代からそうだったろうから、今になってどうにかできるわけじゃない。つらいのはね、ゴミがね、花壇のなかに捨てられているというもので、ゴミはまあ拾えばいいんですけど、お弁当の食べかすなんかが、ぽんっと捨ててあって雨が降ったりすると、ぐちゃぐちゃになったりするわけですよ。そういうことがいっぱいある。でも、頑張って綺麗にするしかないなと。来園者の人で、黙ってゴミを拾ってくれる人もいるんだからね、ガタガタ言えないだろうって。

熊：やっぱり、そういうゴミを捨ててしまう方には、それを拾っていたり、その場をより良くしようとしている方々の気持ちのようなものを伝えたくなっちゃうんですけど、まずは「大切にされてきたものを、大切にし合う」ということが成されると良いですよね。というのも、大切にしてくれるんであれば、「気になりすぎて、この花触っちゃいました」みたいなこともむしろ嬉しいことですし、なんなら「触ったら、思わず茎が折れちゃいました」なんてなったら、「じゃあ、持って帰っておうちで飾ってごらん」なんて言っちゃったりしそうですよね。

串：大切なものを、やさしく触ることの練習って大事ですからね。親はね、子どもたちに触っちゃダメ、取っちゃダメとかね、気を遣ってくれて言いますよ。でも、こっちは言わない。

熊：ダメって、自分たちからは言わない。

串：子どもたちは、自分でちゃんとわかっているし、覚えているわけですから。普通はね、花を折ったらダメってすぐなりますけど、私は天邪鬼だから、ほんとにそうかなあって。やっぱりちゃんと考えると、折った後のほうが大事。

熊：折った後。

串：たとえば、何日か後に他の子どもと一緒に公園に来ていて、「あー、花が折れちゃってる」とかいうのを耳にするわけですよ、その子が。そこが肝心かなって。そういうときに、どう感じるかですよね。それでも良いから欲しいって、気にしないほどに花に取り憑かれているということもあるだろうし、ちょっとまずかったかなって、これから気をつけようってなることもあるだろうし。だからね、花に触っちゃいけないのかってことでいうと、もうバンバン触ってよって、私は思います。花びらなんか、こう1枚2枚ちぎってね、ちぎるとどうなるんだろうとか、そのぐらいのことはやってほしいなって気がするわけ。

熊：確かに僕も子どものときにやってましたけど、それって、森とか林とかで無尽蔵に植物があればまた話が別ですけど、公園の植物となると大切に管理されているわけで、結構気が引けますけど。でも、串田さんとしては、触っていいよって思うんですか。

串： うん。

熊：うわー。花壇にゴミが投げ込まれることの悲しさなども含めて、そういうスタンスが、公園利用者の方々に伝わったらいいなって思っちゃいました。

子どもとお年寄りが秘密を共有する

串：このあいだね、チューリップの前に子どもとお母さんがいて、わーキレイね、なんて声が聞こえてきたんですね。その後、作業しながら何気なく見てみると、そのチューリップの花の中にね、いろんなものが入ってるんですよ、おままごとのような感じで。

熊：わ、素敵。

串：多分、それにお母さんは気がついていないかもしれないけど、子どもはそういうことをやったら、ちゃんと覚えているし、きっと楽しいし、我々もそういうことはちゃんと覚えている。良いとか悪いとかじゃなくて、ああしてこうしてとか、そういうことじゃなくてね、子どもたちが自発的にやったことだから、そういうことはね、大切にした方がいいんじゃないかなって。そういう形で、子どもたちとお年寄りは、なんとかうまくいっている。

熊：その場で言葉を交わすわけではないけど、そういう見守られているなかで、通じ合いが生まれているんですね。

串：このインタビューのような形で話をすることもあるかもしれないけれども、基本的には、黙ってるんですよ。あまり余計なことを言わないようにしているんですけど、でも覚えているし、子どもの楽しそうな気分というものはわかっている。そうやって静かに、こういうことが増えてくのがいいかなっていう感じがするんですね。

熊：子どもたちとお年寄りたちの、静かな秘密の共有かあ。それは、公園でしか生まれないような営みのような気もします。

花が、人の間をとり持ってくれるということ

串：市の環境政策課と一緒に、親子で苗を植えようっていうのを毎年やっています。これもずいぶん続いたな。いろんな形でもっとできたらいいなって思っているんですけども。

熊：もっとできたら？

串：入口に入ってすぐのところに花壇があるわけですから、ほとんどの人が見てくれるわけですよ。駐車場もあるので、車椅子の方も来ています。それに、精神的な障害を持った方も、引率の先生といっしょに来ています。あそこは、ベンチが4つあってね、そこでまず荷物を置いたりなんかしてて。それで、声をかけたいんですけれどもね、なかなかできないんで、それをどうしたらいいかっていう。これは一番大きな問題かなって気がするんですよね。

熊：最初の出会い方として、どう声をかけたら良いのかという。

串：こちらから一方的な話ってのはいくらでもあるんですけど、相手にとってそれがどうかっていうのがね、わからなくて。だからね、ズケズケ聞いて失敗して、怒られて覚えていくしかないんじゃないかなとも思うんですけど

も、それもねえって。なんて考えていたんですけど、ちょうど作業をしていたときに来られたので、引率の先生に、「ご苦労さん」なんて声をかけて「誰か一緒に手伝いたい人いますか」って言ってみたら、そういう人たちを引き入れてくれて。それで、花を植えたりするのをすごく嬉しそうにやってるわけですよ。そこに、車椅子の女の人も来て、こう、じっと見てる。それも嬉しいわけですね。花っていうのはね、こういう魅力があるんだなと。世話するというよりも、花に接することがね、いろんな接し方があると思うけど、人間の根本的ななにかにつながっているんだなっていうのをすごく感じるんですよね。私はね、花が好きって言っても、一番好きなことでは本当はないんですけどもね。

熊：え、なんですか。

串：それは内緒でね。

串・熊：あははは。

串：自分のことはね、また長い話がうんとあるので置いといて。それでまあ、いろんな人がいろんなふうに言うけれども、花が好きというのはやっぱり人間のね、DNAの中に刷り込みとしてあるんじゃないかって。

熊：人間と花は、切り離せない存在。

串：そう。植物ということでは、単に愛でるということだけじゃなくて、酒をつくったりね、麻薬をつくったりだってあるし、利用することも人間はいっぱいしてきたわけですよね。花の美しさということで言えば、チューリップが原因で戦争を起こしたりすることもやってきたわけですよね。植物って、それくらい強く人間を惹きつけるものがあるわけですよね。そういう意味ではね、インクルーシブということの入口としてね、植物が突破口になるかもしれないなっていう感じはします。

熊：人々が、共に生きていく社会を実現するための風穴をあける存在としての植物。

串：植物というのは、自分では動かないで、そこに居座ることを選んで生き続けているわけですよね。光合成をして自分の餌を自分でつくっているわけですけど、その副産物である酸素は、もともとはその当時の他の生命体からすると毒ですからね。でも、その酸素が地球全部を覆って逆転して、生き物すべてが恩恵を受けるという。踏みつけられたり、引っこ抜かれたり、そういう弱さの典型みたいな雑草みたいなものも含めてね、植物という存在はいろんなことを引き受けながら、環境そのものから変えてしまうだけのパワーがあるんですよね。

熊：それって、植物が人と人の間の潤滑油のような存在でもあることに注目しつつも、植物という存在から見出されるというか、教わる生き方というか考え方があるよねっていうことですか。

串：花壇ボランティアですから、そういう話もしておかないとね。植物の知恵や工夫って本当にすごくてね。周りの環境に順応しながらも、一定の場所に居座っているのに、知恵と工夫で自分自身を変えていきながら、周りの世界そのものも変えちゃうんですよね。でも、僕らはね、文句ばかり言って要求ばかりしてね。植物のように自分自身を変えようとする努力が欲しいよね。

熊：だんだん、世界をより良くしていくための革命の方法を植物の精霊というか仙人から伝授されている気持ちになってきました。

串・熊：あははは。

串：やっぱりね、障害を持ったの方やその親御さんって、ご苦労がね、たくさんあると思うんですけど、それをもっと聞きたいなって感じがすごくして。公園に行きづらいとか、お互いに声をかけづらいとか、そういった状況をどうにか、植物の力も借りながら超えることができないかって。先程の嬉しそうに花を植えていた人を引率していた方が、これからもこういうことを続けられるといいわねと言っていてね。あ、これって…！と思いました。

ボランティアっていうのは機械がやることではなくってさ

串：と、まあ、いろいろと考えたり、活動をずっとし続けてきているわけですけど、ですけどもね、掃除をしたり、花を世話したりね、それをただ繰り返すことがボランティアなのかっていうと、違う気がずっとしててね。ボランティアってなんだろうかっていうことを、明確にこうだってことを言えるものではまだないんだけど、でも、その考えを変えていかなくちゃならない気がしてて。

熊：それ、すごい気になります。たとえば僕が一緒に本をつくらせてもらった文化人類学者の猪瀬浩平さんは、ご自身でも福祉農園をやったりボランティアをしつつ、明治大学のボランティアセンターのセンター長をやられているんですけど、「ボランティアってなんだっけ?」という書籍も書かれていて、そこではボランティアのことを「自治」って読み替えられていました。「頼りない＜私＞たちが、お金の力に頼ることなく、国や大きな権威にお墨付きをもらうこともなく、自分たちにとって生きることを励ます営みを生み出すこと、それを僕は＜自治＞と呼びたい」って。自治は、「誰かに支配され、コントロールされたり、誰かに所有され管理されたりはしない、自分やほかの生命を大切にしたいと思う＜やさしさ＞から生まれる」って。

串：そうね、うん。要はさ、市がお金ないから、暇な年寄りには、そうだ掃除なんかちょうどいいなって。それで、年寄のほうも、暇だからっていそいそとやりますやりますって。そういう構図かなって、ずっと思ってたんですよ。それってさ、話として寂しいじゃない？

熊：そうですね、寂しいです。なんか、そうなっちゃうと、おなじ人間扱いされている感じがしないかもです。

串：もう60年以上もここに住んでますけど、昔はさ、別に「大きな志」があるわけでもなくってね、運命共同体みたいなところで助け合っていて、互助会のようなものだったんですね。子ども会も、親の会も、老人会も、町会も、いろいろあって。

熊：「大きな志」があるから自治をしているというより、「気がついたら思わずしていた自治」みたいな話は、その猪瀬さんとしていました。

贈り物のようにして生まれる、新しくて懐かしい未来

串：火の見櫓（やぐら）があればね、そこにね、消防団がいてね。それで、盆踊りの稽古したりなんかいろいろしてて。そういうような形で地域が成り立たせていたようなものが、消えていく。消えていくコミュニティという話は、関係もあるようで、またちょっと別な話かもしれないですけど、本当はそういうところとインクルーシブの話は繋がってくるといいなっていう感じもあるんですね。昔はね、横丁に出ればね、急ぐのにおばさんにつかまってとか、そういうのあるじゃないですか。

熊：僕は、東小金井の方の富士見通り商店街の近くで生まれ育っていて、たとえばラッキーという犬を飼っていたおばさんなんかは、そのラッキーと一緒に、暇そうにしている近所の子どもたちも誘って連れて一緒に散歩してまして、僕なんかはラッキーに追いかけられるときだけ足が速いねみたいに言われたりしてて。あと、商店街のお惣菜屋のおばさんなんかは登下校時にいつも挨拶したり、雑談していたりして。なんで、なんとなくですが、経験としても想像がつきます。

串：ねえ。「くにから送ってきたけど」っていう、おすそ分けなんていうのは、大変なもんでね。

熊：貰ったり、返したりの無限ループ。

串：そうそうそう、もう本当に。でも、そういうふうなのがね、この土地のらしさではないかなと。他から引っ越して入ってくる人がすごく多いにも関わらず、まだそういうにおいが残ってるかなって感じがしてしょうがないんですよ。神社もね、あれですよ大晦日にね、太鼓をどんどんとやりますし、農家のおばちゃんたちがちゃんとね、お酒やたくわんとかをね、全部用意してやってくれていますよ。

熊：へー。

串：東小金井っていうのはね、地元の要望でできた「請願駅」ですから、それができるまで、みんな武蔵小金井駅を使うわけですね。どうやって行き帰りをしているかって言うとね、駅と接続する良い道がないから、線路の脇の配線のようなものの上をね、みんな歩いているわけです。危ねえなって感じもするんだけど、ぞろぞろぞろぞろ。それで、ついに東小金井駅ができたときにはね、農家のおばさんたちがおはぎをつくって、駅のところでずらっと並んで振る舞っていたんですよ。

熊：へー、そうかあ。

串：みんなのお祝い事としてね。そういうところだったんですよ、ここは。火事があったら、炊き出しなんか大変ですよ。もう、誰々の家が家事だってなったら、消防団が火消しに向かってね、農家のお母さんたちがおむすびをたくさんつくってね。昔は大きな農家のおじいさんたちが全部仕切ってますからね。そういう形で成り立ってきたわけですよね。小学校まで寄付するんですよ、そういう人たちが。まあ、なんていろいろと言っていくと、昔は良かったみたいな話に受け取られちゃうし、「もう時代が変わったんですよ」なんて言われて話が終わっちゃうんだけど。

熊：いや、なんと言いますか、自分たちが身を預けている、その先である地元というものが、どういう成り立ちなのかであるとか、それをそれとたらしめているものが何なのかみたいな話は大切な気がしているんですね。もちろん、時代錯誤的な不正義や不平等は正していく必要があるかと思うんですけど。より良い未来って、なにも最先端

の科学技術によるものだけではなくって、そういう歴史の連続性のその先にもたらされるものでもあるって思うんですね。「かつて体験してきたこれを未来にも」っていうかたちで、贈りもののようにして出来上がる未来というものがあるって、そう思うんです。そういう未来は、なので新しいようでどこか懐かしくなる。

串：本当は、そうですよね。

再生すべき、遊びの本質

熊：「play here」の「play」って、「遊び」の意味もありますけど、音楽プレイヤーのボタンにあるように「再生」という意味もあるじゃないですか。なので、この言葉には、僕たちが再生しなきゃいけないものって一体なんだろう？という問いのような想いも込められているんです。

串：うん。言ってみれば、それで、公園って最後の手段みたいなもんでね。近所とか、学校とか、いろいろあるなかの一つだからね、公園って。歴史の話になってくると、「村」って言うのは土地が生命なんですよ。水害があれば総出だし、作物の疫病が流行っても総出だし、工事があるってなってもそう。良くも悪くも、土地に縛られているといえばそうかもしれないけど、それで代々やってきたわけですよね。町になっていくと、そういうしがらみがない人達が入ってきますからね。でも、ある程度いくとそこに住み着いてくると住みよい町にするには自分たちも何とかしなくちゃいかんっていうふうに思ってきて、なんかいろいろ動き出す。そうやって、何事もみんなでなんとかしてきたんですよ。

熊：なるほどな。串田さんは、要はそういうことを身をもって体験されてきたということですし、目の当たりにされてきたということですよね。

串：そう。だから、コミュニティとかインクルーシブっていうのは、わざわざ言わなくたって良いって気も一方でするんですね。そういう「自分たちでなんとかしなくちゃいかん」っていう人たちの営みが基盤としてしっかりあれば、そういうことを言わないで済むはずっていう。

熊：えっと、実は「play here」の資料では、その言葉を極力使わないようにしています。というのも、気をつけないと、かえって「わたしたち」と「わたしたち以外」ということが、逆説的に不用意に際立ちすぎるような感覚もあるからです。もっと言うと、「仲間に入れてあげる側」と「仲間に入れてもらう側」といったような上下関係のようなものとしての文脈にはしたくもなくって。ところで、「公園は最後の手段」っておっしゃっていたじゃないですか。確かになって感じたんですけど、同時に、もうその出番がきているんじゃないかなとも思うんです。やっぱりかつてのそういったコミュニティの維持のようなものが、無報酬で働くお母さんたちの労働力に依存していた側面もあると思うんですよ。現在は、生活を成り立たせるためでもありつつ、共働き家庭のほうが多いですし、労働も長時間化してきています。そうなっていくと、地域の活動に使える時間や体力がほとんど残されていないんじゃないかなとも感じます。それに、学校の先生方も長時間労働化してきていますから、同じように地域に向ける時間や体力が、という。同時に、だからこそ、町内会や自治会といった中間組織も維持が難しい時代に直面していると思います。好むと好まざるに関わらず、人は助け合って生きていかないといけない。それは時代が変わっても変わらない。でも、その助け合い方やその作法のようなものは、また新しく発明されるのを待たれているような気もします。で、今、そのような動きが少しずつ出てきているし、このプロジェクトもそうありたいって。

串：そういう「うねり」がね、公園を拠点にきっかけとして生まれるようになったらいいですよね。きっとね、遊具とか公園というものは、「遊びの本質」ではないという気がすごくしていて。

熊：ああ、まさにです。

串：その「うねり」の方がきっと大切なんですよね。

前田多實子さん

来づらい人がいるんじゃ、道理が通らない

取材日：2024年7月18日

土地と地域を守り続けてきた

熊：今日は、前田さんが持つ二つのお立場を踏まえてお話をお聞きしたいと考えています。というのも、「三楽公園」や「三楽の森」という緑地などは、代々前田家のものだったところを地域に提供頂いたという経緯があると思うんですね。その意味で、その土地を守り続けてきたというお立場と、一方で同時に、自治会や民生委員などを務められてきたというお立場もあると思うんです。なので、その両面を踏まえて、より良い公園というものを考えていきたいと思っています。

前：もともとは、うちの土地ではありました。でも、もううちのものではありませんし、そのことは父が成し得たことで、お話できることがあまりありません。これまでも、小林さんに全部お話もしてきてますので、ご承知おきください。

熊：あ、はい。小林さんからも前田さんの話を伺っており、そもそも公園や緑地になる前から、その土地を地域にひらいて色んな人が集える状況にしていたということも聞きました。えっと、やっぱり、より良い社会にしていくためには、いろんな想いを託し託されるという関係をしっかりと育んでいくことが必要であるように感じているんですね。それが無いことには、人や地域の連続性というものが途絶えて、根無し草のようになってしまうって。

前：昔から軸は子どもなんです。子どもたちが健やかに育っていったら嬉しいなと思うだけなので。

熊：そこを、もうちょっとお聞きしたい。

前：大人が仲良くすることは、子どもたちを健やかにすること。

熊：ああ。

前：ニコニコしてればいい。

熊：えっと。

前：周りの大人が仲良くしてないと、子どもたちには伝わらない。

熊：子どものことを話すときに、周りの大人の振る舞いについての話題にいきなりなる方は珍しいと感じます。子どものためにっていう時に…。

前：「ために」ではありませんよ。

熊：なるほど、そうですね。大人が健やかでいることが、子どもが健やかでいることにつながるということですよね。そのお考えを、もっと知りたいです。

前：ここは縄文の遺跡が出るところなんです。縄文人は、みんな仲良くしないといられないっていうこともありますよね。

熊：仲良くしないと、そもそも生きていけない。

前：わたしは外からこの土地に嫁いだものなんですけれども、ずっと違和感がたくさんありました。なぜなぜって。でも、この年になってみて、いろんな経験したなかでわかることもたくさんあります。わざわざインクルーシブだの、わたしはあんまり好きじゃない。そもそも、人間はひとりで出来ることはあまりありません。

熊：ええ。

前：子どもたちとの触れ合いについては、わたしは子どもから覚えられるようにしています。それで、叱ることはもう恐れてません。必ず目線を下げて合わせて、なんのために叱ってるかっていうことをちゃんと言います。その

ことで理解をしてもらう。周りの人たちには、顔も家もさらしているんだから余計なことをしなさんなって言われますけど、父も母も主人も、そういう人でした。

ずるいことをしないという矜持

熊：今、頭の中に、自分の記憶が蘇っています。小学校の時に、富士見通りが通学路だったんですけども、そこで通る民家の庭の柿の木に実がなってて、なんか美味しそうだなって、勝手にもいで食べてたんですよ。それでまあ、その家のおじいちゃんに当然叱られたんですけど、「食べたいなら、ちゃんと言ってくれ」って。つまりそれって「ずるいことはするな」ということじゃないですか。で、ピンポン押して「食べたいです」って言ったら、もうどっさりくれるわけです。その一連のことは、今でもよく思い出しますし感謝をしています。

前：道理や分別がわかってるのよ。

熊：道理と分別。

前：そう。

熊：ああ、そうですね。前田さんから感じるのは、「お天道様に見られて恥ずかしくないように」だとか、その先祖というのも、この土地で人々が助け合って暮らしていた縄文時代までさかのぼるくらいのイメージで「ご先祖様に恥ずかしくないように」というニュアンスなんですよね。

前：そう。

熊：ああ、ちょっと喋りたくなっちゃったんですが、菊竹清訓という日本の戦後を代表するような建築家と、レム・コールハースという、その菊竹さんよりも年下の世界的な建築家の二人の対談（「プロジェクト・ジャパン メタボリズムは語る」）を読んでいたんですが、菊竹さんが「地主」というものについて語っていたんです。要は、建築家や都市計画家が地域をつくるというよりも、そもそも地主が地域をつくってきたんだ、という話なんですね。菊竹さんによると「かつて日本では地主はインフラストラクチャーの担い手であり、文化の保護者でした。学校をつくる、水門をつくる、耕作地のいろんな整備をしていく、といったものはすべて地主がやっていましたし、神社もお寺もみんな地主がサポートしていたんです」と。さらには「日本は地域ごとに、地主がいわゆる地域社会をサポートしていたんです。地主がいなければ社会も文化もなくなる」とまで言っているんです。それが菊竹さんの建築の原動力であると。

前：そうだったんですよ。

熊：で、そのことを知らないし、知られていないんですよ。僕は今住まいが三鷹ですけど、自分が通っていて今じゃ息子が通っている中学校の土地が、まさにもともと地主さんから提供を受けた林のような場所なんですね。さらには、それを「みんなで開墾して念願の学校をつくったんだわ、根っこが深くてねえ」みたいな話を、その作業をしていた地元のおじいさんから以前聞いたわけです。正直、その話を当の本人から聞くまでは、そういうことに意識が向いていなかったんですよ。で、そのおじいさんは最近亡くなられてしまったんですけども、自分たちの暮らしや地元を成り立たせているものに関しては、やっぱりある程度知っておかないと、それこそ、道理が通らない

ような気もします。で、菊竹さんは時代の変化のなかで「パブリック・インフラストラクチャーをどうつくるか考えなければならない」と言っています。それって、つまりこのプロジェクトの課題感とも重なるんです。

ものを始めるときの肝心さ、続けていくことの大切さ

前：そう。自分のことを言うのは恥ずかしいけど、うん、でも聞きますけど、ここずっと歩いてきてどんなふうに思いました？

熊：あ、そうそう、ゴミ一つ落ちてないと思いましたし、あと、実はこの取材の前に見てきたんですが、すぐそこの三楽公園のトイレもすごい綺麗だなって。男性用トイレの暖簾も素敵だなとも思いましたし、そもそも屋外の公園のトイレに暖簾が掛かっているのも珍しいなって思いました。

前：じゃあ、暖簾の話をすると、最初はトイレに暖簾はなかったんです。

熊：それはそうですよね。

前：町会にいる若い人が障害者の方向けのお仕事をしてらして、「どう思う？」って言ったら、「こう、脱ぐでしょう。そうすると見られるから、開けっ放しは良くない」って。

熊：ああ、そうかあ。ズボンとか全部脱がないと出来ない方もいらっしゃる、と。

前：そう。その彼女とわたしは、しょっちゅう公園に様子を見に行っているからね、こういうふうにした方が良いとか話していたわけね。市役所の人は、最初は及び腰だったんだけどね、しまいには自分で暖簾をつくるみたいなことをおっしゃって、それもすごいでしょ。

熊：いろいろすごいです。

前：あの、なんでもそうなの、ものを始めるときが一番大事なの。よく考えるべきなの。

熊：もう頷くほかありません。

前：それで工事の現場責任者に相談して、こういうのがある、ああいうのがあるって話をして、それで今の形になったんです。そしたら、だんだん暖簾の切れ目が裂けてくるから、そうするとまた余計に外から見えるから、それでわたしは…。

熊：ああ、見ました見ました、パチッとくっつける茶色い留め具のようなものが付いていましたよね。

前：そう。

熊：そういった配慮をなさっているのはすごいことだと思います。そこからも学ぶべきことが多くあるように思います。きっかけなどはあったのでしょうか。

前：公園にはいろんな人が来る。そうすると障害者の方に対して、いぶかしい目で見る人もいるでしょ。それを相手はすごく感じる。

熊：ええ。

前：そういうのを見たときが始まり。ごめんなさい、障害っていうの嫌なんだけども、公園の掃除をしてくださる障害者の方々の団体がいてね、それはもうわかったんですけど、とっても真面目にちゃんと掃除をしてくださるのね。そういった方々を、行政が依頼をしてくださったのね。それで、やっぱりまずは指導者の人たちと挨拶をすると、掃除をしてくれているその方々も、こっちを向いてくれるでしょ。そうして、「いつも綺麗にしていただいてありがとう」って言葉を掛ける。そうすると、だんだんだんだん、向こうから「前田さんこんにちは」って挨拶をしてくれるし、良い関係ができる。やっぱりそうやって良い輪をつくっていくことが肝心ですよね。

熊：なんと言いますか、そういうことの連続性の一つとして、あの暖簾があったんですね。ちなみに、ゴミ一つ落ちていないのはやっぱり掃除をされているんですか。

落ち葉は汚いのか！？

前：自分のことを言うのは恥ずかしいけど、うん、でも言うと、具合が悪くなければ、わたしは毎朝掃きます。この頃は、木は大事って言ったって、木のことをみんな知らない。落ち葉はこの時期でも落ちます。落ちると汚いって言いますでしょ。

熊：え、言いますか？

前：邪魔でしょ、側溝に溜まって。

熊：んー。

前：昔から、ずっと掃いて、それから近所の子ども達も集まって、落ち葉焚きをする。それは、薫りを嗅いで欲しいっていうのがあって。

熊：そうですねえ。火とか、その薫りとかって、今じゃなかなかねえ。

前：そういう体感が、だんだんだんだん、今はもう削っていっちゃっているでしょ。そういうことが、どんどんどんどん、虫にしてもそうでしょ。

熊：そうですね。なにかこう人間として大切な何かから離れていってしまう怖さというものは感じています。火や木や虫というのも、本当にそうですね。

それぞれが手が届く範囲をより良くしていくこと

前：いつもわがままだって言われるけども、まずは拠点の部分を良い関係にしたい。小金井市全部のことは手に余ります。この頃は、あそこの自治会は良いよなとかなんとか言われるのね。でも、自分たちがそれをつくれば良いことで。

熊：わがままというよりも、その態度にむしろ誠実さを感じます。

前：わたしの言い方が強いこともあるかもしれませんが、周りには「聞いてくる方にも、自分たちの能力があるはずなんだから言っちゃ駄目」って言うんです。

熊：言っちゃ駄目。

前：言いたくなるでしょ、こんなふうにしました、あんなふうにしましたって。一切そういうことを言いなさんなって。

熊：ああ、先回りしたアドバイスをすることによって、相手の考える力を奪うことにもなるということですか。

前：それもあるけど、何をもって良いっていうことを言われたら、これこれこういうわけですってちゃんと応えればいいけど、ただ良いですねっていうのは、本当にどうにかしようとしている人は言わないでしょう。

熊：おっしゃる通りのような気がします。ちょっと話が戻っちゃうんですが、障害をもつ方々をそれこそ除外するんじゃなくて、そういう人たちと共にみんなで、その場をつくるべきというお話だったじゃないですか。

前：ごめんなさい、「あるべき」じゃなくて、それは「わたしのスタンス」だから。

熊：スタンス。

前：あの、まず木に対しても尊敬の念を持ちたいと思うから。それで黙って掃いている。でも歳になってきたからつらいんですよ、毎日やるのが。でも、それを淡々とやるの。たくさん落ち葉があると、朝4時くらいに起きて掃いてるわけね。

熊：夜明け前の4時。

前：トイレの公園だって行政が綺麗にしてくださったから、せめてこちらもできる範囲でっていうことでやるわけです。でも、できるときに、できることしかやりませんから。全部行政に任せるっていうのは、もう時代でもないし無理です。今の人たちは、汚くなるとすぐ警察に行く、行政に行く。段階を踏んでいかないですね。すぐ教育長だとか、支店長だとか。それは、今なぜなんだろうと疑問に思います。

熊：前田さんにお話をうかがっていると、時折、修行僧と話をしているような気がしてくるんですね。それは恐らく、背中に乗せられた重荷のようなものを感じるからでもあるんですね。だって株とかならいざ知らず、先祖代々の土地というものはなかなかに重いわけですよ。いろんな地権者の方とお話をすると、生産緑地などの畑にもゴミを投げ入れられたりして、心が折れそうになるっていう話はよく聞きます。おいそれと羨ましいなんて言える状況

でもないんですよね。そういう重荷を背負いたくてその土地に居るというよりも、背負わされちゃったと言った方が近いと思うんですよね。だからある意味、大手不動産会社に土地を売って、自分は都心のタワマンにでも暮らしていたほうが、色々と楽ではあるはずなんです。と言うか、そういう方もたくさんいらっしゃいます。

前：そうせざるを得ないところもあるんです。

熊：「三代で財産がなくなる」なんて良く言いますもんね。仕組み的には、都市の農地や緑地なども減っていくように出来ていると言ってもよい状況であるとも思います。小金井なんて、都心からアクセスも良い分、地価もかつてよりも上がっていく。そうすると、相続税なんてものはとんでもない額になるけど、一方でそれを払うためには結局キャッシュが必要で、つまり土地を手放すしかない。でも、そういう土地がそれこそハケの湧水にとって地形的に大切だったり、動植物の保全に必要だったりする。地域の共有財産として維持していくのは並大抵ではないんですよね。そういったことは、地域の共通理解にすべき、重要な話だとは思うんですね。

人として付き合い、役割を活かす

熊：それでえっと、修行僧とついつい呼んでしまいましたし、記事に書きづらいこともたくさんお話を頂きましたけども。

前：そう？後で、録音データをくださらない？ちゃんと責任を取れることを言えていたか確認しますから。

熊：いえ、それは無責任な話があったというわけでは全くなく。お酒でいうと原液のようなお話も多かったので炭酸で割りたくなるというか、とにかく、こちらもお話をお聞きした責任として、ちゃんと編集します。

前：あなたの主観が入るじゃない。

熊：なにかを表す以上、主観は入りますし、むしろ入れますけど、でもちゃんと頑張りますってば。いやなんと言いますか、感じていたのが、その背負うものが多いと言いますか、その背負わされたものと向き合いを続けていくと、否定すべきは否定し、肯定すべきは肯定するっていう、つまり何がいいことで悪いことなのかっていう、まさにおっしゃる「分別」みたいなものが根幹にあるということなんですね。それは、警察署とか役所とか、まあいろいろな方々との関係を前田さんはお持ちではあるんですが、その肩書の前に人間同士の付き合いをするということなんだなとも感じるんです。

前：うん。

熊：で、その人間同士の付き合いを前提として、その上でもちろん状況をより良くしていくためにも、それぞれの立場や肩書も活用していくという。

前：そうじゃないとねえ。

熊：はい。それで、さらに思うのは、めっちゃ背負ってる人からすると、ちゃんと背負ってはないことが、ずるくも見えるし、道理が通らなく見える。その感覚は今、とても必要な気もしています。僕たちはやっぱり機械じゃなくて、人間として生きているわけですし。なんかさらに思うのは、誰が、その土地を守ってきたか、ということな

んですよね。結局、地域の労働力みたいなものは、都心の会社に吸い上げられていく中で、そうなるとその土地を維持したり、それこそ消防団みたいに、もしものときに備えて活動しているのは、農家さんや地主さんやずっとそこで商いをしている人だったりするじゃないですか。で、その土地に根付いているという意味では、子どもたちや、その子どもたちの面倒をみている特に結局お母さんとかも、そうじゃないですか。農家さんや地主さんたちと同じように、子どもたちもなかなか地元から離れられない。気軽に遠くに移動できない。だから、土着性が高いとも言える。なにか病気や怪我のときだって、家から離れた病院には簡単にいけませんからね。だから、自分たちのからだを預けている地元というのは、やっぱりインターネットやオンラインというものがこれだけ活発になっていても結局は、生活や暮らしの基盤なんだと思うんです。じゃあ、その基盤をこれからどうしていくんだ、ということを考えるとなかなか難しいんです。そもそも、そういう基盤が必要という認識もまた変わってきていますし。

前：それは、いい人とつなぎ合うこと。自分一人じゃできないから。このことはこの人に、このことはこっちにって。で、そうだよねっていうような互いの理解の仕方。

熊：ああ。

前：そういうことをやっていくには、時間がかかります。あとはもう、こんなうちですから仏間と神棚がございます。そこで毎朝いっつも振り返って、ごめんなさいって。

熊：ごめんなさい。

前：それを忘れたら自分は駄目だと思っているから。それでも上手く行かない。でも不思議なことに、何かのときには、わざわざコンタクト取らずとも、偶然の出会いが訪れる。そういうことは、よく与えられる。それで事が進む。

熊：神様が見てくれている。

前：今、宗教もいっぱい色々とありますでしょ。うちにも隙間をつくように勧誘は来ます。

熊：隙間をつくような勧誘。

前：でも、ピンポンされたらどんな人でも必ず出ていきます。そして、お話をします。もしもの時に相談できる、信頼できる人がいるから出来ていることですけども。それで、わたしはお天道様、お月様、お星様、それから大きな空を信じてますって言うの。

祈るような想いと行動で、より良い状況を願う

熊：んー、いろいろと僕のなかでつながってきているんですが、これはもうほとんど「祈りの話」だなって。というのも、先ほどの自治会が上手くいっているということで、不用意に尋ねられてもアドバイスをすることが良いことではないということや。

前：アドバイスはしません。

熊：はい。あと、僕がうっかり「そうあるべき」みたいな言い回しをしたときに、「べきではなくって、わたしのスタンスです」と訂正をなさったりとか、そういったことも全部ひっくるめて、祈りだなって。というのも、良い悪いといった道理というか分別も持ちながらも、他人様を操作したりコントロールしようとはしてないじゃないですか。

前：できない。

熊：はい。そうした時に、「操作やコントロールをしないけども、何かしら幸せを願う」って考えたら、もうそこに残っているのは、「祈りみたいなもの」で。朝4時起きの、人知らずの掃き掃除も、もはやそういうものの類の一つのような気がするんですよね。

前：それはわたしの勝手だから。

熊：そうですね。冒頭でも、僕が「子どものために」と言ったら、「ためにではありません」と即答されたように、とにかくスタンスがこれでもかってくらい首尾一貫なさっている。で、確かに、「誰か個人の勝手というものが、ひるがえってみんなのためになる」というのが一番良いような気もするんですね。子どもやみんなを前にして、子どもたちのためにとかみんなのためにって強調されてしまうと、萎縮してしまいそうですし。うまく言えないんですが、「みんなのための場所であるからこそ、自分自身でいること」ということはとても大切なような気がしています。政治学者の宇野重規さんという方が「＜私＞時代のデモクラシー」という書籍で、「＜私＞を排除した＜私たち＞にはグロテスクなものがありますが、＜私たち＞のいない＜私＞は絶望にほかなりません」なんてことを言っているんですが、それに近いものを感じます。それでまあ、なにかを代々守ってきたような人が持ち得る美学や倫理観のようなことってやっぱりあるんだなあと。えっと、もう少し喋ります。僕は教育の仕事をずっとしてきているんですが、一般的な教育の定義のようなものからはちょっと離れているんですね。

前：うん。

熊：どういうことかと言うと、新しいアイディアや人を迎え入れていくような、「歓待の営みとしての教育」というものを考えているんです。それで、その「歓待」ということを調べていくと、要は旅人のような人たちを迎え入れていくような人類の古来からの営みの様子をみていくと、「歓待」というのはやっぱりその村の「主（あるじ）」の仕事だったんですよね。今日は、なんかそういうことも頭に浮かんじゃいました。

前：そういうもんだったんですよ。

熊：みんながみんな「主（あるじ）」であって欲しいと、思わなくもないんですが、えっと、今日もなんだか聞き手と言いつつ、たくさん喋っちゃっていました。えっと、でまあ、このプロジェクトでは、本当の意味での「みんなにひらかれた公園」というものをとらえて実現していきたいと考えているんですね。

前：来づらい人がいるんじゃ、道理が通らないじゃない。

熊：ああ、その通りだなと感じ入る次第です。道理を通していきたいです。

男子トイレ

亀井寛之さん

生きることは愉しいよって背中で語りたい

取材日：2024年7月19日

学校は無理だけど公園になら行けるということなら、それを後押ししたい

亀：僕の娘が不登校だったりしたので、その話をすると、中学1年生のときに不登校になり始めたんですけど、小学生から中学生になって頑張ろうみたいな気持ちと、でもなんか他の友達はどんどん友達ができたり、いろんなことができていくけど私は何もできないみたいな気持ちになっていって、だんだん行きづらくなって、そのまま行かなくなったんですね。そっから2年の最後まで全然行かなかった。うちはまあ、家で自分が好きなことをできるならそれでいいよねみたいな感じだったし、農業もやっているんですけど、その手伝いは自分からやり始めたりしてくれるんですね。それはもう実際すごく助かるし、おじいちゃんおばあちゃんからも、ありがとうって言われるとちょっと元気になったりするんですけど、逆に、ちょっと外に出ようかっていうときは、なんかみんな勉強してる時間に出ていいのかなって、やっぱりなる。

熊：ああ。

亀：本人が気にするっていうことだけじゃなくて、僕とか熊井さんみたいなタイプだと、いいじゃん大丈夫だよって言えるけど、そう思えない親御さんも結構多かったりする。今、ちょうど不登校の支援員をしているときも...。

熊：小金井の中学校で不登校支援員をされていますもんね。

亀：そうそう。そこで親御さんと話すと、せっかく家族で家にいるし、お昼にレストランにいく？平日だから空いてるしさ、みたいなことを言っても、え、外に出ていいの？ってなっているらしいんですよね。やっぱ、そんなふうに思わせる社会はまずい。

熊：ああ、子どもたちに思わせてしまっているんですよね。

亀：そう。でも、実際うちの親も小学校の先生をしていたのでわかるんですけど、それこそ僕らの世代とかは学校に行かないっていう発想や選択肢がなかったと思うので、だから孫がそうなったときに、もっとちゃんと行かせなさいみたいな感じになるわけですよ。

熊：現在、小中の不登校が約29万人という統計上の数字も出ていて、数字にあがっていないものも含めると40万を超えるとも言われているそうなんですね。その実態は、なかなかこれまでの世代には飲み込みづらいんですよね。

亀：そう。でも、その娘のことを考えると、彼女の可能性を育むことが目的なので、そう考えると無理くり学校に行かせることだけが唯一の手段でもないわけだし、まずはその孫の心と向き合うことが大事なんじゃないかなみたいな話をして、ようやくわかってもらえたりして。そういうこともあって、娘はだんだん外に出られるようになって、じゃあ映画を見に行こうかなっていうようなことも言えるようになって。

熊：ああ、そうか。学校に行かない、でも気まずいから家からも出られない。となると、もう家に籠もるしかなくなるし、それこそいろんな体験の機会がなくなりますよね。

亀：ねえ。それで、こちらが忙しかったりする時に、おじいちゃんかおばあちゃんと出かけておいでよってなると、今度は、おじいちゃんたちの方が、昼間に連れ出していいのかなみたいなことを言い始めたりするわけですよ。

熊：行動に移す時の躊躇ですよね。にしても、なんかちゃんと家族のなかで会話をされていますよね。感じたことを表し合うことができて良いなって。

亀：話さないことにはね。それで、結局、外に出かけてみて、なんか本人が楽しそうにしているのを見たら、これでいいんだよねってなったんですよね。ずっと家にいる方がきついじゃんって。でもなんかこう、散歩しておいでよとか、虫好きならちょっと捕まえておいでよっていうのが、できないような空気が、やっぱ、あるなっていうのも感じるんですよね。

熊：それは確かにありますよね。

亀：その不登校支援員の仕事をする時に、いつも梶野公園の前を通ってて、朝は犬の散歩の人とか、おじいちゃんやおばあちゃんが来てるけど、昼間に娘のような子たちが来たら良いのになって思うんですね。公園に来ている小さい子たちと、そういう子たちが遊べるようになって、遊んでくれてありがとうございますなんて言われて、ちょっと元気が出るみたいなことが起きるだろうし。実際、うちの娘がそういう感じで元気になっていったのもあるので、そういうことが公園で起きたらいいなとは思うんですよ。

熊：まさにそう思います。関係の中で、生活の張り合いが生まれることはたくさんあると思います。というか、関係の中でしか育まれないとも思います。

亀：だから、その関係の繋がりから外しちゃいけないような気がしていて。登校の時間に、1年生の黄色い帽子をかぶってる子が、学校と逆方向に歩いてたらちょっと心配になるけど、いろんな過ごし方もあるんだなっていう空気が広がっていけば良いなって常々思っているところなんです。でも、まだ、なかなか難しいですよね。だから、少なくとも公園はそういう場所になっていって欲しいなって。今日、それだけは言っておきたいと思っていたんですよね。

熊：本当にそうですよね。法制度上も、公園って「誰にもひらかれている場所」であるにも関わらず、その「みんな」という範疇から漏れてしまう人がたくさんいらっしゃるんだなっていうことを、このプロジェクトを通して強く実感している次第なんですね。

亀：不登校の子たちも、やっぱり学区域の公園には特に行きづらい空気ってありますよね。

建築も教育も、かたいものから呼応するやわらかいものに

熊：自分のことを棚に上げて言うんですけど、亀井さんって、二足三足以上のわらじを履いているじゃないですか。児童館でも働きつつ、ファミリーサポートのサポーターもやって、保育園でも働いている。さらには、もともと建築畑で、今も、多摩美術大学で建築の先生をやってますけど、で、農業もやっているし、地元のいろんな委員会の役員も。

亀：百姓って、「百の仕事」があるから、そう呼ぶようなんですけど、そんな感じ。

熊：なんか納得しちゃいますけど、一方で、建築といっても亀井さんがやっていたことって、いわゆるメディアアートのようなもののはしりだったじゃないですか。建築をハード、つまり固いものとして捉えるんじゃなく、やわらかいものとして考えられないかっていうのを、1990年代に東京大学とかにも出入りしながらやられていましたよね。

亀：「Responsive Environment」ですね。

熊：そうですね。今じゃなんかチームラボ的な感じが世間では一般化してますけど、「Responsive Environment」って、日本の建築史やメディアアート史において、その実験性をちゃんと記述されるべきものだと思うんですよね。でも、亀井さんたちって、セルフブランディングとか興味ないから。

亀：あはは。いろいろやらせてもらって、今では、ご縁があって不登校支援員も。

熊：さすがの現代版百姓って感じがしますが、不登校支援員はいつからでしたっけ。

亀：去年の9月からですね。不登校支援って、学校によって形が違うんですけど、今行ってるところに関しては、「不登校によって学習が心配な子たちが、個別で学習ができるような場所を学校内に」ってことでつくられていて、だからそれぞれ個人にマンツーマンで関わって支援をしていく形で始まったんですね。子どもたちと関係を築いていきながら感じられるのは、やっぱ勉強だけをしたいわけじゃないよなっていうことで。

熊：うん、それは、まあそうですよね。というか、不登校じゃないにしても、よし勉強だけするぞっていう気持ちで学校に行っている生徒も少ないように思います。

亀：だからまあ、ある意味渋々、学校のそのスペースに来ているわけですけど、いろんなゲームも用意しておいて、ちょっと休憩のタイミングとかでゲームやってみる？とか言うと、のってきてくれます。楽しくなってきて、それで通ってくれるようになる子もいる。

熊：そっか。そもそも行くまでが気が重いんですもんね。足が向く。聞く耳になる。そういうところが、まずは肝心なはずですよね。どうやったら行きたくなる場所になるのか？話を聞きたくなるのか？という問いは案外大切にされていないのかもしれませんね。

亀：なんか僕のこの風貌も含めて、ヤバいけど面白そうな人ってことで、近づいてきてくれる子もいるんですよね。

熊：お団子ヘアーで、ヒゲで、柄シャツ着ている大人って、学校にあんまりいないですもんね。

亀：なんかまあ、もともと勉強をやらなきゃっていう気持ちがあるからでしょうけども、そうやって興味を持って接してくれる子たちといろいろと雑談をしつつも勉強してるんですよ。もうね、ずっと一生懸命やってくれる子もたくさんいます。それで、まあ、それぞれが、それぞれのやり方で元気が出てきたので、ちょっとグループでいろいろやれるようにしていった方が、もしかしたらいいかもしれないっていうんで、グループの時間を作ったり、この子とこの子がちょっと一緒に勉強できるようにしてみようかとかをしてみたら、やっぱ、1人のときとはまた違う元気さが出てくるんですよね。お互いに影響し合うのもそうだし、2〜3人くらいの規模感だったら安心して話せるなっていう空気が少しずつ出てくる。

熊：活動を共にすることで生まれる安心感。

亀：今ねえ、うち、「大富豪」っていうトランプのゲームがものすごい流行ってて、よくみんなでやっているんですね。いきなり一番強いカードをまとめて出したりとかして、え、それ後で大丈夫？みたいになるんですけど、それを3人とかで、わちゃわちゃやっていると、なんかその場で、あれ違った？みたいなことも感じて、楽しく学んでいくというか気がついていくというか。さらには、いつも寡黙で特に積極的に参加してくるわけでもない子が、その様子を楽しそうに眺めていたりとか、なんかそういうことがだんだん見えてくる。

熊：他人の存在に対して安心ができると、そういう失敗のようなものも楽しめたり、そこから学べたりする。参加するかしないかの二択ではなくて、眺めてるみたいな、そういうグラデーションがあるのも良いですよね。

亀：なんか、やっぱ、ひとりで学んでいくっていうのとはまたちょっと違う空気が生まれるんですよね。クラスの30〜40人といった大人数は無理だけど、このぐらいの規模ならやっぱ楽しいなって思えると、そこがスタートになってくる。今、そのグループの時間がすごく盛り上がってて、昨日はちょうどその中のひとりの子が、1学期の間にゲーム大会をやりたいっていうんで、その大富豪を決勝戦までやるのと、そのトーナメントで負けた子たちはUNOをやるというのを、5、6時間目に丸々やってて、なんか全然計画通りに終わらない。だから、もうすげえ延長しながらやっちゃって、結局、優勝者は決まらなかったけど。

熊：かなり熱中できていたんですね。

亀：みんな、ここ1、2ヶ月ずっと大富豪を一生懸命やってて、さすがにこの2週間ぐらいは飽き始めてたんですけど、4人ずつに分かれて、それぞれ得点が高かった人が決勝に行けますよってなったら、ちょっと緊張しながらまた前のめりになったりする。それで、これまで強かった子が、「ああ、カード運が〜」なんて言いながら負けていくのを見るのも、多分すごく良くて。少しずつ学校に来られるようになるっていうところから、ちょっとずつ関係性を持って、お互いがどんなことを考えているかっていうところまで、ちょっと踏み込んでいくような空気ができたときに、すげえいいなって思いながら、その空気を大切にしているんですよね。

熊：大富豪とかUNOとかっていうのも、あくまでも手段ですもんね。子どもたちがやってみようと思えたり、他の人と関わってみようと思えたり、それこそ、その延長線上で、トーナメント大会のようなイベントを発案してみたり。外から見ているとただ遊んでいるようにしか見えないかもしれないけど、そこで生まれていることの意味は結構豊かなんだろうなって感じます。

亀：ただ、こういうのって学校の仕組み上、個別の学習の時間としてってことになっているので、それを越えすぎると、ちょっとマズいよねとかっていうのも出てきちゃうので、そこはちょっと悲しいところだなと思っています。

熊：越えるというのは？

亀：たとえば、個人学習の時間だとしても、その子たちの気持ちが向かえば、一緒に何かをやろうっていうのもOKにしたいなっていうふうにしてたんだけど、それはどうなのかってなる。

熊：ああ、あらかじめ決められた時間の使い方というものがあって、その場の判断でそこからはみ出ることは、なかなか許されないという。

亀：そうなんですよね。その子たちが、どうやっていきたいかということによって、時間の使い方を変えて良いんだと思うんですけど、そうなっちゃうとちょっと全体の流れが崩れちゃいますよねっていう視点もあるわけです。でも、なんか、崩れるっていうか、その方がいいってみんなで思えたなら、それでいいんじゃないかなと思うんですよね。僕の考えとしては、良いようになるんだったら、どんどん良いようにしてっちゃえばいいじゃんって思うけど、でも、最初に決めたこととずれることが、なかなか許されない。その必要性をどうやって周りに説明をしていこうかなって。

熊：んー、そうですよね。なんか、僕も教育の仕事をしていて、もう15年以上も前の話ですけど、その道で尊敬している人が「don't mariage curriculum」って言っていたのが、ずっと残っているんですね。今や、文科省や教育委員会も「個別最適化」というキーワードを挙げつつ個々の状況に即した教育を、というビジョンを掲げていますけど、今の話はまさにそういう議論につながっていくなと感じました。本来、カリキュラムや計画を完璧に遂行することが目的ではなくて、本当の目的は子どもたちのモチベーションや可能性を育むことなんですよね。だからまあ、「don't mariage curriculum」というフレーズはつまりそういうことを意味していたと思っているんです。

亀：良くなる兆しがあるんであれば、そっちに舵をとっていきたいんですよね。

熊：現場における、そういう良い予感というものは大切にされるべきと思います。思い出したのが、それも15年くらい前ですけど、プログラミング教育を実践していて、亀井さんともそれで、ご一緒したりもしていましたけど、プログラミング教育って、今じゃもう当たり前になって、学校でも必修化されていますよね。で、まあその一般化する前のことですけど、プログラミングをして自分で遊ぶゲームを自分でつくるみたいな授業をしていると、まあ、楽しいんで、子どもたちも笑い声や歓声がよく上がるんです。それで、ゲームのなかでモグラ叩きみたいなものをつくるとしたら、乱数とか必要になってくるし、シューティングゲームのようなものをつくろうとすると座標みたいなことも出てくる。だからまあ、外から見ているとただ楽しそうに遊んでいるだけなんですけど、結構ハイレベルなことも体験を通して学んではいるわけです。

亀：つくりたいってなると、自ずと学びたくなっちゃうんですよね。

熊：はい。で、その様子を見ていた大人から、こんな楽しそうにしていて大丈夫ですか？って心配そうに言われたことがあるんです。で、なるほどなあって。あの、ロダンの「考える人」の像がなんか険しい感じであるように、なにかこう苦しみ抜いていることがセットじゃないと、なにかを学んだってこととして実感できないってことがあるんだなって。昔のスポ根漫画じゃないですけど、汗水たらして吐きながら練習しないと上達しないみたいな。今では、さすがにその感覚は減ってきていると思いますけど。

亀：あははは。だと良いですけどね。

熊：それでまあ、なんかここまでの話で、亀井さんがジャンルは違えど、ずっと同じようなことをやられていたんだなということを感じてしまったんですね。というのも、建築を「固いもの」ではなく「やわらかい」ものとして捉えるという実験的な試みをしていた人が、教育の制度やカリキュラムのような「固いもの」を同じように臨機応変なものとして捉えようとしているという。すべてを「responsive」なものにしようとしているというか。

亀：「Responsive Environment」の「responsive」って、「応答」とか「呼応」ということで、人の動きとか、音とか、いろんなことに対して形が変わったり、場そのものが変わっていくような場所を、ということだったんです。

熊：うん。それを教育の領域に置き換えたらこうなっちゃった、みたいな感じだなって。子どもたちの、その時の気持ちや興味関心に呼応するという。

亀：そうですね。そのつもりでね、動きたいなと思いながらも、なかなか難しいなっていうところも、今感じているところですね。熊井さんも、かたい雰囲気の会議にずっといると、ゲップが止まらなくなっちゃいますもんね。

熊：あー、それは、なんか身体が反応しちゃうんですよね。だからまあ、理想を口にするのはまあできたとしても、それを現場で、今の制度の中で具現化していくのはやっぱり本当に大変ですよね。でも、その「個別最適化」みたいな話で言えば、亀井さん、自転車が好きな生徒さんにねえ。

変化の原因になることができるという感覚を育む

亀：その不登校支援のスペースに来た子に一番最初に、なにか一緒にやりたいことある？って聞いたら、サイクリングって言われて…。それ、俺もやりたいけどねえと思いつつ、一応学校に確認してみたら、まあ当然駄目ってなって、そうですよねって。

熊：あはははは。その子の意見を聞いたからには、ちゃんと確認するんですね。

亀：そこはねえ、やっぱしますね。その彼は、家族旅行でサイクリングロードを自転車で巡ったのがすごく楽しかったそうなんですよね。なので、そこが彼のスタート。旅をきっかけに彼もそういうのに乗りたくなってきたっていうんで、ようやく手に入れたところだったみたいなんですよ。じゃあ、まあサイクリングを一緒にやるのは難しいけど、それの整備を自分でできるようにしようかって話をしていて、そういえば熊井さんの知り合いで自転車屋さんのお兄さんがいたなっていうのを思い出したんですよ。

熊：後から本人に聞いたら、そういう中学生との出会いは、とてもよい体験だったって言ってましたよ。

亀：ありがたいです。パンクの修理とかは、やっぱ自分でできた方がいいよねって、2時限まるまる教えてもらってね。普通のママチャリみたいな自転車だったらまだ修理しやすいんですけど、彼のはタイヤがめちゃくちゃ細いロードバイク。タイヤを車輪のリールから外して、また装着して元に戻すのも、細いと大変なんだよなと思いながらだったんですけど、その自転車屋さんからも「これ下手すると、穴が開くから気をつけてね」って言われながら、でもなんか「僕、やってみます」みたいになってて。すごい必死になって、多分30分ぐらいずっと格闘しながら、最後のタイヤとリールを装着する作業をガコッて自分でやれて、僕も本人も自転車屋さんも一緒になって喜びあいましたね。。

熊：おー。

亀：さらには、ちょっとしたギアのズレみたいなのもギアの段数が多いと起きやすいんですけど、その調整の仕方も教えてもらって、その後、自宅に帰って、お父さんとお母さんの自転車もちょっと直しましたみたいなことも言ってくれるぐらいすごいハマってくれて、学んだことを活かしてくれているんですよね。

熊：その彼の中で、自分自身の暮らしや興味関心の延長線上にあるというか、気持ち的にも必然性を感じられる体験だったんですよね。

亀：そう。それで、職業体験みたいなのがその学年であって、みんな体験させてもらった職場に感謝状みたいなのを書いていたので、その彼に書いてみる？って聞いてみたら、書きたいって言うんでやってもらって、学校にも提

出ができたんですね。そこまで含めてすごい良い体験をさせてもらったなって。彼にとっても、自転車の楽しみ方がすごいわかったので、元気になるきっかけでもあったんですよね。

熊：嬉しかったでしょうねえ。

亀：僕も嬉しかったですからね。そういうふうにその道の大人を連れて来ることもできるだろうし、それ以外にもいろんなやり方で、その子たちの「やりたい」とか「できた」ということと向き合っているんですね。僕と一緒に支援をやってる方は、マンツーマンの会話をものすごいじっくり時間をかけてやっていて、僕にとっても勉強になるんですね。それで、小学校のときから校長室にしか行けなかったような子が、やってみたいことや将来こうなりたいという気持ちが出てきて、今では高校に行きたいっていうことで、数学の授業とか部活にも出たりしているんです。なんかその変化っぷりたるや、人間はきっかけさえあればすっと変わることができるなって、思わせてくれるんです。

熊：誰しもが、スイッチのようなものがあって、それを押せているかどうかみたいなところってありますよね。

亀：なんか、結構みんな諦めがちな空気があるので、いやこんなに変われるじゃんって、必ずそういうスイッチがあるんだよっていうことを伝えていきたいなって。最初は元気がなかった子たちが、なんかもうやる気がみなぎっていくような感じになっていくことを見ることができる環境に、僕はいることができているし、そういう変化が生まれていくのは、やっぱ、やってて良かったなっていうところではありますね。

熊：そうですよねえ。えっと、諦めがちな空気って、何をやっても無駄でしょ、変われないでしょ、みたいな感覚なんですかね。

亀：やっぱり最初はそうですね。

熊：発達心理学を専門とするキャロル・ドゥエックっていう、スタンフォード大学の先生がいるんですけど、その人が「グロースマインドセット（growth mindset）」と「フィックスドマインドセット（fixed mindset）」というものを、対比させた研究をしているんですね。後者の方は、それこそ、要は何をしても「変われない」「どうせ無駄」と思ってしまうような心理的な傾向で、前者の方は自分自身を「変わっていく」存在として思えている心理的傾向を指すんですね。で、まあ、当然その前者の方が良いんですけど、なぜそうなれないか？というと色々とあると思うんですけど、自分自身が「変化の原因になれるという感覚」がないからだと思うんですよ。だから、自分の発案から大富豪の大会が行われるとか、自転車に関する特別授業が行われるということは、まさに、その「変化の原因になれるという感覚」を育んでいるはずなんですよね。

そこにいていいと思える感覚を育む

熊：ここまでの話って、その中学生たちが「自分がそこにいていい」と思える状況に学校がなっていくというストリーでもあったと思うんですけど、それって公園にも当てはまるというか参考にすべき話だなとも感じていたんですね。その子たちから湧き出ているものと向き合ったり、ちょっと元気がなくなったとしても、湧き出るはずだって信じて見守って、で、湧き出るものを回復してきた時に、ちゃんと流していくという。つまり、やってみたくなっちゃったことがあるなら、どんどん試行錯誤しながらやってみようよ、ということをやっているわけで。学校

とか教室が、自分たちがやりたいことができる場所だよ、そのやりたいことを言っていい場所だよっていうのが、メッセージとして含まれているわけですよね。

亀：そこは意識しているし、もっと言うと、学校や教室に行けるようになるというのが目的ではなくって、やっぱ、本人が楽しめているかどうかに尽きると思うんですよ。もちろん3年生になるといろいろ考えることもあるだろうけれど、まずは言いたいことを言えるところじゃないとですよね。

熊：その言いたいことを言える状況というものを担保することに、注力をされているんだなということを感じます。そこが基盤というか。

亀：それこそ「親と喧嘩しちゃってさ」みたいなことを話し合ってるの見ると、そういうことも含めて言える場所になってるのは、すごい嬉しいですね。胸の内を少しでも話せる場所があるだけで、結構違うじゃないですか。そういう場所がね、どんどん増えていくと、なんかちょっと頑張るかって思えるだろうし。それは、別に学校の中じゃなくても全然いいと思うんです。近所のおじさんやおばさんに吐き出せても良いはずですよね。そうだ、僕ら、学校の校庭で焚き火しているじゃないですか。

熊：ああ、「にしみたか学園コミュニティ・スクール委員会」関連の取り組みのやつですよね。亀井さんが会長で、僕が副会長という。

亀：それそれ。放課後の子たちが、なんかもうこのテストを家に持って帰りたくないっていうのがあれば、それを燃やして帰っていいよ！って言えちゃうような場所をつくりたいぐらいの気持ちがあって。極端な話ですけど、でも、それくらいの空気があっても良いなって思っていて。焚き火で、焼き芋をやってて、0点のテスト用紙とかを焚べてみたら、あれ、芋が甘くなったね、とか。

亀・熊：なははは。

亀：でもまあ、冗談で終わらせたくないというか、なきにしもあらずかなとか思うのは、テストの点をすごい気にしてフリーズしちゃう子って結構いると思うんです。でも、もちろん点数の高い低いはあるかもしれないけど、でも大事なのは、自分が何が出来てて何が得意でとか、逆にここが苦手だからもう少しやった方が良いみたいなことを理解することじゃないですか。気にすべきなのは、点数じゃなくてそっちでしょうって。点数が気になって、本来向くべき方向に意識が行かないなら、そのテスト燃やしちゃえって。それで次に進もうよって。

熊：なはははは。無茶苦茶なことを言っているようで、理屈が通ってるような気もしてきます。「自分がそこにいていい」という感覚を育むことってきっと、そういうことなんだろうなとも思います。まずは自分自身を抱きしめるじゃないですけど、受容する。その上で、自分自身や周囲の環境に働きかけていく。何かしらの変化の原因になっていく。それこそ亀井さんが言うような、「良いようになるんだったら、どんどん良いようにしてっちゃえばいいじゃん」というものをしていく。なんか素直に思うのは、そういうことの積み重ねで、「そこにいていい」という感覚が、「ああ、この社会に生まれてよかった」というものになっていくような気もします。

亀：そうですよね。難しいのは、いつも僕自身が遊んじゃってるなっていうことで、なんか子どもたちや地域のための企画みたいのを考えてやろうと思ってるんだけど、いつも自分が一番遊んじゃってて、ちゃんと進行してくだ

さいとかって言われながらも、でもまあ他の人がやってくれれば、あとはなんかもうみんな楽しくいきましょうって。

熊：それでいいというか、それがいいというか。思うんですけど、子どもたちは基本的には、大人に教わりたいというよりも、一緒に遊んだり、一緒に驚いたり楽しんだりしていたいと思うんですよ。

亀：あ、それはそうですね。

熊：一緒に遊んでて、気づいたら教わっちゃってたぐらいのことが必要なのに、いきなり、さあ教えてあげますよみたいな感じて来られたりすると、その先にあるのは、「できたかどうか」「何点取れたか」みたいな評価にさらされることじゃないですか。一緒に遊びましょうだったら、「楽しめているかどうか」になる。

亀：俺、超悔しがってるもん。トランプとかも、「また負けたー」みたいな。

熊：それ、真剣に遊んでいるから、悔しいんですもんね。その真剣さがないと、子どもたちにも見抜かれると思います。

亀：まあ単純に楽しんじゃっているからなんですけど、でもその中でこそ、向こうもニヤッとできて、だんだん慰めてくれるようになりますからね。「先生、次はいけると思うよ」「先生、次は良いカードを引けるといいね」とか言って。でもなんかそういう関係ができると、やっぱ朝起きるのが苦手だよねっていう子も多いから…。

熊：体質で、努力ではどうにもならないパターンもありますからね。

亀：そう。それでやっぱ関係ができると、「また、遅れてきたなー」みたいなことを言っても、向こうも「テヘヘ」って言える感じになるんですよね。言われて、シュンってなりすぎると、また学校に来られなくなるし、関わりを持てなくなる。それはあんまり良くなくて、というか、それは悪いことってやっぱ思っちゃうんですね。こっちも遅刻そのものが譲れない大切な問題かと言うと、そうではないんで。「また、起きれなかったなー」とか言って、「テヘヘ」って言って、教室に入って来れるくらいが丁度良いんじゃないですかね。遅刻は遅刻だけど、それをほどよく受け止められたらそれで良いじゃないですか。きっと、自分でもちゃんと朝起きたいと思っているだろうし、遅刻しちゃうのは本人も嫌なはずじゃないですか。それはもうしょうがないことだよねって話をしてるし、でも同時に「遅れてきちゃったけど、しょうがないよね」って言われて慰められ続けるのも、それもそれで嫌だろうし、だったらなんか「遅れてきたな〜」っていうふうに、ちょっと笑ってあげた方がいいこともあるよなって。

熊：かたくなっていくものを、やわらかく。重くなっていくことを、かろやかに。亀井さんって、色々と首尾一貫しているなって感じちゃうんですけど、なんというか、言葉や表情って、人間にとって個人的なものでもありつつ、結構パブリックなものでもあると思っているんですね。要するに、言葉や振る舞いを、贈り物のように扱っていく感じがありますよね。包丁のように突き刺すものではなくって。

亀：それは、ありますよね。もちろん厳しい言葉が必要なときもあるとは思いつつも、ある程度のことは、許されたいなあって。僕、児童館でも働いてるけど、大体5分ぐらい遅れていっちゃうんですよ。もちろん、良くないことだと思いながらも、1人のスタッフさんが、僕が遅れて行くと爆笑してくれるんですよ。「ま〜た、亀井さ〜ん」って。それで救われることが、結構ある。逆に2分早く着いたりすると、「ええ！どうしたの！」って、笑い

ながら驚いてくれる。いや、もちろん遅刻するのはいけないんですけど、そういうことのおかげで、ものすごい気持ちよく働くことができているんですよね。

熊：やっぱりルールを守ることはあくまでも手段で、ルールを守ることで得たかったのは、個人や組織や社会がより良くなることじゃないですか。その成果を手にすることができるんであればね、そのルールそのものは本来柔軟にしていきたい気持ちはあるし、なんならそのルールそのものをみんなでつくっていきたい気持ちもあります。ところで、亀井さんって楽しそうじゃないですか。そういう気持ちって周りに伝播していくと思うんですよ。そういう舞台に公園がなったらいいなって思うし、なんなら、そういう許し合っているような大人の伸びやかな姿をみて、子どもたちにも、この社会で生きていくことが結構楽しいことだよなって感じてもらいたいです。

亀：やっぱ、それを背中で語っていきたいですよね。

熊：それこそが、教育という営みでもあり、大人の務めなんじゃないかと思います。

田村利治さん、内田薫さん

医療的ケアが必要な子にも勧められる公園を

取材日：2024年7月19日

医療的ケアが必要な子どもたちにとって、公園はどうか

田：このインクルーシブ公園っていう話が来たときは、すごく興奮しましたね。そういうのは、やっぱりつくるべきだし、公園というのはターゲットという考え方自体があっちゃいけない場所だし。

熊：誰にもひらかれているということですよね。

田：そうですね。ただ、ターゲットだったり対象というものを確定しちゃうのは絶対に良くないんですけど、とはいえ、どういう方が来るかっていうのは仮定しないと、本当の意味でのインクルーシブにはならないと思ってます。

熊：ああ、なるほど。

田：昨年度にもお話をしていたんですけど、遊具の整備についての検討っていうのは、結構簡単に終わっちゃうのかなとは思うんですね。ただ、その周りの整備が一番お金が、というか工夫が、必要なのかなと思っていました。みんな公園に行きたいんだけど、行けない理由は、ほとんどがまずは移動手段の話ですよね。家の近くに、そういった公園があれば良いんですけど、そもそも行けなかったら意味がない。あとは、やっぱりトイレも大切ですよね。医療的ケアが必要な子もそうですけど、どんな子たちにでも対応をしないといけないですし。それに、小学校が終わってから、わーっと遊びに来る子たちのためにもっていうのも含めて考えると、結構配慮しなければいけないことが壮大になってくるのかなと。とはいえとにかく、インクルーシブっていう言葉だけが独り歩きする公園にならないと良いなとは思っていました。

熊：まさに、まさにというところです。

田：「だれでもトイレ」って街中にありますけど、寝られるようなベッドもないと駄目だし、車椅子がどんな方向からでも入れるような配置を考えないと駄目だし。

熊：そうですよね。

田：訪問看護ステーション、児童発達支援事業所、相談支援事業所を運営しており、日ごろたくさんの方にお会いします。今日は医療的ケア児相談窓口「あいびー」として来ているので、その立場でお話をすると、医療的ケアを行う場所がない時点で、インクルーシブ公園ではなくなっちゃうのかなっていう想いがあります。

熊：ああ。医療的ケアが必要な方が、そのケアをするスペースがそもそも公園にない。

田：はい。そうですね。衛生的に外ではやってはならないものもあると思うので、そこはご家族や医師との話し合いだとは思うんですけど、でもそういう配慮がないと、医療的ケアが必要な子は、なかなか公園に遊びに行けない。

熊：あの、そのう、排泄行為という領域のケアを行う場所としては、満足いく状況になっているかどうかという問題はありますけど、インクルーシブトイレというものがあるにはあるとして、それとは別に排泄行為以外のケアを行う場所がトイレ以外にも必要になってくるということですよね。

田：そこしかないからってなると、たとえば医療的ケアをトイレでやってくださいということになると思うんですけどね。ただ、それはトイレでやるものなのかっていうのは、また考えなきゃいけないんじゃないかなと思うんですね。

熊：そ、そうですよね。

田：トイレでやるにしても、その中で個室っぽく使える状態になっていれば、処置室でちゃんとやれてるっていう感覚や考え方に少しはなるのかなとは思うんです。

熊：あの、その、考え方ということで言うと、排泄行為というものが人間の生理現象である故に、公園とかの公共スペースにその必要性を満たす場所が必要であって、それが即ち「社会権」というか、まあ、その「人間らしい生活」を送るために欠かせないっていう社会的な了解がありますよね。で、それで言うならば、医療的ケアを必要とされている方のための処置スペースも同じようにして、その必要性が満たされるべきだっていう話ですよね。よくよく考えると、本当にそうだなって感じるんですけども、現状、図書館とかも含めて公共的なスペースでそういった配慮はなされているものなんでしょうか。

田：そうですね。そのためにあるという場所はないと思います。みなさん、どこでそれが可能かっていうのを探すしかないですね。

熊：ああ、広めのトイレとか、人目のつかない端っこのスペースとかを。

田：はい。それで、そういうところで処置をしていると、「何やっているの？」と寄ってきてくれる子ども達もいます。そういった機会に、ケアの必要性を伝えることで理解を得られる機会になれば良いのですけれど。そうなれば、それはそれで良いこととは思うんですけどね。そういうことも、インクルーシブ公園で生まれる風景としてはすごく良いというか、必要だなっていうのは思います。ただ、そういうことが嫌だなって感じるご本人の方や、そのご家族もいらっしゃるって思うと、ちゃんと部屋があるといいなって。

熊：なるほどです。

田：別にすごい立派な部屋じゃなくて良いと思うんですよね。処置がちゃんとできれば良いし、そういうことをやって良い場所なんですっていうことが、しっかり位置付けられていれば、もう一気に、必要としている方々に広がっていくかなとは思いますけど。

熊：まだまだ整備は追いついていないような気もしますが、それこそ授乳室が必要だよねってなったのも、ここ最近ですよね。

田：そうですよね。お母さんが車の中まで戻っていくか、それこそトイレの中でっていうものでしたよね。授乳室の整備は少しずつ進んでいますけど、医療的ケアに関しては、まだまだというか、無いんですよね。ただ、そこまで言うと、話が壮大になっていってプロジェクトとしては多分動けなくなるだろうなとも思いますし、一方で、「医療的ケアの方たちのための公園を」みたいになっていっちゃうのもちょっと違うかなとは思っていたんですね。

熊：冒頭におっしゃられていた、公園は「ターゲットという考え方自体があっちゃいけない場所」という話ですよね。

田：そうですね。考え方をしっかり深めつつ、どうやって裾野が広いものにしていくのかっていうところは工夫が必要なんだろうなって考えていたんですね。そうしたなかで、医療的ケア児の子たちに対してどうしたらいいかなって言われたら、専門的な立場としてアドバイスはできるかなと思ったんですけど、それ以外の領域の方々の知識や知恵も集めていって、それを全部ガッとまとめていくと、みんなが行けるところになるのかなとは思っていたんですけど。

熊：まさに、それをちゃんとやりたいです。

地域の資源を有効活用すること

熊：医療や福祉などの社会的資源を、医療的ケアを必要としているお子さんや家庭につないでいくというコーディネーターを田村さんされているじゃないですか。

田：そうですね。

熊：なんと言うか、その延長線上の話にもなってくるかと思うんですが、「医療的ケアを行う処置室をどうするか？」という課題に対して、「既存の社会的資源をどのように上手に活用できるか？」という視点があると思っているんですね。

田：あると思います。

熊：新設でつくると、それはそれで費用が積み上がっていく。でも、たとえば、まだ仮説段階なんですけど、公園の近くにある「集会所」をそういった場所として使えないかなっていうものがあるんです。地域の自治会や町内会の方々が管理されているものなんですけども、そのスタイルも素敵だなと感じるんですね。そういった方々に協力を頂けないかなって。そういうところって、和室があるんで寝っ転がれたり、トイレがインクルーシブデザインに改修されていたりもしているんです。ただ、利用申請とか鍵の開け閉めの手続きが必要なので、そこのハードルはあるんですが、理想を絵に描いた餅にしないために、そういうことも踏み込んで考えられないかなって。

田：それ、実現できたら良いと思います。公園の中じゃなくても、その隣の施設に入って行ってできるところがあれば、もうそれで、そこはある意味インクルーシブな場所になると。

熊：なんかそんな感じで、うまくマッチングが成されることで状況が前進することってある気がするんですよね。おそらく行政の中での縦割りを越えたり、市民や民間同士の協力も欠かせないことではあると思うんですが。

「みんなのために」が曖昧になると、みんなのためにならない

熊：今日、田村さんのお話を伺っていて、「どういう方が来るかっていうのは仮定しないと、本当の意味でのインクルーシブにはならない」というご指摘も、深く強く印象付けられているんですね。というのも、要はその「仮定」というものに、想定されていない方々がいたということじゃないですか。

田：そうですね。

熊：それと、ご本人や保護者の方のご意向ももちろん踏まえながらですが、医療的ケアの処置の様子を知るということも大切な機会であると、おっしゃっていたじゃないですか。思い出されるのが、地元の小学校に、医療的ケアが必要なお子さんが入学されてですね、今じゃ、酸素ボンベを持ちながら、子どもたちと鬼ごっことかしているんですよ。それが普通の景色になっている。授業中も、隣に看護師さんかな、ケアされる方がいらっしゃって授業を

受けることができている。なんかその子にとってもきっと良かったと思うんですけど、その周りにとっても大切なことだなって思っていたんです。公園が、そういう交流というか学び合いの場になると素敵だなとも感じます。

田：僕らが今携わっている医療的ケア児のコーディネートは、どうやったら一緒に過ごせるか、受け入れていけるかをご家族の方とともに探っていくという支援をしています。無理だとはじめから考えず、どうすればできるかを一緒に考えています。

熊：ああ、みんなでどうにかしていくっていうことは、社会の基本であって欲しいです。

田：熊井さんのおっしゃった小学校でも、みんなで過ごすことでお互いを知り、助けてくれる。良い状況が生まれていくのは僕らも見てきています。公園でもそれが生まれるはずなんですよね。やっぱり子どもたちは障害があってもなくても結構みんな仲良くやっているんですよね。

熊：親御さんの感触として、子どもたち同志のそういった障壁のないコミュニケーションによって救われる感覚があるというお話も伺いました。

田：そうなんですよね。大人が勝手に壁をつくっているという部分はあったりするなっていうのは、この仕事をさせて頂いている中で感じているところです。

熊：大人側の問題っていうのが多いんでしょうね。

田：プロジェクトの責任の所在はもちろん大切なんですが、未来を見据えて、みんなが来れて、みんなが遊べてっていうところをちゃんと目指そうよっていうことをしないと、動けなくなっちゃうのが怖い。

熊：少しずつでも動いていきたいです。なんか、理想を目指すっていうことを忘れちゃうと、何を成し遂げたいのかっていう話をちゃんと具体的にイメージするまえに、大変そうだからやめておくかとか、予算がないからやめておくかとか、動かない理由ばっかりに目についちゃうことって多い気がします。

「私たちのことを私たち抜きで決めないで」

熊：あの、その、「医療的ケア児」のような言い方って、今では結構一般化してきている気もしますが、昔からある言葉だったんでしょうか。

田：いや、昔は「医療的なケアが必要な子」っていう感じで呼んでいましたけど、「医療的ケア児」って言うのは、ここ最近のことだと思います。2006年に、国連で「障害者の権利に関する条約」というのが採択されたんですけど、多分その辺りから「医療的ケア児」という言葉が広まってきたのかもしれません。

熊：「障害者の権利に関する条約」って、「私たちのことを私たち抜きで決めないで（Nothing About us without us）」を合言葉に世界中の当事者の方々が参加して作成されたというものですよね。日本は、その条約に批准はしたものの進みが遅いっていうことで国連から勧告を受けているんですよね。

田：そうですね。弊社が市から委託を受けている「小金井市医療的ケア児相談窓口あいびー」は2023年7月から相談受付を始めました。医療的ケア児コーディネーターを配置し相談にあたっています。もともと、私たちは、医療的ケア児と関わる機会が多かったので相談や支援の体制整備にかかわることができ良かったと思っています。「医療的ケア児コーディネーター」って、専門の研修を受けて修了する必要があるんですけど、そういう人材がいる相談窓口が整備されているのって、あまり多くはないのではないですかね。そういった意味で小金井市は早期に取り組むことができていると思います。

熊：そうかあ。医療的ケアが必要で在宅で生活している子どもたちが日本で推定2万人という数字をニュース記事で見たんですけど、気軽に相談できたり、医療や福祉や教育の社会的な資源とのつながりをコーディネーションをしてくれる役割を担っている人がいるというのは、めっちゃ必要なんだろうなって思います。気にかけておく必要がある事がたくさんある状態が常に続いているというのも大変だと思うので、親御さんへのそういう負荷が社会の中で分散されていった方が良いはずですよね。

利用者の方にお勧めできるようになるという、明確なゴール

田：たとえば、「play here」で目指している公園が、本当にできたらあったら勧められるんですよね。ご家族で遊びに行ったらどうですかって。「あいびー」では、小金井市の医療的ケアが必要な0から18歳までの方の全員とお話をさせて頂きたいというのを目標としてやっているんですけど、そこで話題にすることもできるし。小金井市にお住まいじゃない方にも、もちろん勧められるんですけど、今、本当に勧めたくなるところって、なかなかないですからね。

熊：あー、なんかプロジェクトの目標の持ち方って結構大切だなって、常々感じているんですが、田村さんたちが勧められるような公園にするというのは、明快だし、持つべき目標な気がしました。

田：あそこなら医療的なケアがあっても安心となったら、私たちも安心して勧められますよね。

熊：内田さんはどうですか。

内：私は、医療的ケア児の兄弟や姉妹も一緒に来ても楽しめる公園になったらインクルーシブの始まりになるかなって思っていて。後は、公園に遊具だけ設置するよりは、やっぱり人がいないと難しいのかなって。

熊：人。

内：医療的ケアならあそこで出来ますよとか、この遊具はこうやって遊ぶと面白いよって、現地で声かけてくれる人です。公園の看板や張り紙に案内が書いてあるかもしれないけれど、自分も自由に使っていいんだ、受け入れられているんだって思えるためには、そういう話をしやすい人がいる環境が良いなって思いますね。

地域は本来、人が育つ場所

田：人員を置く予定ってあるんですか？

熊：それ、めちゃくちゃ重要な論点だと考えています。もっと言うと、3つのポイントで重要だと思っているんですね。まずは、「利用者の方々にとっての利用のしやすさ」というところ。次に「福祉サービスといった社会的資源へのつながりやすさ」というところ。更には「地域で人が成長していく仕組み」ということなんです。一つ目は、内田さんと同じようなことをイメージしていまして、二つ目もまさに、あいびーさんのような相談窓口やコーディネーションの話になってくるんですけど、要は「相談しに来れない人や声をあげることが難しいけど、本来とても必要としているという方」との接点をつくる機会ということなんですね。そのためにも公園が良い舞台になるんではないかって思うんです。今ちょっと仮説的に考えているのが、毎日は難しいにしても、ゴザのような敷物や、シャボン玉や虫眼鏡やフラフープや床に絵を描けるチョークとか、そういったツールを貸し出すような、移動式の屋台のようなものがあると良いのでは？というものなんです。で、そっからが肝心で、その屋台は無人じゃなくて人がちゃんといて、その人って言うのも、それこそ田村さんとか内田さんのような専門性が高かったり相談窓口の方だったり、理学療法士や作業療法士のための学校である社会医学技術学院さんが市内にありますけど、そこの学生だったり、教育を学ぶ学芸大学の学生だったり、なんなら役所の方も、そこに居たら良いような気がしているんですよ。

田：面白いですね。

熊：ですよねえ。喫茶店でもBARでも、日替わり店長とかってあるじゃないですか。あんな感じで、地域のそういった方々が代わりばんこに、そこに居るっていう。ちょっとした雑談とかも含めて、会話がしやすくなると思うんですね。

田：相談をしに行くというよりは、ものを借りに行った時についでに話せるということですよね。良いかもしれませんね。

熊：そうです、そうです。なんか、その「ついで」というのが、すごい重要な気がするんですよね。そういった日常的な営みの中にどうやって落とし込んでいけるのかっていうことを、インクルーシブ遊具の整備だけじゃなくできたら良いなあって。ただ、まだ、あくまでも僕が勝手に喋っているみたいな段階ではありまして、こうやって田村さんたちとお話をすることを通して、イメージを膨らましたり手応えを掴むことができている状況ではあります。それに、結局、今回のプロジェクトの予算根拠である東京都の補助金も期間的な制限もあるんで、そういった「人が稼働するというところ」に、どうやって財源的な紐付けをするかというところは、考えていかないといけないことではあるんです。

田：理想を目指していきたいですよね。

熊：本当に。こうやってお話をしていると、より一層、そう思うことが出来ます。やっぱり、人手がかからないようにすればするほど、一方で、人が育つ機会がどんどん減っていくという側面もあると思うんですね。さっきの、おもちゃなどの貸出をする屋台の話も、そこにいる事で、地域や当事者の方々の実情に触れることができたりすると思うんです。なので、人手を減らしても良いところと同時に、ちゃんと人手をあえてかけるところのメリハリを意識していかないと、地域というものが人が育つ場所じゃなくなっちゃう。

田：そういう場にしていきましょうよ、公園を。

102
小金井市医療的ケア児相談窓口
あいびー

山脇弘美さん

やさしい日本語を、やさしいまちから

取材日：2024年7月29日

外国の方を受け入れる準備がないという問題

山：小金井市って、外国人の相談件数がゼロなんです。

熊：そうなんですか。知らなかったです。

山：外国人は市内に3500人ぐらい住んでいてニーズがないわけがないんですが、市内に外国人専用の窓口がないんです。外国人相談も「随時」になっていて、予約をしないといけない。

熊：そこまでのハードルが高そうですね。

山：そう、多分そこまでたどり着けないんだなって。だからだと思うんですが、相談件数がここ数年ずっとゼロの状態。そんなわけないだろうって。

熊：外国ルーツの方がそれなりに暮らしているけども相談件数がゼロというのは、相談する必要がないからということでもないような気もしますね。ちょっと正直、不勉強で、僕自身が知らないことがたくさんありそうです。今日はそのあたりを勉強するきっかけにもしたいのですが、そもそも山脇さんはどういった経緯で、外国ルーツの方の支援をされ始めたんですか。

山：うちの家族は息子が小学２年のころから４年あまり、アメリカで暮らしていたんです。息子ははじめは英語がまったくできず、学校に行きたくないと泣いてばかりいたんですが、アメリカの公立小学校には外国から来た子どもが英語をイチから学べる仕組みがしっかりあって、友人や地域の人にもたくさん助けてもらいました。日本に戻ってから、今度は自分が外国人向けのボランティアができないかと思ったんです。息子が小金井市内の高校に入学したので、2021年に横浜から小金井に引っ越してきたんですが、何か活動をはじめたいと思って社会福祉協議会に電話したら、「KISSA（小金井国際支援協会）さんがありますよ」って教えてもらって。KISSAって、もともとは外国人の小学生の日本語・学習支援がこの地域に無いっていうことで、その時は貫井北センター（公民館貫井北分館）で、月に１回そのための集まりをやっていたり、夏休みの宿題サポートをしていたんです。ぜひ参加したいと思って22年6月に入会したら、わたしが「入門・やさしい日本語」認定講師でもあったんで、他の支援者向けにその講座もやることになって。

熊：ああ、「やさしい日本語」。届けるべき情報も、その言葉の選び方で届き方が全然変わっていくんだよなって思っていました。

山：そうです。ただ、講座だけを何回もやり続けるんじゃなくて、小金井市や周辺の自治体の状況もお伝えしていこうと思って、調べてみたら驚くことの連続で。近隣の自治体には外国人の支援を担う多文化共生の部署や自治体と連携した国際交流協会があって、外国人住民がいつでも生活や子どものことなどを相談できる仕組みがあるんです。だから、小金井に暮らす外国人はどうしているんだろうって。市内のいろんな方々とお話をするようになったら、あちこちでそういったことが話題になるんですよ。ということは、やっぱり困っている人がいないというわけじゃなく、外国人のニーズとして集約しているところがどこにもないんだろうなっていうことがだんだんわかってきて。

熊：現場での肌感とリサーチの結果が重なって、危機感が募るというやつですね。

山：実は、「EDAS（イーダス）」という団体にも参加していたんです。キャッチコピーが「来た時よりも、もっと日本を好きに」なんですけど、そこには、日本語学校の代表とか日本語教育の専門家とか司法書士さんとかいろんな分野で外国人とかかわっている方々が集まっていたんですね。教育とか法律とか就労とか、もっとジャンルを越えて情報共有や政策提言もしていこうよって。そこで定期的に開かれていた勉強会や視察会に参加して、政策的な課題をたくさん知り、別の専門講座で「やさしい日本語」も学んだんですが、実際に現場に出るのは小金井が初めてで。活動したり調べたりすればするほど、小金井市はこれで大丈夫なのかなって。それでまずは、地域のことをもっと知りたいと思って、市内の公園で開かれている「道草市」に行ったりしたんです。

熊：おお。道草市の立ち上げに関わっていたので、とても嬉しいです。山脇さんは、その道草市で小金井市の小林さんと出会ったんでしたっけ。

実際のところを知るところから、既にそこにある可能性を知るところから

小：その場で1時間半くらいお喋りさせて頂いて、そこで少しでも状況を改善させたいと感じまして、こうやって今回の施策にも外国の方向けの配慮を入れようとしている次第です。山脇さんのおかげです。

山：ちゃんと耳を傾けてくれて、「なにかできませんかね」って真剣に言ってくれた、初めての市の職員の方だったんです。それで思わずガーッと話しちゃって、その後1年ぐらい音沙汰がなかったんですけど、突然、今回の「play here」の話をいただいて驚いたんですけど。

熊：どう芽が出るかわからないですし時間もかかりますけど、やっぱりそうやって地域の実情のようなことは、行政サイドには、どんどんインプットしてもらったほうが良いですよね。逆に、地域サイドも行政の実情を知らないとではありますが。

山：そうですよね。地域の実情でいうと、市内のお店やイベントに外国の方々が結構いらっしゃるようなんですよ。観光とかではなくって、地域にお住まいの方々で。お店の方から「英語ができないし、どうしたらいいかわからない」っていう声も届くんですけど、実は日本に住んでいる外国人の8割ぐらいは「やさしい日本語」だったら通じるんですね。

熊：あ、そうか。そうなんですね。

山：みなさん、なかなか知らないですよね。英語を話さないといけないってなって壁をつくりがちなんですけど、実際のところそうでもないんです。だから、そういうところも伝えていかないとですよね。

熊：そんな気がしてきました。

山：なので、道草市に出店して「やさしい日本語クイズ」をしたり、自分たちの家にある外国のグッズのフリーマーケットをやったりもして、そういう機会を広げていきたいと思ってきました。昨秋は梶野公園のお祭りにも出ましたし、今年も出店する予定です。

熊：山脇さんがKISSAに参加されて、まだ2年くらいだと思うんですが、なんか短期間で動きが怒涛な感じがありますね。

山：外国人住民が参加したり、交流できる場を地域で増やしたいっていう話をしていたので、今年３月にKISSAの中に多文化交流部っていうのができて、取りまとめ役になりました。

熊：おお。

山：日本の唯一のネパール人学校が荻窪にあって、そこの初代理事長が小金井に住んでいるんです。親しくさせてもらっていたというのもあるんですが、市内にそういう方がいらっしゃるのに、話を聞く機会がないっていうのはもったいないって思って今年の春、「多文化まなびの会」という講座をしたんです。

熊：人に対して資源という言い方もなんか違う気もしますが、地域に既にいらっしゃる方の知見をもっと活かしていくことができるっていうのは、とても重要な気がします。そういうことの積み重ねで、地域がより活性化していく感じも受けます。

山：そうなんですよ。それと、東京学芸大学の先生からご紹介いただいたトルコからの留学生がいるんですが、トルコと日本の能登半島の両方で災害ボランティアをされていて、そのことを話してもらいたいなって思って、７月にも2回目の講座をしました。トルコのお茶やお菓子も取り寄せて、みんなで味わいました。市内には70カ国以上の国から来ている方がいるので、さまざまな文化や食べ物を紹介してもらって、いろんな形で続くといいな、と思っています。

熊：なんかスゲえっす。ワクワクします。

「申請主義」という困難

山：外国人の子どもの教育支援は深刻で、もう自治体によって教育委員会の支援体制が全然違うんですよ。武蔵野市は教育委員会の中に専門の部署があって、外国人の子どもが転入してくると、担当者が本人に会ってどんな支援が必要かを確認するんです。たとえば日本語がまったくできず、日本の学校の習慣もわからない状況で通うことになると、もうトイレも行けないわけです。なので、そういう場合はまずは母語通訳をつけて、落ち着いてきたら学校に日本語指導員を派遣して、学校生活に必要最低限の「サバイバル日本語」を個別に教える。放課後の日本語教室というものも市内に3箇所あるんですけど、そこに通うこともできる。

熊：サバイバル。そうかあ、そうですよね。それくらいのケアがないと、学校での授業もそうですが、生きていくことに支障があるということですよね。小金井市は、そこまでの仕組みがないということなんですよね。

山：ないんです。

熊：知らないと意識しないんですが、知り出すと、とたんに心配になってきます。

山：わたし、小金井市東町の友愛会館で開かれている子ども食堂のボランティアにも参加しているんですけど。

熊：おお。

山：そこでは、食堂とは別に週に2回、勉強会という形で学習支援をもう何年もずっと続けているんです。子ども食堂に来ていた中学生のリクエストで始まったそうです。その時間帯は友愛会館の２階が空いているとわかり、KISSAの現代表で、日本語教師の佐久間久美子さんに相談して、外国人の子どもの日本語・学習支援教室をやってみようってことで、去年の4月から毎週１回のペースではじめてみたんです。最初は子どもが２人だけでしたが、あっという間に10人ぐらいに増えて、今年４月から、もっと広いスペースが使える東センター（公民館東分館）に場所が変わりました。やっぱりニーズがあるよねって。

熊：おお。

山：それだけじゃなくって、学校と連携をしないとわかんないことがあるって思って、たとえば、海外から日本に来たばかりの子が去年の4月に市内の小学校に入ってくるって聞いたんで、知り合いのお母さん経由で学校の副校長先生に連絡をとって。

熊：おお。

山：「ボランティアで外国ルーツの子の支援をしているんですけど、サポート必要ですか？」って聞いたら、是非来てくださいって言われたんです。

熊：え、それって、山脇さんがそうやってアプローチをしないとどうなっていたんですか？

山：その子は、日本語がまったくわからない状態だったんですけど、通訳もなかったし、担任の先生も困っていました。自分の言いたいことがなにも言えない、もうほんとゼロの状態。教育委員会としては様子を見てからということだったようですが、武蔵野市だったら母語通訳が入るような状況だし、学校が教育委員会に専門の日本語指導員の派遣をお願いして、結局その日本語支援が入ったのは12月だったんです。

熊：4月の入学だから、それまでの8ヶ月はどうしていたんですか？

山：週に1回、KISSAでやっている日本語支援の教室に来てもらって、それとは別に週に1回、わたしが学校に行って、授業中、隣に座るというサポートをしていました。

熊：なるほど。

山：そんなのじゃ全然足りなんですけど、なにもないよりはマシかなって。途中で東京学芸大の学生がわたしの代わりに入ってくれて、12月にようやくっていう。そんな状況なんです。

熊：セーフティーネットが万全じゃないのは、しょうがないことだとは思うんですけど、そこから漏れてしまうような方や状況をどうしていくべきかっていうことは、考えないといけないことですよね。よく自治体サービスは「申請主義」だって言われますけど、つまり自分で申請しないと、そのサービスを享受できないわけですよね。原則としては、それで良いような気がするんですが、そもそも声を上げることが出来ない、つまり申請ができない方がいるっていうことを忘れちゃいけないはずですよね。だから、声が上がらないことや申請がされないことが、そこにニーズがないという判断には直結しないはずということだと思うんですね。その意味でいうと、「こういう方が市内に転入してきたら自動的にこういう対応をする」みたいな初期設定にしておかないと、今回のその子のように、アンテナを張り続けて目を凝らし続けて、ぐいぐいと入り込むようなことをしないと、必要としている方のところに支援が届かないことになりますよね。

山：そうなんです。おっしゃる通り、初期設定になってない。じゃあどうするかっていうのが去年のわたしたちの大きな課題で、それでKISSAとして小金井市に協働事業を提案したんです。「外国ルーツの子どもの教育支援」に関するシンポジウム開催、多言語の「外国人保護者のための小学校・中学校ガイドブック」の作成と配布、外国語人保護者向け入学準備相談会という3本セットで。ガイドブックでは、学校生活の説明や入学の準備の仕方や相談できるところを紹介しているんですけど、そういうものがあれば、それこそ初期設定として、小金井市に転居してきた外国人保護者に配れるじゃないですか。学校や教育員委員会とつながるためにも、そういうところから始める

のが良いかなって思って。予算は講師やデザイナーさんへの謝金や印刷費などの実費で消えるし、ボランティアでやるには思った以上にヘビーな内容だったんですけど。

熊：ボランティア。

山：日本語教師の資格を取るために養成講座を受けていたんで、それが幸いというか、ちょうど時間があったので、ほとんど仕事を入れずに、このことに費やしていました。

熊：いやはや、いろいろと考えさせられます。

外国ルーツの子も地域で育つものだから

熊：なんと言いますか、山脇さんたちの課題意識として、外国の方を受け入れる準備というものが小金井市にほとんど無いと言っても良い状況をどうするのか、困っている方々が顕在的にも潜在的にもたくさんいるんだからどうにかしないとっていうものがあるじゃないですか。小金井市に、他の自治体のように包括的にみていく公的な機関がないとなると、教育のことなら教育委員会で、福祉のことなら地域福祉課で、仕事のことなら経済課で、みたいな感じで既存の部局がそれぞれの持場で意識を向けていくしかないと思うんですね。それで言うと、公園というのも、制度的にも「公共の福祉」の増進というものを目指すわけですから、その観点もありつつ、小金井市の小林さんが山脇さんとの出会いと雑談を受けて、乗り出しているというのが実際のところだと思うんです。なにが言いたいかというと、公園の可能性という話題にも触れておきたくって。

山：公園から入っていくのはすごくいいと思います。意識っていうことで言うと、小金井の行政の中では、多文化共生の地域づくりの視点がないんですよ。この地域は外国の方が少ないのかなって思ったら、全人口に占める外国人の割合は武蔵野市とほぼ同じなんです。にもかかわらず、こっちではなにもなくって、隣にいったら外国の方向けの施策や情報が溢れている。すごい不公平だし、あまりも差があるから、そこはなんとかしなきゃなって。このままだと、なにも知らずに小金井市に引っ越してきた外国人がアンラッキーですよね。無い無い尽くしのなかで、やっぱり優先順位が高いのは、親の事情で日本に連れて来られた子どもの教育支援だと思います。とはいえ結局、子どもって学校だけじゃなくて、家庭や地域のなかで育つから、地域とのつながりが欠かせないんですよね。

熊：地域とのつながりという意味でも、公園は舞台として良いということですか。

山：公園は地域の拠点になりますよね。身近な公園で道草市のようなイベントがあって、そこで欲しい情報が手に入るっていうこともあるだろうし、地域の防災情報だって届けられます。地震がない国から来た方もいるし。他の自治体では、外国人の方向けの防災講習会が活発に行われているところがいっぱいあるんですよ。小金井市では見かけないですね。小金井市が昨年、「災害時に役立つ『やさしい日本語』」っていうイベントをやって外国人にも呼びかけたんですけど、集まらない。もっとわかりやすい形で必要な情報を届けていかないといけないと思います。

熊：やっぱり基盤というか習慣にしていかないとですよね。「あのWEBサイトや冊子を見ればわかる」「あのイベントに行くとわかる」「あのひとが口コミで教えてくれる」って、情報が届いていくためのメディア環境や人間関係の基盤だったり、行動の習慣というものが確立されないことにはって感じがします。僕は、出身小学校が武蔵野市の境南小学校なんですが、通勤で今でもそのそばを通っていて、地域の掲示板みたいなのが、そのあたりにあ

るんですね。つまり、いろんな人が目にするところなんですけど、そこに外国の方向けのチラシもしょっちゅう貼ってあって、あと、交流イベントのようなもののお知らせもあって、それこそしょっちゅう目にしているので、非常に身近に感じることができていました。

山：そういうことですよね。小金井市のホームページも「やさしい日本語」の対応ができると良いんですけどね。ただ、そこまで大がかりなことが難しければ、みんなが意識するだけで、ちょっとずつ変えていけることもたくさんあると思います。地域のさまざまな案内や行政からの情報なども「やさしい日本語」を使えば、外国人だけでなく、お年寄りも障害のある方もぐっとわかりやすく、身近な情報になるんですよ。「ことばのバリアフリー」とも言われますが、「やさしい日本語」を使わないのはもったいないです。

「支援」のその先

山：外国人も支援される側だけじゃなくて、やっぱりなにか主体となって関わっていくようなことができたらいいなって思っています。支援する・されるではなくって、彼・彼女たちが自分たちでいろんなことを考えたり、得意なことや好きなことで「こういうことやりたい」っていえる場所がいろんな地域にあるのが理想だと思っているんです。何時に始まって何時に終わりますみたいなかっちりしたものではなくって、公園のようなオープンな場でいつ来ても帰っても良いような感じで雑談できるような場所があって、そこからなんかやりたいってことが生まれるっていうのもいいなあ、と。

熊：その考え方も、すごい大切にしたいと思っていまして、障害がある方々だって、常に支援を受け続ける側の人というポジションに固定してしまうのは間違っていると感じていて、そこにある立場を越えた相互作用というか一緒に企んじゃうような関係が重要だと思うんですよね。あと、まさに無目的に集まることができる機会っていうのも。

山：そう。だって、わたしたちが教えてもらうこともたくさんあるんですよ。なんて言うんだろう、自分の問題意識もあるけど、すごい勉強になる。日本ならではの暗黙のルールに気がついたりして、自分たちを見つめ直すきっかになる発見がたくさんあります。

熊：発見。

山：たとえば、「外国人保護者のための小学校・中学校ガイドブック」をつくったときに、中学生の「制服」の表記を「標準服」に変えてほしい、と教育委員会から言われたんです。

熊：「制服」か「標準服」か。

山：「制服」は必ずそれを着る必要があるんだけど、「標準服」は推奨している服装ということで、着用義務がないということでした。ただ、推奨であっても実質みんなそれを着ないといけない感じだから、つまり実態は「制服」なんです。

熊：文化人類学者のエスノグラフィー研究みたいです。

山：靴下も色が決まっているって聞いたから、校則なのかと思って調べてもらったら、学校の書類に「標準服に合うもの」って書いてあって。つまり学校には、明文化されていない暗黙のルールがあるってことなんです。外国人向けのガイドブックにどこまで説明を入れたらいいんだろうって、悩みました。

熊：日本の習慣を、別の文化からの視点でみると、当たり前と思っていることが、そうじゃなくなっていくという。

山：そう、日本特有のルールがたくさんあることがわかって、本当に勉強になりました。異文化に触れると、楽しいこともたくさんありますよ。就学支援をきっかけに知り合ったご家庭にお邪魔したら、どうしてもってご飯をご一緒させてもらって、初めて口にするようなバングラディッシュの料理やデザートがいっぱい出てきたりとか、これはもう、わたし一人で味わうのはもったいないなって思うぐらい。だから、外国の料理教室とかももっとやってみたいなって。

熊：それ超楽しそうです。

山：多文化共生って、文化や慣習の違いからやっぱりいろんな摩擦やストレスが生まれるんですが、そういうことをひとつひとつ理解して乗り越えて、到達できるところだと思うんですね。そこの大変なところを経ずして、綺麗ごとや楽しいだけですむ話じゃないと思っています。ただ、日本人だっていろんな人がいるように、外国の人もいろんな人がいるので、どこどこの国の人ってだけじゃなくて、なになにさんっていうように、人でみていかないといけないはずなんです。子どもたちの方がむしろ、そういうバイアスがなくって、国籍じゃなくって、なになにちゃんって、その子そのものをみて一緒に遊んでいたりすると思うんですよ。むしろ大人の方がね、頭でっかちのステレオタイプになってしまっていたりする。それを取っ払えればいいのになって思います。そう、だから公園ね。公園は、その意味でも良いと思います。

熊：公園を、その舞台にしていきたいです。

変わるきっかけ、わかりづらさが持つ意味

熊：暗黙のルールということで言えば、暗黙ということで、上手くいくことってたくさんあるような気もしているんですね。というのも、明解なルールにすることで、それは絶対的なものになりますけど、暗黙にしておくことで、本来、その場で柔軟な対応ができることだってあると思うんです。ただ、そこでは、自分でちゃんと感じたり考えたりするという習慣がセットではあったはずなんです。ルールってある意味、考えないで済ますための仕組みとも言えちゃうと思うんですよ。で、まあ、約束したつもりはないけど、守らないといけないルールのようなものがたくさんあって、それで上手くいっているうちは良いかと思うんだけども、それがそうでもなくなってくると、そもそものところから考え直す必要が出てくる。今って、そういう時代なのかもしれないですよねって思います。

山：日本がインクルーシブ社会に向かっていくには、既存のものを問い直す必要があると思います。そういうプロセスのなかで、わたしたち自身が学んで、地域がより豊かに、暮らしやすくなるためのきっかけをもらっているんですよね。ただ、「インクルーシブ」みたいな横文字を使うの、本当は好きじゃないんですけどね。

熊：あれ、アメリカに住んでいたんですよね。

山：そうなんですけど、なにか他に日本独自の良い言葉ないかなって。

熊：SDGsもそうですけど、なにかそういう横文字のキーワードにするっていう風潮はありますよね。

山：そうですよね。そうすることで、ばっと広がることはあるんですけどね。

熊：そこにあるモヤモヤって、多分、さっきの「ステレオタイプを避けたい」という気持ちや「ルールをそのそもそもから考えたい」という気持ちとも重なっていくと思うんですね。というのも、一つのキーワードやイメージとか、ルールをどかっと決めちゃったほうが広がっていきやすいのはもちろんあるんだけど、そこから抜け落ちてしまうことがたくさんあるという話じゃないですか。なんて言うのか喩えるならば、パソコンで大容量のデータを送る時に、データをZIPとかに圧縮するじゃないですか、そんな感じ。圧縮された方がデータ容量も小さくなるし、広がりやすい。でも、重要なのは、その圧縮データをちゃんと解凍できるかどうかっていうところなんですよね。なので、このプロジェクトではいったん圧縮することなく、膨大なものを膨大なままに留めようとしています。なかには公開NGな方もいらっしゃるんですが、そうではない場合は、こういったヒアリングをインタビュー記事にして公開しているんですけど、だいたいお一人で1万字くらいなんで、20人になると20万字になるんです。膨大ではあるんですが、人の存在って、そう簡単に一つのイメージで括られるものではないし、それこそステレオタイプにしちゃいけないって。とはいえもちろん多くの方に知って頂きたいので、その工夫はそれはそれでを手尽くしていければと。

山：なんかわかる気がします。もうね、一つずつ積み上げていくしかないかなとも思います。

熊：はい。大雑把なことだけをして満足しないで、具体的なことを積み重ねて、じっくりことを大きくしたいという気持ちがあります。あのう、それで聞き手と言いつつ、お話しながら気持ちが浮かび上がってきているんで、もっと喋っちゃうんですけど。

山：どうぞどうぞ。

熊：ありがとうございます。誰かの困りごとを解決したり、より良い兆しを後押ししたりするということを、社会の基盤としたいという気持ちがあるんですね。ただ、一方で、それこそ「困っている人」というカテゴリーに誰かを押し込めるということもしたくないと考えているんです。だって、むしろ環境的な要因で、困る状況に追い込まれているということでもあるし、支援をしていると思っている側だって困り事を抱えていたり、これから抱えることになったりしますし。それに、その困っている内容が、すなわちその人を表すものでもないような気もしますし。

山：それもなんかわかる気がします。

当事者に話を聞いたということで正当性を安易に担保しようとはしてはいけない

山：わたしよりも、それこそ直接ネパールの方に話を聞いたほうが、当事者の方々の気持ちを理解するということでは良かったんじゃないですか。

熊：それもそうですし、そのお話もめちゃくちゃ気になるんですが、なんと言いますか、当事者の方のお話を聞いたことでプロジェクトの正当性がすぐ担保されるということでもないと思っていて、山脇さんのように、いろんな人の間を行き来して、精力的に動いている方のお話も、めちゃくちゃ重要だと思っているんですよ。

山：どんなことをしていけたら良いですかねえ。

熊：全部を急いで決める必要はないかなって思っています。小金井市の小林さんとの雑談から1年後にこういった動きとして反映されているように、ちゃんとお互いの存在を認識できていれば、その時が来た時に顔が浮かぶと思うんですね。まずはそこからだよなって。ただ、今日お話をうかがった現状が、ある程度もっと地域で知られたほうが良いであろうと思いますし、そのためにこのプロジェクトが一助になることができたらとも考えました。あと、「やさしい日本語」を取り入れるという発想を持って進めていかないとなって。

山：なにかあれば声かけてくださいね。

熊：ありがとうございます、とても嬉しいです。

小金井市 外国人保護者のための
小学校・中学校ガイドブック
小金井市 面向外国人家长的中小学指南
Koganei City
Elementary & Junior High School Guidebook
for Non-Japanese Parents
ここから
ダウンロード
できます
小金井市の 小学校 と 中学校 に入る 外国人の 子どもと 親のために、
学校の 説明や 入学の準備、相談できるところを 紹介する
ガイドブックを 作りました。(2024 年1月)
This guidebook has been created for foreign children and their parents entering
elementary and junior high schools in Koganei City for the first time.
It compiles information on the characteristics of Japanese schools and the necessary
preparations for entering school.
这本指南是为第一次在小金井市
上小学或初中的外国孩子及
其家长而编写的。
在这本指南中，您将了解到入学前的
准备工作、对学校的介绍以及遇到
问题时的处理方法等内容。
"やさしい日本語"版
中国語版（简体中文版）
英語版(English Version)
KISSA
小金井国際支援協会
編集・発行:小金井国際支援協会 Koganei International Support Service Association
問い合わせ先:協働事業担当・山脇 080-6505-1818 hiromiyk0106@gmail.com
協力:小金井市教育委員会 Koganei City Board of Education ＊2023年度小金井市 協働事業

木本茜さん

安心と挑戦の拠り所としての公園

取材日：2024年7月31日

プロセスを大切にすれば、心が羽ばたく

熊：元々、僕自身が、ずっと子どもたち向けワークショップの実践をしていたんですね。小金井でいうと、丸田ストアーという寄り合い商店の2階で場所を持ったりもしていて、あまり現場にはいれなかったんですけど…。

木：「とをが」さんですよね。私は、野外保育「りんごっこ」っていう自然保育の森のようちえん・保育園で保育士をしていて、そこの子たちが結構通っていたんですよね。

熊：そうか、そうだったんですね。ありがとうございます。今日は木本さんのお子さんも一緒にインタビューに参加してもらえて嬉しいです。

木：子どもに関わる活動に参加し始めた時に、所属している団体の人達から「うちは子どもの遊びのことをやるNPOなんだから連れてきなさいよ」みたいな感じで言ってもらえたのがきっかけで、もうずっと連れ回していて…。

熊：NPOって、「こがねい子ども遊パーク」ですよね。

木：そうですそうです。連れて行く時は、本人に嫌かどうかは聞くんです。今日も、その「遊パーク」がもともと立ち上げた梶野公園のプレーパーク、今はお母さん仲間と引継いで「ちびっこプレーパークつくし」として活動しているのですが、わたしがそこにいるので、午前中はプレーパークで遊んでいました。このインタビューの時間になったら家に帰るって、昨日までは言っていたんですけどね。さっき聞いたら、一緒に行くって言うんで。

熊：その感じめっちゃ良いですね。社会全体がそういうことになったら良いのになと思うくらいです。

木：お母さん、何するんだろう？みたいのもあるかもしれないですね。旦那も引きずり出して、地域の遊びイベントのお手伝いとか、家の前で地域交流のための遊び場をつくるのに、ちょっとこの係やっておいてよって色々動いてもらったりもしているので。みんな、お母さんに振り回されているよね？

皆：ふふふふふ。

熊：なんか、清々しく振り回したり振り回されたりといったことがないと、物事が広がっていかないですよね。だから、ちょっとおいでよとか、ちょっとやっておいてよみたいな、ちょっとした無茶振りって、結構大切なことだと思っています。

木：ここ数年、子ども関係のイベントがとても増えましたよね。主催者側がサービスを提供して、その他の人はお客さんとして参加する。そういう企画物が、わたしはあまり好きになれないんですよね。もちろん、参加したら色々な体験ができて楽しい時間も過ごせるので、全てを否定する訳ではないのですが、地域の中に限って言えばサービスの提供側と享受側に分けられる感じが、人の繋がりをうみにくいんじゃないかな…って感じていて。自分が開催する側のときには、お父さんお母さんに遠慮なしにお手伝いをお願いしたり、さっき話に出てたようにちょっとした無茶振り、他のお子さんの遊びのフォローをお願いしたり子どもたちと簡単なゲームで関わってもらったり、巻き込んでいくってことを意識しています。

熊：地域の中で、人を受け身なだけの消費者的な立場に押し込めたくないということですよね。

木：はい。子どもの遊び・育ちを中心にして地域の人達が繋がっていくことに関して、わたしのなかでビジョンのようなものはすごい湧き上がるけれど、1人じゃできないってことがたくさんあるから、やっぱり人とつながって、助けてもらえる関係づくりが大切だなと思っています。

熊：湧き上がるビジョン。

木：はい。

熊：すごい気になりますけども、ここでそこに飛びついて、そのビジョンって何ですかっていう質問を投げかけるのもなんか違う気がするんで、今日は、木本さんのお子さんも一緒に雑談気分でおしゃべりさせてもらえたらって思います。

木：プレーパークに関しても他のアプローチについてもどんどん湧いてくるんですが、言葉にすることの怖さというのもあるので、その感じがありがたいです。

熊：心を掴むっていう表現があるじゃないですか、惹きつけられるみたいな意味で使いますけど。良いことではあると思うんですけど、軽やかに躍動しまくっている心の立場になって考えてみるとですね。

木：心の立場。

熊：そう、まあ、なんか野生動物みたいなイメージなんですけど、心を掴むっていうけど、そう簡単に掴まれたくないって思いますよね。

皆：ふふふふふ。

木：雑談みたいな会話の中で言葉を拾ってもらえるのは、それこそ心が軽くなります。

熊：やっぱり心を羽ばたかせていたいですよね。さっき、「遊パーク」は子どもの遊びのことをやっているんだから、自分の子どもも連れておいでよって言ってもらえたという話があったじゃないですか。スタンスに筋が通ってて素敵だなって思うんです。それと同じような話で、今回のこのプロジェクトでは、そういう何気ないけど大切にしたい雑談のような会話が公園で育まれたらいいなってことが目的の一つなんですけど、とするならば、このインタビューもその目的と同じような会話を重ねていきたいんです。プロセスも大切にしていかないと、なんかそこに悪い意味での嘘が入り込んでくる感じがして嫌なんですね。だって、自分や自分の子どものことをおざなりにしてまで、プレーパークや野外保育みたいな仕事できないですよね。プレーパークや野外保育に来る子どもたちもそれを望んでないと思いますし。

忘れちゃっていた感覚を教えてくれる

木：お子さんがすごい活発で、ずっと止まらずに動き回っててなんか疲れちゃうんですって言ってプレーパークに来るお母さんも結構多かったんですね。それで、お子さんの興味があることを一緒に遊んでやってみたりするんですけど。

熊：一緒に。

木：梶野公園には井戸があるんです。

熊：ありますね。手動で汲み上げるやつ。

木：そう。水も好きだし、やってみたいってなるんで、一緒に井戸水を汲んで触ったり、流れ出てくる水に２人で顔を近づけてキラキラ太陽の光が反射するのを一緒に綺麗だねって驚き合ったりしました。それで、こんなにキラ

キラしていたのを教えてくれていたのかって、その子の見ている世界を少しのぞかせてもらえた気持ちになるんです。忘れちゃっていた感覚を思い出せたりもして、ありがとうって。

熊：ああ。

木：私や他のメンバーだけじゃなくて、顔見知りになった参加者のみんなも特別扱いとかじゃなく、ただただ温かいまなざしでその子に話しかけるんですね。たまに誰かのおもちゃを取っちゃったりもするんですけど、それに興味があるんだねって、その子のありのままを受け止めて見守っているそういう感じなんです。そういうなかで、お母さんとも話をしますし、困りごとを言ってもらえる関係性にもなれたりして。

熊：困りごと。

木：たとえば、幼稚園に断られちゃって行く場所がなくて困っているって。

熊：幼稚園に断られる。

木：なので、うちのNPOは保育もやっていて、野外保育で外遊びメインだし、カリキュラムが組まれてこれを今必ずやらなきゃいけないってことじゃないから、そういうところもあるよって。それに、うちじゃなくても、大きな幼稚園で受け入れてくれるところもあるよって知っている限りの情報を伝えたりしました。

熊：そういう会話を、公園でできているということですよね。

木：そうです。困りごとを話せるような機会って日常になかなかないですよね。だから、心をひらける場所であれたらいいなって常々思っていますし、なにかちょっとでも手助けになることがあれば、やっててよかったなって思えます。それがインクルーシブなんだろうなっていうのも思っていて、一人ひとりの子と関わって、「やりたい」という気持ちを聴いて受けとめて、その場をその子と一緒に変えていくっていう。

熊：一緒に変えていく。

場を変えていけるという感覚を育む

木：公園に遊具を整備したからといって、たとえば、足が不自由の子のやりたいことが全部できるかと言うと、そうじゃないじゃないですか。ブランコに乗りたいとか、芝生に入りたいとか、虫取りをしたい、あれをやってみたい、これをやってみたいって、色々とあるじゃないですか。

熊：ああ。公園はいろんなことをやりたくなる場所だし、遊びにも色々とあるから、インクルーシブな遊具をつくったとしても、諦めなければいけないことが出てきちゃうよねっていうことですか。

木：はい。ただ、だとしても、その子の「やりたい」に対して、こうだったらできるかなと一緒に方法を考えたり、やってみたけどちょっと難しいねってうまくいかなかったことを共有して再チャレンジしたり、一緒に場を変えていける人がいるのが大事じゃないかなって、常々思っていて。

熊：ああ。

木：場を自分に合わせて、変えていけるってすごい大きくないですか。今の社会では、作られた・与えられた環境に合わせられなければそこで受入れられないような雰囲気が強くあると感じているんです。子どもの遊びも窮屈。決められた時間や範囲の中で与えられた遊びをやるんじゃなくて、自分で選んで、それを実現するために動ける余白。たとえば、遊びの１つでロープのブランコをつくるんですけど、あえて先に作らずに無い状態にしておく日もあって。子ども達から「今日ブランコないの？ブランコつくって」って声をかけられたら、「あなたが言うならつくるか！」って場を動かす。その後も、「一緒につくりたい」ってなったら、「つくりたいんだね、じゃあ」って言って、一緒にできるところをやってもらうんです。完成して他の子がそのロープブランコに乗りにくると、はじめに私に声かけに来た子も、一緒に作った子もすごく誇らしげないい顔をしているんですよね。「自分がこの場をつくったよ」という気持ちが、その子達の自信にもその場所を大切にしていく気持ちにもつながるから、大事にしたいと思っているんです。

熊：まさにまさに、という感じです。まず「何かをやってみたいと思うことができる気持ち」が育まれるということと、それを見守りや支えの中で試行錯誤することで生まれる「自分がこの場所の変化の原因になれたという気持ち」が育まれるということの両面で、とても重要だと考えています。専門用語だと、「自己原因性感覚」って言うそうですけど、そういうものが育まれないと、自分が社会に対して無力だなっていう諦めを生んじゃうし、「どうせダメでしょ」みたいな感じになっちゃうんですよね。なんで、本音というか、本当の理想としては、「play here」というプロジェクトの中ではインクルーシブ遊具の設置というのが、具体的な業務の一つの項目であるにはあるんですけど、それを、子どもたちや保護者や関係者の方々と一緒に作りたいという気持ちがあるんです。子どものことや建築のことなど、色々な専門性や知見を持った方がこれだけ地域にいるんだから、みんなで力を合わせたらできるはずでしょって。というか、力を合わせて何かを成し遂げる機会にすべきでしょって。

木：それぞれの立場から色々な意見を出しながら、遊具をみんなで作れたら面白そうですね。

熊：そうなんですよね。ただ、常設の遊具となると、やっぱり安全管理上の色々な基準やルールがあるので、遊具メーカーのものでないと制度上は難しそうなんです。とはいえ逆にいうと、そうじゃないものはある程度、実現可能性もあるんじゃないかなって考えています。プロセスも大切にするって、つまりそういうことだよなって。

木：本当に思います。公園の遊具の安全基準については聞いたことがありますね。遊具の設置に関しても、望む人や戸惑う人など色々な思いがあると思うので、是非今回のプロジェクトで行政の皆さんが出会った方達を繋いで話ができる環境をつくってほしいと思います。遊具以外でも、みんなで一緒にその場にいて、顔を合わせておくことができれば、変に拒絶することなくお互いを思いながら答えを探していけるようになるだろうなって。

熊：お互いに顔を合わせる機会がやっぱり必要ですよね。

挨拶は、人のあいだにある壁を越える

木：公園に大人の男性が一人でいると、みんなジロってなるんですけど...。

熊：それ、あれですね、僕の可能性もありますね。このプロジェクトに参加したということもあって、いろんな公園の様子を見たり、遊具とか花壇の撮影もしていたりするんですけど、多分、怪しい人って思われてんだろうなって感じる時はあります。梶野公園もたまにいましたよ。

木：え、ニット帽とか被ってました？

熊：え、被ってますけど、ニット帽を被る季節ではなかったので、木本さんが頭に浮かべている人物ではないような気もしますが、その人と近しいものを感じもします。

木：なんか、怪しんでいるくらいなら話しかけてみたらいいよねって思うんです。こんにちはって。それで本当に怪しかったら逃げればいいじゃんって。

熊：木本さん、足が速そうですよね。

木：いや、速くはないんですけど、とりあえず、そうやってコミュニケーション取ってから判断することも大切だろうなって思ったりはします。

熊：ああ、誰かのことを断定する前に、コミュニケーションをとってみるというのは、今、この社会で失われつつあるものの一つな気がします。あの人はああいう人だっていうことを思い込んでいたら、会話する必要がないですからね。会話って、考えを確かなものにするためのものでもあるし、同時に、凝り固まった考えをほぐすためのものでもあるような気がします。

木：そうですよね。実際、気になって声をかけた男性から、子ども達がのびのび遊べているプレーパークへの共感の気持ちや感謝の言葉をもらったこともありました。そんな風に肯定的に見てくれてたのか、と。話してみないと分からないですよね。だから、すぐ市役所とかに苦情を入れるんじゃなくてね、同じ地域の大人同士なんだから、うまいこと話そうよって。

熊：そう思います。なんと言いますか、日本全国を見渡してみれば公園で不審者による事件が起きているのも事実ではあって、だからこそ「何かが起きてしまったらどうするんだ」「責任の所在はどうなっているんだ」ということももちろん大切ではあると思うんですが、やっぱり、そこで思うのは、「どういう社会や地域にしていきたいか」というそもそものところを大切にするということを起点に置くことを忘れちゃいけないっていうことなんですね。そうやって、考えると、公園を使うご近所さん同士が会話をほとんどせずに、何かトラブルがあったときに、すぐ市役所や警察に電話をする地域にしたいのかって言うと、必ずしもそうでもない気もしてきます。

木：うん。声をかけることで、あなたのこと見てますよ。変なことしようとしても気付く人がいますよ。というメッセージとして抑止力になったら良いなと思ったりもします。

熊：地域の防災や防犯関連の議論でもよく出てきますが、人の目があったり、活発で晴れやかな雰囲気になっている場所って、人の邪心というか、変な事件が起きづらくなるって良く言われていますけど、実際そうだろうなって思います。

居てもいいよって言われた気がした

熊：木本さんは、もともと、初対面の人に挨拶ができるような性格だったんですか。

木：違うんですよ。本当にねえ、今では、信じられないって言われるんですけどね。子育てするまでは、わたしと関わらないでくださいって思ってました。

熊：子育てがきっかけ。

木：子どもが生まれて、一歳になるかならないかくらいになって外に連れ出して、梶野公園で「遊パーク」がプレーパークをやってたときに出会ったのが転機。

熊：そうか、最初は利用者側だったんですね。

木：はい。子どもといるのはすごい楽しかったから、子育てはわたし一人で大丈夫って思っていたし、ママ友も、わたしなんかと話をしていても楽しくないだろうって自分の中ですごく厚い壁を作っていました。だから、毎日違う公園に行っていたんです。

熊：毎日違う公園。

木：同じ公園に行くと、同じ人と会っちゃうじゃないですか。だから、知らない人でいたいって。でも、子どもは外には連れ出したいし、五感で感じることも大切にしたいしって。声をかけられる隙間がないくらいに、子どもと一心不乱に遊んでるような人だったんです。そんなときプレーパークで一人のお母さんに声をかけてもらって、なんか、ちょっと緩んだんでしょうね。この人、私を受け止めてくれるって。それで、通うようになったら、外遊びは自分の中で元々楽しかったっていうのもあるし、あとなんか、公園って「来てもいいよ」っていう場所じゃないですか。それだけじゃなくて、プレーパークだったから「居てもいいよ」って言われた気がして。

熊：居てもいいよ。

木：プレーパークって、子どもの遊びの中での育ちを応援するところですけど、親のわたしも、わたし自身で居ていいよって言ってもらった気がしたんです。そこから、ね、心が軽くなって、人とつながってみようかなみたいな気持ちになって、今に至るみたいな感じなんですよね。

熊：今回、公園を舞台とした遊び場環境の整備というのがプロジェクトの内容ではあるんですけど、結局ハード整備だけではなくて、まさに「居てもいいよ」と思える状況を生み出すことができないと、来れないし、居れないですよね。じゃあ、どうやったらそう思えるのかっていうのは難しい気もしますが、少なくともそこを目指し続けないといけない。「みんなのための場所」ということで、抽象的な「みんなのため」ということを追い求め過ぎて、具体的な顔が見える人と向き合うことも忘れちゃって、結果的に誰のためにもなっていないみたいなことってあるなって思うんですね。

木：そうそうそう。平等に、とか、みんなの、って言うけれど、みんな違うのに何を基準にして言っているんだろう…みたいな。

熊：その意味でも、障害のあるなしに関わらず、個々のそれぞれの顔を浮かばせながら、「居てもいいよ」っていうメッセージを感じられる場所にしていく必要があると思うんですけど、そのためには、木本さんにとっては話しかけてくれたお母さんがいたように、やっぱり人の存在が欠かせないんですかね。

木：そうですね。親子で公園に行って二人きりで遊んでいたら、その二人の存在に気付く人ってあまりいないと思うんです。ましてや、声をかけたり関わろうとする人はもっと少ないはず。そんな中で、自分の存在を見つけて歓迎してくれる人がいたら、その場所に対する安心感なんかが全然違うだろうなと。自分がそうだったなと感じているんです。その時は、たまたま息子が違う子のボールを触りに行ったんですよね。やめてくれよって心で思いながら…。

熊：人と関わりたくないモードの時ですもんね。行っちゃったら、関わらないといけなくなるって身構えちゃいつつ、でも子どもの自由な遊びも大切にしたいというジレンマ。

木：そうそう。それで、スイッチ入れて「すいませぇん、ありがとうございますうぅ」とかやったんだけど、その時のお母さんがすごい自然体だったんですよね。あれ！？、そんなにスィッチを入れなくても良いかも！？って思えて、今もずっと付き合いが続いているんです。

熊：バリアを張られている感じがしなかったんですかね。

木：そうそうそう。自分のことも話をしてくれるし、わたしが答えやすい質問もしてくれるから、この人とだったら居ることができるなって。そこからですかね。もし、その出会いがなかったら、子どもと一緒に倒れていたんじゃないかなって思うくらいです。人と関わることが嫌いだったし。

熊：ふとしたことで変わるというか、大きな影響を受けるような出会いってありますよねえ。そういう舞台に公園がなったらいいなって願います。表情も結構、変わったんじゃないですか。

木：子どもとは笑うけど、大人と話をしていて、こんなに笑ってなかったですね。

熊：これ、インタビュー記事にするとその辺りがなかなか表現しづらいんですが、さっきからずっと、みんなで笑ってますもんね。

木：15年前の自分が見たら信じられないと思います。

失敗してもいいよって言ってもらいたかった

熊：気づいたら、プレーパークを利用する側から運営する側に行っていたという感じなんでしょうか。

木：そうなんですよね。「遊パーク」の理事の人が児童館職員でもあったので、その児童館でもお世話になってて、なんかこの人たちと子どもたちを見守っていくことが、わたし好きだなあって。自分にできることがあるなら、「遊パーク」の一員になって恩返ししたいと思ったんです。

熊：そう思うことができたというか、思えちゃったというか。

木： わたし自身の育ちの中で、失敗してもいいよって言ってもらいたかったなっていうのに気づいたのかもしれないです。いつも間違えないようにって、周りの大人から大切にはされていたんですけど、わたしは、間違ってみたかったんだわって。プレーパークに通う中で、失敗してもいいって言ってもらったような気がしたんですよね。やってみたい人は、やってみなさいよって。

熊：のびのびと試行錯誤することの大切さってありますよねえ。その大切さをちゃんと握れていれば、むしろ試行錯誤しないことの方が失敗なはずですよね。僕も教育の現場にずっといて、絵の具を使う図工の授業で、空気を表現したくて、絵の具を使わずに水だけでやっていたら怒られちゃってとか、彫刻刀を使う授業で作品を作らずに削りカスの匂いをずっと嗅いでいたら怒られちゃってとかで、図工が嫌いになっちゃったみたいな子どもたちと時間を共にしていたんですね。で、授業のカリキュラムからは外れるかもしれないけど、「水で塗る」って素晴らしい発想だし、木の匂いに関心があるんだったら、いろんな樹木の匂いの違いを調べてみるという活動につながっていって良いはずなんですけど、そういうことが「失敗」っていうことになっちゃうんですよね。それって一体なんなんだろうって。狭いゴールしか設定されていないと、そこからズレたらすぐ失敗になっちゃう。だから、「やってみたいことは、やってみていいんだよ」っていうことは、とてもシンプルで当たり前なようでいて、きっととても深いし、広げていくべきメッセージだし、地域社会で実現すべきことなんだろうなって感じました。

原っぱのような社会を

熊：梶野公園でのプレーパークは、「遊パーク」が元々運営していて、今は「梶野公園サポーター会議・遊び場の会」に運営が移行しているんですよね。

木：そうです。

熊：それで、木本さんは「遊パーク」が運営している野外保育の「りんごっこ」でも働きつつ、梶野公園のプレーパークでも働かれているわけですよね。

木：そうです。梶野公園のプレーパークが「遊パーク」の手から離れるから、誰かが引き継がないと無くなっちゃうよって話が出た時に、子どもも私も育ててもらった大切な場所を守りたかったので「遊び場の会」のメンバーにも入れてもらいました。毎週水曜日は、保育のシフトに絶対入れないでってお願いをして、「遊び場の会」として梶野公園のプレーパークに居れるようにしています。昔の私みたいに生きるのが不器用な人はそうそういないかもしれないけれど、「ここに居ればいいよ」って言ってもらえて救われるお子さんやお母さんが少しでもいるなら、この場所に立っていたいなって。恩送りって感じです。

熊：そこにこだわりたいというお気持ちがあるわけですね。

木：やっぱり、子どもたちが行きやすいところに、自分の居場所だったり、自分が帰って行ける場があるっていうのは、本当に必要なことだと思うんですね。小金井市のプレーパークの事業としては、西側には学芸大学のキャンパス内でやっているのと、南側には武蔵野公園でやっているものがあって、東側となると梶野公園になるんですよね。

熊：梶野公園に関わる多くの方々から、大きな遊具が何もないのが良いっていう話を聞きます。だから、それを守りたいって。

木：何もないからこそ、子どもたちが生み出す遊びもあるじゃないですか。

熊：「play here」の資料でも、「ハード整備で終わらせてはいけない」ということと「子どもたちは何もないところから遊びを生み出す創造性を発揮する存在であるはず」っていうことを明記しています。

木：そうなんですよね。ただ寝転がるだけでもね、風を感じているだけでも、遊びだし。だから、何もないことの素敵さとか、何もないから生まれる子どもたちのワクワクがある場所だなって思うし、梶野公園が好きなんです。

熊：今の梶野公園が好きで、守り育みたいという気持ちを注いでいる人がこんなにもたくさんいらっしゃるんだということを感じているんですが、それってつまり、そういうワクワクやそういう営みを守っていきたいということですもんね。

木：そうです。今の梶野公園が好きなんです。

熊：なんかあまり参考文献の紹介みたいになり過ぎてもアレなんですけど、とても大切な議論だなって感じていて、なので話すんですけど、建築家の青木淳という人が、「原っぱと遊園地: 建築にとってその場の質とは何か」という本を書いているんですね。遊園地は決められた遊びを、決められた形で遊ぶ場所だけど、一方で、原っぱは、自分たちで遊びを生み出していくような場所だっていう対比が分かりやすいんですが、彼はその原っぱ的な建築がいかに可能かという課題意識があるんです。で、公園の話に接続すると、遊園地にしたいのか原っぱにしたいのか？という僕たちが求める場所の質の話になってくるし、そもそも遊びとは？という話でいうと、誰かに提供される遊びに黙って従うよりも、「遊びを生み出す遊び」ということの大切さだったり、そこにある学びだったり喜びって計り知れないよねっていう話になってくるんですよね。

木：それで言うと、普段、その原っぱのような場所で遊び慣れていないと、梶野公園に来てもなにをして遊べばいいのって立ち尽くしちゃうんです。でも、遊んでいる子を見て、あんなふうに遊びができるだってなるんです。泥団子をつくっていたり、虫取りをしていたり、木に登っていたり、もうね、じいっと見るんです。遊びをインプットしていくみたいに。

熊：「いてもいいんだよ」だったり「やりたいことをやってみていいんだよ」ということと同時に、そこに居ると、そもそも「やりたいことがムクムクと湧いてくる」ということですよね。

木：なにもない、といっても風や木や光やにおい、花に虫にとたくさんのものが目の前に広がっているんですけど、その中で自分が何したいか何にワクワクするかをいっぱい考えないと、感じないと遊べないじゃないですか。自分を見つめることになる。そういうのって、与えられ過ぎちゃうとわからなくなる。だから、自分の好きを見つけるためにもすごい必要なことだよなって感じています。

熊：ああ、そうですね。ちなみに、橋本治という人が「『原っぱ』という社会がほしい」という本を書いているんですね。つまり、そういうふうにいろんな人がいて、お互いに影響を受け合ったり、助け合ったり、学び合ったり

して、自分が自分のままで、自分たちとしてのルールを生み出したり、そのルールを調整していくような場所としての原っぱがあって、社会がそもそもそういうことであるべきなんじゃないのっていうことなんですけど。

木：まさにプレーパークのことですね。だから、梶野公園のプレーパークを守っていきたいんです。

話しやすさを生み出すもの

熊：えっとストレートに言うと、今回のこのプロジェクトが立ち上がった時に、日頃から梶野公園で活動をなさっている地域の方々の心がザワザワしたんじゃないかなって思うんです。みなさんが、大切にして育んで守ってきたようなことが、おざなりになっちゃうんじゃないかって。

木：はい。最初は不安でした。活動の中で、丁寧に人と関わっていくことで生まれる繋がりや信頼関係や安心感を大切にしてきたので。インクルーシブって言葉を知らない頃から、考え方や目指しているところは「インクルーシブな場」だったわけです。それがプロジェクトのお話を聞いた当初は、インクルーシブ遊具ができれば、インクルーシブな社会になるでしょ？というようにハード整備で十分だと言われてしまった感じがして、プレーパークの活動が理解してもらえてなかったのか…と悲しい気持ちになりました。と同時に、絶対にハード面だけ整えてもインクルーシブな社会にはならないでしょ！という確信に近い感覚もありました。

熊：そうですよね。「障害がある子も気軽に遊びに来れる公園を」というところでは、大賛成なわけですよね。

木：もちろん、そうです。今まではあまり出会うことができていないのですが、でもプレーパークに来たいと思ってもらえるならばウエルカムな気持ちはいつでもありましたから。それぞれの子が遊びに行きたいと思える公園に気兼ねなく行けるようになることは大賛成です。

熊：ですよね。まず、その目的をぶらさずに、それぞれの持ち場で、どうやったらそれを叶えられるかっていう知恵をみんなで絞り合えたらって思うんです。

木：最初はインクルーシブ遊具の設置ありきって感じだったので困惑していたんですけど、プレーパークだけじゃなくて色々な特徴の公園があって、その多様な選択肢の中で行きたいところ、それぞれに合っているところを選びとれるようにする、そういう会話は続けていきたいです。

熊：このプロジェクトを推進している小金井市の小林さんや山﨑さんも、そういうわけでもなかったんですけど、そこのコミュニケーションにつまずきがあったんじゃないかなって、プロジェクトに途中から入って感じたんです。インクルーシブ遊具が必要かどうかで言えば、必要だと感じているんです。当事者の方々にヒアリングを重ねていくなかで、「インクルーシブ遊具を体験して、こんな楽しそうに笑うんだって思えた」みたいな声にもたくさん触れて、その想いを強くしているのも事実です。

木：それはそうですよね。必要としている方がいるのもプロジェクトに関わらせていただいて感じています。

熊：そうなんです。なので、「インクルーシブな公園を実現するために、インクルーシブ遊具の設置が有効な手段ではあるが、唯一絶対の解決方法かと言うと、そうではない」っていうことをみんなで確認しておくということが重要だよなって思って、このプロジェクトに参加して最初に、そういったことを表す資料作成をやたらと頑張った

んですね。それで、調査を進めれば進めるほど、そもそもにトイレといった基本的な設備の問題であるとか、公園に辿り着くまでの移動の困難をどうするかであるとか、「心のバリアフリー」と呼ばれるような障害がある方々への理解の必要性というか、僕たちの無自覚な加害性みたいなところへの理解の必要性といったことが浮かび上がってくるんです。だからまあ、とにかく「ただインクルーシブ遊具を置いて、公園がインクルーシブになりました」なんて簡単に言えることではないっていうことで。一方で、インクルーシブ遊具もそれぞれの公園の特性や歴史を考えながら、その設置を検討したりする必要が当たり前にあるし、老朽化した遊具の交換等の際にもちろんインクルーシブ対応ということも検討した方が良いだろうしと思うわけです。つまり、そんな感じで、小金井市における考え方というものをしっかり持っておかないとだよねって思うんです。だし、そういう考え方をみんなでつくっていかないとだよねって。

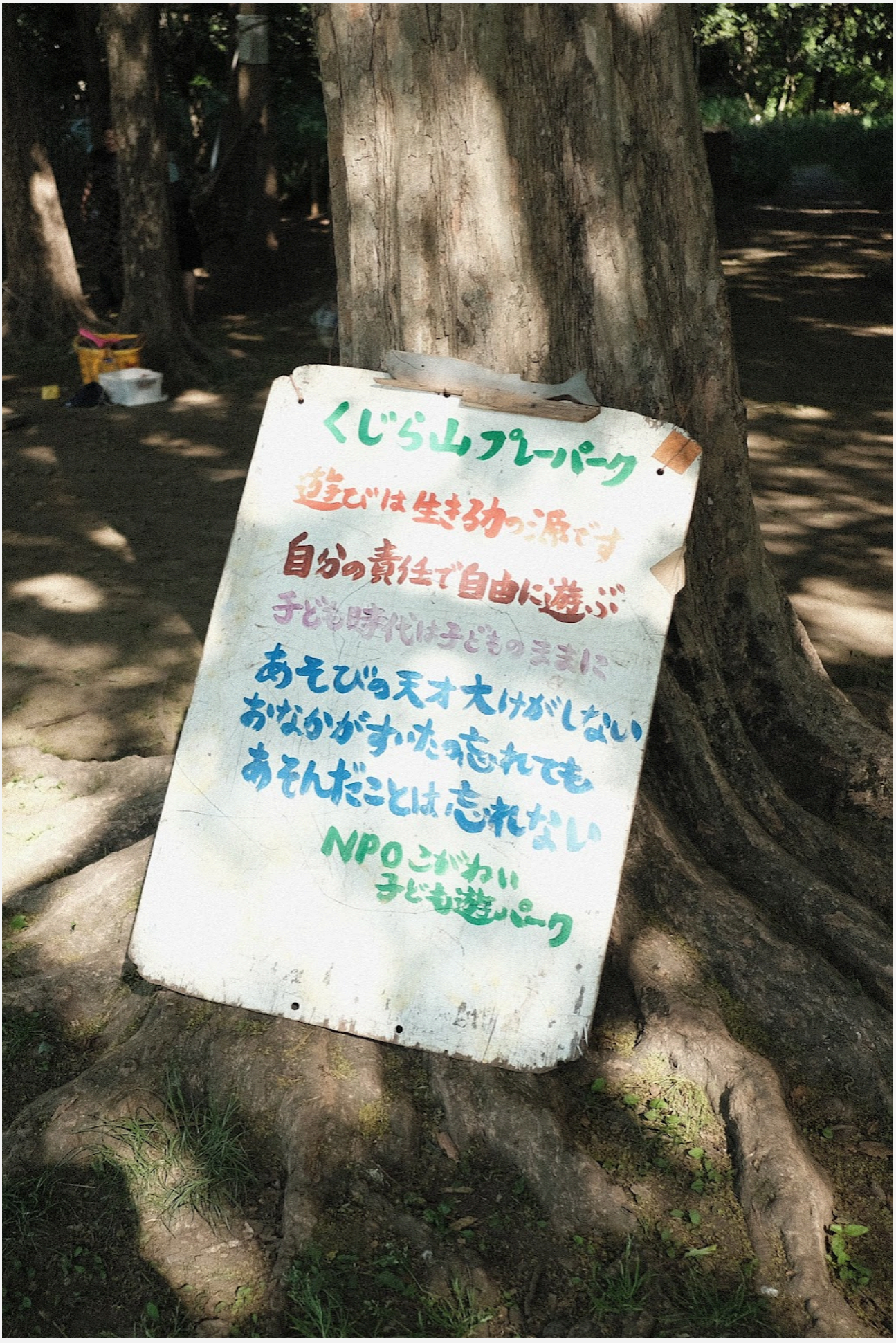
木：みんなの共通理解や共通目標がそういう感じだと話がしやすいです。

熊：「話しやすさ」というものを生み出すものって結構大切なんだろうなって思っていて、その意味でも、人と関わりを持ちたくなかった木本さんが、ふとした人との関わり合いの中で、今では実践する側に行っているという感じとか、やっぱり人の存在って大きいなって今回改めて思いました。プレーパークって、やっぱり人との関わりの場でもありますもんね。

木：ついこの間受けたプレーリーダー研修でも「インクルーシブな居場所」についての話題が出ていました。その時の講師の言葉で「この場所をインクルーシブな場にしたいと思うことが大事。そう思っていない人の場所にインクルーシブな場所は訪れない」というのがあったんです。その言葉に強く心惹かれて。わたし自身、技術や知識や経験は誇れるものがないけれど思う力ならありますって言える気がして。なんなら梶野公園にずっと常駐してプレーパークやりたいくらいですもん。

熊：そういう思いをみんなで持ち寄りたいです。インクルーシブの観点でも「遊具に頼らない遊びのあり方」というのも検討していたので、ちょっとまた会話させてください。

木：是非是非。


くじら山プレーパーク
遊びは生きる力の源です
自分の責任で自由に遊ぶ
子ども時代は子どものままに
あそびの天才大けがしない
おなかがすいたの忘れても
あそんだことは忘れない
NPOこがねい
子ども遊パーク

加藤さやかさん

怖くて公園に行けない人、たくさんいます

取材日：2024年9月3日

まず、発達支援センターにいけない

加：熊井さんのお子さんは、その後大丈夫ですか。

熊：ああ、覚えていてくださって、ありがとうございます。たまたま姉夫婦が二人とも理学療法士だったというところもあって病気ということがわかって、とりあえず、それがよかったです。

加：理学療法士さんって、すごいですよね。

熊：ねえ。

加：うちの子、歩くのが遅かったんで、寝返りで移動してたんですよ、2歳近くまで。そこから月3回くらい、理学療法士さんにみてもらったら、あれよあれよという間に、ハイハイできるようになって、立って歩けるようになったんですよ。やっぱりみてもらえるとねえ。

熊：そうかあ、そうだったんですね。色々と気にかけてくださってありがとうございます。

加：いえいえ。

熊：ありがとうございますですし、本当にスミマセン。前回のヒアリングでたくさんお話をしてくださったのに録音できてなくって、かなりの大失態でした...。

加：それね！あはははは。

熊：文字起こしをしようと思って、録音機材を確認したらデータがなくって冷や汗が出ました。どうやら、話をお聞きすることに集中し過ぎてて、機材の電源は入れていたんですけど録音ボタンを押してなかったぽいです。

加：あはははは。前回と同じ話をしなくても良いですよね。

熊：もちろんです。メモはたくさん取っていたので、前回のお話のキーワードは結構おさえることができているんですけど、今日はせっかくなので、せっかくという言い方もなんかスゴく失礼なんですけども、会話は一期一会なのでプロジェクトの進捗も織り交ぜなら、また新しいお話をできればと。

加：うんうん。

熊：それで言うと、理学療法士で、小金井の「社会医学技術学院」の先生でもあり、児童発達支援センター「きらり」でも支援にあたられている中山先生にもヒアリングをさせて頂いたんですが、最終的には「地域のおじさん」になりたいということをおっしゃっているんです。つまり、理学療法士や作業療法士の知見をもった人が、生活や暮らしのなかで身近にいる状況が理想だと。公園がそのための舞台になっても良いよねという議論をしていました。一緒に遊びながら、日常的にアドバイスをくれる存在が地域にたくさんいるというのは確かに良いなって。

加：そうなるといいですよね。やっぱり、まず、支援センターに行くにもハードルがあるんですよね。自分の子に障害があるっていうのを認めたり、そうじゃないかって思うのが怖かったり。

熊：僕自身、そういうことで小児科医に行くときに、かなり気力を使ったので、わかる気がします。病院の予約フォームに、子どもの症状についての文章を打つときに何回も書き直したりして。

加：そうですよね。あとは周りの家族の反対があって行けないという。

僕：家族の反対。

加：はい。「やればできるんだから、お前の教え方が悪いんだよ」みたいなことを言われたり。

熊：…。

加：立たないし、歩かないし、ハイハイもできないし、反応も薄いし、喋りもしないし、指差しもしない。普通じゃないんじゃないかなあって、わたしがもう泣きながら言っても「子どものことを信じなよ」って返されたりもして。

熊：…。

加：向こうには、向こうなりの葛藤があるんでしょうけど。

熊：その葛藤を飲み込めないから、消化する前に吐き戻しちゃうというか、ぶつけちゃう。

加：でしょうね。

熊：身につまされます。

早朝にしか公園にいけないという声、地域の人に知ってもらいたいという声

熊：このプロジェクトって、「障害のあるなしに関わらず、公園を誰もが自由に遊べる場所にもっとしていきたい」というものなんですけど、「そのためには、インクルーシブ遊具を整備するだけでは不十分だ」というものが基本的な主張なんです。けど、「じゃあ、なにをすれば、その不十分さを少しでも改善できるんだろうか」というものを、踏み込んで具体的なところまで落としていかないと、なんか掛け声だけになってしまうんです。

加：うんうん。

熊：それでまあ、いろいろとヒアリングを重ねているんですが、当たり前と言えばそうなんですけど、僕自身が知らなかったり、実感が湧いてなかったようなことがたくさんあるという現実を目のあたりにしている次第なんです。たとえば、「早朝にしか公園にいけません」という声が、障害のあるお子さんをお持ちの保護者の方々のなかではいたって普通にある。

加：そうそう。

熊：自分の子どもが公園で遊びたそうにしている。それに、遊ばせたいとも思う。でも、周囲の眼差しも気になる。だから、もう朝の5時とかに公園で遊んでます、みたいな。

加：そうそう。

熊：そうそうって、そうなんですよね。当事者の方々のなかでは、もういたってよくある話なんですよね。でも、そこまでの現実が地域にあるということを、僕がそうだったように多くの人が知らないと思うんですよ。知らないし、見えていない。

加：そうですよね。

熊：「心のバリアフリー」という言葉もありますが、まずは知るという機会を創出していくことの必要性も感じて、今度、当事者のお母さんとお子さんと僕とで一緒に、小学校に授業としてお話をしに行くことを予定しています。いろいろと試行錯誤や調整をしながらですが、来年度は、小金井市内の全部の小学校でお話をできたらいいねという議論もしています。やっぱり面的な取り組みにしていくことも必要だよねって。

加：それで言うと、今度の秋から「復籍交流」が始まるんで、どうなるかなって思っているんです。

熊：復籍交流？

加：うちの子は支援学校に在籍してるんですけど、自分の地域の学校にも在籍しているっていう扱いになるようで、その地域の学校にも参加できるんですよね。

熊：お子さんは、今、一年生でしたよね。

加：そうです。ちょうど明日なんですけど、うちの子の特性だったり、どういうことだったら一緒にできるかということを先生と話すんですね。

熊：そうやって話し合いながら、その子その子に応じた交流級のあり方を決めていくんですね。

加：子どもが制作した美術作品を飾るだけというのもあるんですけど、そういういろいろな交流活動の選択肢のなかから本人と保護者で決めることができるんです。わたしのように、これだけがっつり交流級をやろうとしているのは、多くはないと思います。子どもにとってみたら、慣れないところに行くことになりますからね。ただ、作品を飾るとか、お手紙のやりとりをするといった間接的な交流でもしたくないっていう人もたくさんいます。

熊：なんか深く傷つく経験があるとやっぱり…。

加：怖くなりますよね、もういいやって。難しいところですよね。専門家のなかには、障害児が普通級にいることは、障害児にとってはなんのメリットもないって言う方もいるんですよね。普通級の子たちのための、ただの教材になるだけだって。だから、ちょっとやってみて、難しそうだなと思ったらやめればいいかなって。

熊：加藤さんが、違和感を手放さないままに、でも踏み込んでみようと思えたのにはなにがあるんですかね。

加：嫌だったらいつでもやめられるっていうふうに思ってるから。やっぱり、心無いことを言われたりすることもあるし、そういうちょっと怖いところもあるんだけど、うちの子が小さいうちじゃないと厳しいかなって。復籍交流で行く先の学校って、つまり地元の近所の人っていうことじゃないですか。だから、地元の方々に、こういう子がいるんだっていうことや、この子はこういう特性があるんだっていうことを少しでも理解してもらえればいいかなっていう気持ちがあります。

熊：自分たちが暮らす地域に知ってもらいたいという。

加：やっぱり地元の方々に理解してもらいたいんですけど、支援学校ってどうしても自宅から遠くなりますから、そうなると、そのための方法が交流級以外にほとんどないんですよね。

熊：言われてみると、そうだなってことばっかりです。

そこに心の触れ合いがあるのか

熊：それで、その、復籍交流というものがこれから始まっていくと。

加：そうです。うちの子、喋れないし、どういうふうにやっていくのかっていうのを考えるところからです。最初は、親も一緒に行って自己紹介みたいなことをすることが多いらしいんですけど、きっと本人は、どこ？誰？みたいになると思います。わたしたちが突然異国に送り込まれたような気持ちですよね。それって、「大丈夫だよ、怖くないよ」って言われてもね、怖いじゃないですか。だから、少しでも楽しいと思ってくれたらいいなって。

熊：そこですよね。さっき「障害児は教材じゃない」という話があったじゃないですか。それは、言い方を変えると、「人を手段化してはいけない」ということだと思ったんですね。さらに言うと、復籍交流の「交流」と言っても、「そこに心の触れ合いのような時間が訪れるのだろうか」という不安がそこにある気がするんです。なんかうまく言えないんですけど、そこに心の触れ合いというものがあれば「教材扱い」ではなくなる気もするんです。

加：そうですね。お世話とか、奉仕の心みたいな感じで来られてもちょっと違うよなって。だから「みんなよりは苦手なことがあるんだっていうことは知っててね」っていうくらいなんです。そういうことを自己紹介カードみたいなのに書いて、多分教室に貼ってくれているんですけど。

熊：それって、確かにケアは必要なんだけど、だからといって、うちの子はかわいそうな存在ではないということですよね。僕も実体験として、よく分かる感じがあります。

加：ですよね。困ってる人を助けるっていうのは、普通のことだから、転んだ人がいれば大丈夫？って言うし、物を探してる人がいたら、一緒に探しましょうか？って言うのと同じようなことのはずなんですよね。

絶対的な正解がないから、喋り続けることをゴールにしたい

熊：公園をインクルーシブなものにっていう理想を持って色々とリサーチしたりヒアリングを重ねていくと、まあ、すべてが不足しているということを目の当たりにしていくことになるんですけど、いわゆる精神・知的の障害がある方が遊びやすくなるための工夫っていうものもかなり不足しているということがわかってきたんですね。それこそ「障害の社会モデル」で言うと、社会の側にそういった解消すべき障壁があるという。

加：こういうところが困ってますとか、こうしたいですっていうのが、なかなか表に出しづらいというところはありますよね。あくまでこっちも、多分こういうことであろうという予測でしか言えないところもあって、どうしたらいいんでしょうね。

熊：そもそも絶対的な正解というものがないことではあると思うんですけど、だからこそ、一緒に居たり、会話をし続けないといけないんだろうなってことを考えているんですね。逆に言うと絶対的な正解というものがどかっとあるならば、それは会話を終わらせちゃうことになるんだなって感じたんです。じゃあもう、立場を超えて喋らなくていいやってなる。

加：なるほど。

熊：補助金事業ですし、仕事的にはもちろん区切りはあるんですけど、地域の暮らしのなかでは、ああでもない、こうでもないって、おしゃべりをし続けていくことが大事なんだろうなって。

加：おしゃべりね。

熊：議論とか対話とか、まあいろいろあるんですけど、雑談を含めて、ただただしゃべり続ける。しゃべらないにしても、同じ空間に一緒に居るという。そうこうしているうちに、なんかこう浮かび上がってくることがあると思うんですよね。人間同士の付き合いって、そういうことじゃないですか。だからまあ、これさえやれば一挙解決みたいな簡単な解決策はないっていうことそのものも、広めていかないとなんだろうなって思います。

加：そうですね。よくわかります。当事者の中でも、「インクルーシブ公園ができたって言うけど、完璧じゃない」って言う人も出てくると思います。だから、「今回はここまでなんですけど、またみんなで考えながらブラッシュアップしていきましょうね」っていうスタンスを明確にしておく必要はあるのかなとは思います。

熊：ありがとうございます、ほんとそうですね。まさに、まずはそういうステップや論点を仮説だとしても明確にしていく作業をしていければ、「今ここです」って言えますもんね。それこそ、一緒におしゃべりしやすくなる。まずは、そういうところまでたどり着きたいなって思います。

楽しい雰囲気という、共にいるための呼び水

熊：加藤さんのご家庭にとって、公園はどうですか。利用されてますか。

加：ちょっと前まで、土曜日に障害児のためのリトミックを習っていたというのもあって、日曜日くらいしかオフがなかったんですけど、天気が良い日は、ご飯を食べたあとに今日はいってみようかって公園に行ったりしてましたね。

熊：どこの公園に行ってましたか。

加：それこそ、栗山公園とか。

熊：そっか、そっか。栗山公園で言うと、トイレの改修工事の計画があったり、公園の中に健康運動センターっていう建物があるんですが、そこの医務室なども必要に応じて、ケアが必要な子が多目的に使えるようにしたりしたいねっていう議論を進めています。あとは、それこそインクルーシブ遊具の設置予定があったり、理学療法士や作業療法士になるための学校である社医学さんも隣なんで、そことの連携も議論が進められています。と、盛りだくさんなんですが、遊び場環境で言うと、やっぱり水遊びをしたいという声が多いんですよね。なので、栗山公園

で、水遊びができる環境をつくれないかっていう検証もなされています。どうやら、建設と維持に費用がかなりかかりそうなので、そこも含めた議論が必要なんですが。

加：水遊びをしたいという声は、めっちゃ多いです。オムツとれなくて、プール行けないというのもあったりして。

熊：そうなんですよね。

加：はい。そう言えば、あそこの公園ってよく大人がサッカーやってますけど、うちの子がよく、ひょいひょいひょいって、入っていくんですよね。

熊：楽しそうな雰囲気に惹かれて。

加：うん、多分そうだと思います。大人がボール遊びしてるから、わたしもボール遊びするわみたいな。

熊：そういう楽しそうな雰囲気っていうのは、形のあるものじゃないかもしれませんが、すごい大切なもののような気がするんですよね。

加：そう、重要だと思います。わたしの姉が工場をやっているから広いスペースがあるんですけど、そこで先日、みんなでBBQをしたんですね。そこで、他の子のママに水風船をぶつけようっていう遊びが始まったんですけど、一緒に遊べているんですよね。娘にはやろうとしていることがわかっていないかもしれないけど、なんかわちゃわちゃしながらみんなで楽しめているんです。うちの子は、なんか楽しそうな雰囲気があると、交ざろうとしますね。

熊：楽しそうな気持ちって、伝播していくというか、そういう感情の発信力というか巻き込み力というものがある気がするんですよね。同時に、そこには受信力とか巻き込まれ力というものがあるような気もします。なんで、お子さんは、受信力がビンビンだから、ひょいひょいひょいって入っていく。結局、そういう思わず一緒にわちゃわちゃしちゃうような営みが、日常的に増えていったらいいなっていう気持ちがありますし、公園が、その舞台になったらなとも思います。

加：そういうのでいいと思います。そういう感じがいいと思います。

公園づくりを、社会づくりにつなげたい

熊：で、さらに考えていくと、楽しそうな雰囲気というものが、どのようにして生まれるかというと、楽しそうな遊具があるからということだけでなく、そこに楽しそうにしている人がいるということだと思うんですね。なので、やっぱり突き詰めていくと、結局ハード整備だけじゃなくて、どのような人がそこにいるのかってことの重要性を感じていくんです。スポーツでは、ムードメーカーという役割が結構認知されているじゃないですか。社会というか、公園でも、そういう役割を担うような人が、同じ場所で毎日じゃないにしても、ある意味仕事として居れるようになったら、状況が前進するような気もするんですよね。

加：いいと思います。「ファミリー・サポート」のサポーターのような有償ボランティアという形でもいいと思うんですね。社会復帰ができないっていうお母さんたちもたくさんいらっしゃるんです。仕事を辞めて、もうほぼ介護みたいな生活をしてるっていう。

熊：ああ。

加：たとえば、子どもが夜に寝なくて夜通し付き合ってるから、昼間は寝ておかないと身体がもたないっていうことが結構あるんです。

熊：「結構ある」と言うのは、そういうケースが割と多いということですか。

加：そうです。うちの子も、なにかが変わったりするタイミングで寝なくなったりします。

熊：なにかが変わるタイミング。

加：環境が変わったりとか、本人がちょっと精神的にも肉体的にも成長したりするときに、バランスが崩れちゃって、興奮状態になってなかなか寝れなかったりとか。

熊：ああ。

加：もう本当に、「もう寝てくれ」「マジで寝てくれ」ってなります。

熊：うちの子も、おそらく「夜驚症」というもので、夜に寝れない時期が続いたんですけど、その切羽詰まる感じが少しわかる感じがあります。毎日続くと、ちょっとどうにかなりそうになりますよね。

加：うん、はい。もう本当に。ただそのとき、わたしが仕事もしながら資格の勉強もしていて、あまりかまえなかったことの影響じゃないかなって個人的には思ってて。ママがいるのに、ママの気持ちが向いてないっていう状態だったので。

熊：そこまで背負いますか。

加：それは、やっぱりねえ。

熊：とはいえ、仕事も資格の勉強も、生きていくためには必要なことなわけですよね。やっぱり資格があったほうが働きやすいと思われてのことなんですよね。

加：うちの子って、一回、発達支援センター「きらり」の通園クラスに落ちたんですよ。だから入れると思ってなかった。なんで、保育園に6歳まで行って、小学校はどうなるかわかんないけど、そのタイミングで転職して、在宅勤務とかができるような仕事に就こうかなって、そのときに思っていたんですね。長く細く働くことができる資格を、って。

熊：ああ。

加：って考えていたんですけど、まさかまさかで「きらり」に入れることになったので、そっちの仕事には就けず。

熊：え、「きらり」に入ると仕事に就けなくなる？

加：あ、前の仕事を続けながら、資格の勉強を一緒にやっていこうかなと思っていたんですけど、「きらり」は14時までなんですよ。

熊：ああ、そうか。知らないことだらけです。

加：前の仕事は出社しないといけなかったので、続けられない。

熊：そうなると、仕事を続けたりすることと、「きらり」に通わせることの二者択一みたいになるということですか。

加：そうなんです。すごい葛藤はありましたけど、ちょっとでも長く療育させてあげたいっていうことで「きらり」を選ぶかたちになりました。職場の方は一瞬困るぐらいで死ぬわけじゃないしって。ただ、仕事を辞めるときは、もう二度と働けなくなるかもしれないっていう気持ちでした。介護離職しちゃう人もきっとそうだと思います。

熊：それまで自分自身が積み重ねてやってきたことがある。でも、その積み重ねの連続性がそう簡単には担保されない。そうなると、引き受けなければならない気持ちというものが膨大というか、引き裂かれそうになる感じがあります。

加：子どもの癇癪がひどい時期は、「ここまでママは尽くしてるんだからね」って大声を上げたくなります。

熊：無理もないと言うか、なんと言うか、言葉も出ません。ただ、このプロジェクトで、公開できるものもできないものもありますが、多くの方にお話をお伺いするなかで、強く思うのは、それぞれもちろん別々の状況ではあるんですが、一人では背負いきれないものを背負わされている人がこんなにもいるんだということなんですね。で、よい社会ってなんだろうってことを考えると、やっぱり人と人のつながりのなかで、そういうものを分け合っていくようなことだと思うんですよ。同時に、嬉しいことも喜びあえたらなって。昔の言葉で、互恵とか互助って、そういうことだと思うんですね。それで、もっと言うと「会社」という言葉って反対にしたら「社会」ですけど、とにかく仕事をするということと、社会をより良くするということって、やっぱり本来つながっていくことだと思っているんですね。だからまあ、風呂敷を広げた言い方になりますけど、より良い公園をつくるということが、より良い社会をつくるということに重なっていったらなと、なんだか素直に強く思います。

社会を、「人間交際」と言うならば

加：人と人からでしか生まれないことってありますよね。それに、人で傷ついた心は、花でも動物でもいいけど、やっぱり人でしか癒せないこともあるって、わたしはすごく思っていて。やっぱり、人と人とのつながりって本当に大事だなと思っているし、わたしは別にあんまりつながりのない人間だけど、そういうつながりを持って活動す

る人たちってすごいなってやっぱり思うんですよね。仕事が、次の誰かの仕事を生むみたいなことって本当にあるじゃないですか。

熊：ええ、はい、うん。もう、はい、うん。えっと、社会って、societyの訳語なわけですけど、福沢諭吉はそれを「人間交際（じんかんこうさい）」って訳していたそうなんですよ。良い社会をつくろうって言ってもイメージが曖昧な感じがするんですが、良い人間交際をつくろうってなると、なんだか具体的になっていく感じもあるんですよね。で、まあ、繰り返しになっちゃうんですけど、なんかそういうニュアンスも込めながら、より良い公園づくりというものを、より良い社会づくりというものにつなげていきたいなと思う次第です。

加：ですねえ。

熊：ところで、ちょっとストレートな質問をしちゃうんですけど、加藤さんとして、このプロジェクトへのご期待を持ってくださるとしたら、それはどのようなものになりますか。

加：なにかを一つやったから全部がうまくいくってことはないので、いきなり完璧なものはできないとは思っているし、それを理解はしているんですけど、やっぱり公園に行くことが怖いって思ってる人たちがたくさんいるので、その気持ちがなくなること。

熊：もう...はい...うん。僕も含めて、公園に行くことの怖さを感じたことがない人からすると、全く想像できなかったことのように思うんですね。公園に行くこと、なんなら街に出かけること自体に、恐怖や不安を感じる方が、こんなにもたくさんいらっしゃるんだって。

加：そう、います。早朝にしか公園に行けない人は、要は他の人に会わないようにしているわけですよね。だから、他の人がいても行けるところであったり、他の人がいても参加できるイベントであったり、そういうことができる場であったらいいなとは思います。

熊：そうですよね。以前のお話で、最近増えてきている「ゼロ歳からのコンサート」のようなイベントのチラシには「泣いてもOK」「大きな声を出してもOK」みたいなフレーズがあって、安心するということをおっしゃっていたじゃないですか。なるほどなって、お話を聞いた後、結構反芻していたんです。つまり、インクルーシブ公園というものは、公園をつくるだけじゃなくて、公園との出会い方もつくっていかないと、目指す姿にならないなって思ったんです。そういう出会い方ができていれば、公園に行きやすくなるかもしれないと。

加：そうですね。なると思います。

熊：そこを意識することで、少しでも状況が良い方向に向かえばなあと。

見返りをもとめない会話

加：公園に限らないんですけど、「こんなところで叫んでるあの子、気持ち悪い」みたいな声がやっぱり一番怖いんですね。

熊：ああ。

加：とはいえ、子どもが何かにびっくりしたりしてワーッと泣いちゃったりするときに、声をかけてくださるのは嬉しいんですけど、「何歳？」「お名前は？」って言われても、うちの子は喋れないから応えられないんですね。ましてやパニックになっているんで。

熊：ああ。

加：そこで言ってほしいのは、「びっくりしちゃったね、今の音」、「怖かったよね、大丈夫だよ」とかなんですね。からだが動いちゃう子の場合は、「すごいね、そんなジャンプがいっぱいできるんだね」みたいなことで。

熊：ああ。って、さっきから、頷いてばっかりですけど、白い目で見られるのは当たり前に怖いですけど、なんと言うか見返りってわけじゃないけど、反応が来て当然となるような言葉を送られても、それはそれで辛いというのも、ああ、確かにとなりました。

加：あとは、他の子が、「なんであの子、ジャンプずっとしてるの？」って言ったときに、「そんなこと言っちゃだめでしょ」って大人の声が聞こえると、すっごく行きづらくなる。「あの子はジャンプが好きな子なんだよ」「ジャンプが上手だね」「えー、どのくらいジャンプするんだろう」みたいな会話が聞こえてくる分には微笑ましいくらいなんですけど、「そんなこと言っちゃダメでしょ」とか「見ちゃダメでしょ」みたいになると、なんかもう来ちゃいけなかったんだ、うちの子は連れてきちゃいけなかったんだ、ここには居ることができないんだみたいな気持ちになっちゃう。なんか褒め称えてほしいわけじゃなくて、あの子はそういう子なんだよっていうのをやっぱりわかってほしい。音に敏感なので、うちの子は耳を塞いで歩いたりもするんですけど、「うるさくないのに、なんで？」みたいなふとした疑問があがった時に、「あの子にはうるさく聞こえるかもしれないよ」とか言ってくれると、「ふうん」で終わると思うんです。けどなんか「見ちゃダメ」とか「そんなこと言わないの」ってなると存在を否定されてるっていうか、なんか切り捨てられたっていう感じがするんですよね。

熊：すぅー。

加：すぅーって。

熊：思わず深呼吸せずにはいられなかったんですけども…。

加：あはははは。

熊：極端に言ってしまえば、全部が全部を、理解や共感してくださいっていうことでもなく、ただただみんなと同じようにこの場所で生きて暮らしているというシンプルな事実を共有できたらなって。更には、なにかこう、その生きて暮らす方法というかスタイルが、みんながみんな同じとは限らないということも同じようにシンプルな事実だよねっていう。

加：そうなんですよね。

差別することなく排除されることなく、安心安全な場であってほしい

熊：人とのつながりということで言うと、「移動支援」という福祉サービスを、もちろん文字通り移動の支援ということで利用はするものの、同時にお子さんと人との出会いの機会としても捉えているというお話があったじゃないですか。録音ボタンを押し忘れて記録には残っていないんですが、そこも心に刻まれているんですね。そういう深いところにあるニーズというか想いみたいなものをしっかりと認識しておく必要があるんじゃないかなって。

加：うちの子のような状況で言うと、「自分でできることは自分でやるけど、自分でできないことは困ってますって言えるようになる」というのが、ゴールなんですよね。つまりそういう自立なんですよね。

熊：ああ、どんな人にも重要な気もしますけど。

加：まあ、そうなんですけど、わたしは、うちの子が「んっ」と一言口をひらけば、これが欲しいのかな、あそこに行きたいのかなってすぐわかっちゃうんですよね。

熊：汲み取れちゃう。

加：はい。でも将来的には、わたし以外の人にもわかってもらう必要がある。もちろん、こういう特性がありますというのは説明する資料をお渡しするし、お話もするんだけど、それだけじゃなくて、日常の暮らしのなかで、こっちに行きたい、あっちに行きたい、あれがしたい、これがしたい、これはできません、あれはやりたくありませんっていうのを、本人がただ「んっ」って言うだけじゃなくて、指を指すとか、なにかものを持って行くとか、そういうことで表せるようになるためには、やっぱり本人がいろんな人と関わっていくしかない。どうしても障害のある人っていうのは、関わり合える人がすごく少ないので、そのためにもやっぱり少しでも移動支援などの福祉サービスを使っていきたいっていうのはありますね。

熊：関わり合える人が限定されてしまうことへの不安が、将来の不安とも結びつくという。

加：たとえば、わたしが明日死んでしまったときに、うちの子は路頭に迷うわけではないけど、心が路頭に迷うと思う。

熊：心が路頭に迷う。

加：自分のやりたいことをわかってくれる人がいなくなってしまうっていう意味では、そうですよね。やっぱりいろんな人に関わって慣れてもらって、そこで自分の気持ちを伝えていく機会は必要だなって思います。

熊：まずは困ってることを表せるようにということなんですかね。

加：楽しいときは、やっぱり楽しいってすごくアピールしてくれるのでわかりやすいんです。

熊：そうかあ。困りごとはわかりづらい。

加：喋れないから、わたしでもわからないことはもちろんあります。まず、暑いのか寒いのかすらわからない。お腹が痛いかもしれないし、痛くないかもしれないし、ただ眠いだけかもしれない。もしかしたら、さっき足をぶつけたのかもしれないって。突然怒り出したように見えても、本人にはもちろん理由があってやってるんで。

熊：そういったことを、いろんな人との関わりの中で、伝えていく機会が増えるといいであろうと。

加：最近は本人が、わたしとは違う相手には、自分で伝えなきゃ伝わらないんだっていうのがわかるみたいで、痛いところを見せてきたりとか、指をさすようになったんですね。なにか欲しいときは、声を出すようになったりとかするんですよね。

熊：だから、いろんな人と関わる経験が大切という。

加：はい。そういうチャンスが少ないんです、すごく。

熊：親として、自分がいなくなった後の、その子の人生を考えるというのは、ごくごく当然のことだと思うんですね。

加：そうなんですよ。最近、そういう動画を見ちゃうと…。

熊：そういう、動画。

加：親が、自分亡き後の、重度の自閉症の子どものための終の棲家探しをするというもので。

熊：ああ。

加：もう施設しかないので、もう、はぁって、泣いている。そういう立場のみんながそういう気持ちになっているんだろうなって。だから、そういう施設でも、人との関わりがあればいいなって思います。

熊：「地域包括ケア」と呼ばれるあり方も浸透してきているようには思いますが、どのような状況であれ、人が施設に閉じ込められるようなことにはならない方がいいと思うので、地域が、人が生きる舞台としてちゃんと機能するようになったらなとは思います。

加：うちの子が学校に入学するときに、この地域がどうあって欲しいかということを資料に記入する欄があって、わたしは「差別することなく排除されることなく、安心安全な場であってほしい」ってコメントしたんです。手助けをしてほしいというよりも、排除されたりとかそっちの方が怖いから。「ああ、こういう人がいるんだな、ふうん」って思ってくれればいいなっていうだけなんですね。もちろん行政として必要な支援というのは必ずあると思うので、その部分を削ってくださいってわけじゃないけど、なんて言うか、「大の字に寝て、お願いします」ってやっているわけでは全然なくて、こちらからも必要なことがあればやりますし、話し合いの場にも出ますし、資料にまとめる必要があればやりますし、そういうことはするから、一緒にどうやったらいいかを考えていきたいなっていうだけなんですよね。

熊：もう、ほんと、それを当たり前のこととして、ただただ、それを、やっていきたいです。

冨永美和さん

共生社会を本当に願うなら

取材日：2024年10月21日

伝え合いの、メディアのような場としての公園

熊：公園を障害の有無に関わらず誰もが自由に遊べる場所にもっとしていきたい。それがこのプロジェクトの願いなんですけども、いわゆるインクルーシブ遊具というものを設置することが唯一絶対の方法ではない。と、そう考えているんですね。でも、それを鬼の首を取ったかのように喧伝するのではなく、じゃあ何をするべきか？というところが重要で、こうやって当事者や関係者、専門家の方々を尋ねているという状況です。で、これまでのヒアリングでもアドバイスを頂いていたのですが、公園がメディアのような機能を担保できたら良いよねって。

冨：公園がメディア、良いですね。

熊：はい。伝わるべき知識や情報が地域の方々に渡っていくためのきっかけということなんですけど、具体的に言えば、たとえば看板やチラシラックを公園に置くという方法があると思うんですね。で、更に、じゃあ、そこにど

のようなものが置かれたら良いのか？ということを踏み込んでいかないといけない。としたときに、小金井特別支援学校の廊下に掲示されていた「おみこしかるいな」のポスターが頭に浮かんでいたんです。

冨：ありがとうございます。「おみこしかるいな」は、以前小金井特支のPTA会長さんだった方が作ってくださったそうです。その後、学校と相談して外部でも使えるようになったようです。この「おみこしかるいな」を小金井特別支援学校だけではなく多くの方に使っていただき、障害児者の理解を深めていただきたいと願っています。

熊：それはとてもありがたいです。なんと言いますか、プロジェクトの進め方としても、地域社会の既存の資産というものをしっかりと認識していくことが大切な局面であろうと感じているんですね。なんでもかんでもゼロから新しくつくるということにしてしまうと、下手をすると、当事者の方々が既にやられていることを無下にしてしまうことになってしまう。それは、なんだか失礼な気もしますし、そもそも合理的じゃないと思うんです。

共生社会を願う「おみこしかるいな」

熊：「おみこしかるいな」をここで確認しておきます。「おどろかないでね」「みんなそれぞれ違うんだ」「こだわりが強いんだ」「しらんぷりしないでね」「かんたんなことばで話してね」「るーるを教えてね」「いやなことばもわかるんだ」「なかよくしてくれるとうれしいな」のそれぞれ頭文字がとられた標語なわけですけど、「障害を持っている方々が楽しく地域で暮らしていけるよう、障害の理解を深めるために作成しました」とされています。それに加えて、「これからも一緒に担いでいけたら」という想いが添えられていました。

冨：そうですね。

熊：こういった理解が地域に浸透すれば、もっと地域で暮らしやすくなるということなんですよね。冨永さんから見て、この標語の特にここが良いというポイントを引き続き教えて頂けますでしょうか。

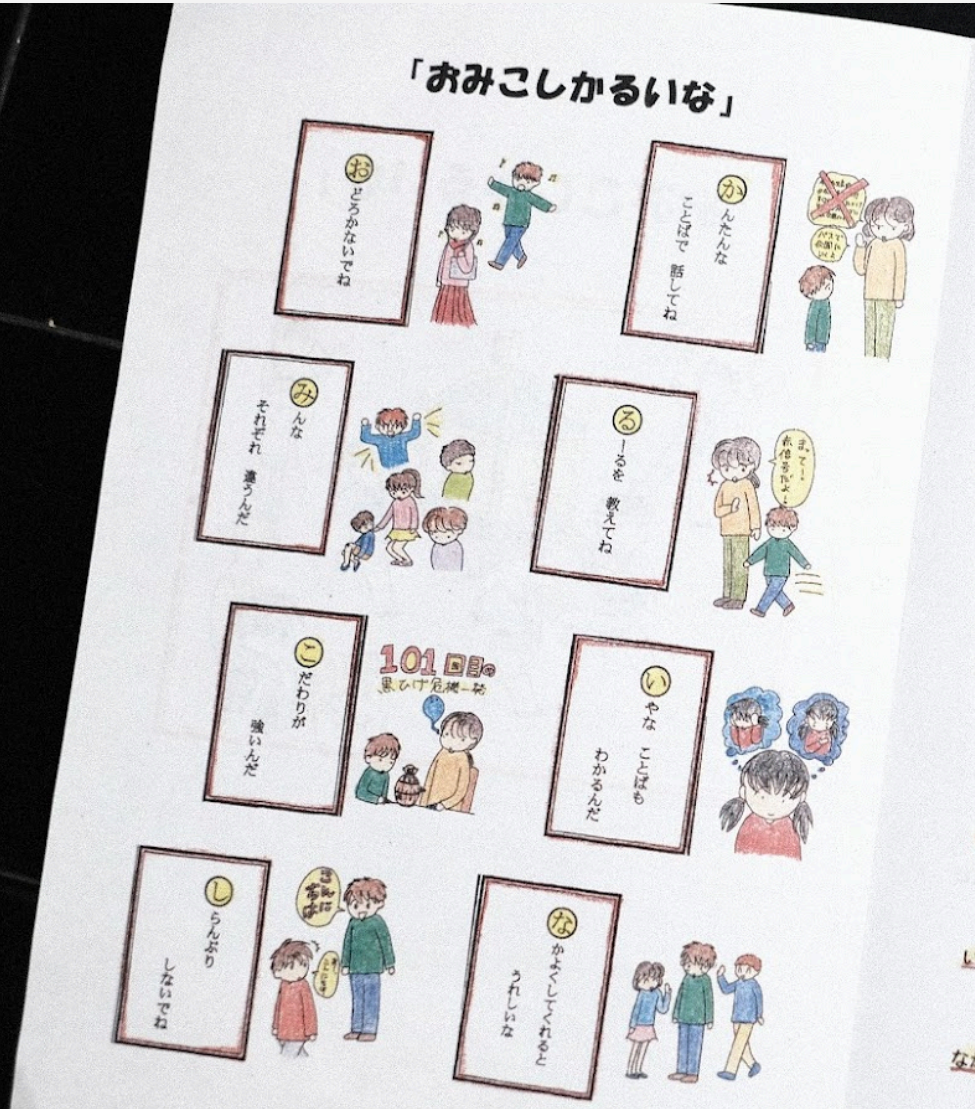
冨：具体的に端的にわかりやすく書いてくれているんですよね。「おどろかないでね」というところでは、「不安な時に自分自身を落ち着かせるために声を出したり、歌ったり、独り言をしゃべったり、はねたりします」ってありますけど、それが「ゲームをしたり、お友達と遊んで楽しい時間を過ごしているときと一緒で心が休まる時なんです」と話を展開してくれている。それを知っていると、驚いたり怖がったりしないで「はいはい」って思える。

熊：何事も理由があるということをまず理解できれば、変わってきますよね。

冨：うん、そうなんです。コミュニケーションの取り方をちゃんと教えてくれているんですよね。それに、「みんなそれぞれ違うんだ」というところでは、いろいろな性格な人がいてみんな違うように、障害のある人も同じように、みんな違うということも改めて書いてくれています。それも重要。

熊：障害者ということで人をいっしょくたにしてはいけないというのは、あたりまえではあるんですが、心がけないと、「みんなそれぞれ違う」という前提を忘れてしまいそうな気もします。

冨：改めて確認するというのが大切なんですよね。「しらんぷりしないでね」のところでは、「コミュニケーションが苦手だから人との距離感が分かりません。突然話しかけてきたりすることもありますが、びっくりせず返事をしてくださいね」「逆に突然話しかけられても答えることができないときがあります。決して無視しているわけで



おどろかないでね

不安な時に自分自身を落ち着かせるために声を出したり、歌ったり、独り言をしゃべったり、はねたりします。でもこれは、みんなが音楽を聴いたり、ゲームをしたり、お友達と遊んで楽しい時間を過ごしているときと一緒で心が休まる時なんです。

みんな それぞれ 違うんだ

私たちの周りには、いろいろな性格の人がいて、みんな違います。積極的な人もいれば、内気な人もいる。障がいのある人も、いろいろな人がいて、みんな違います。

こだわりが 強いんだ

『こだわり』は1つの物事や出来事に執着してしまうこと。同じ道をいつも通ったり、好きなことを何度でも繰り返してしまうことがあるけど、本人にとっては安心できて心地良い。そんな時は優しく見守ってくださいね。

しらんぷり しないでね

コミュニケーションが苦手だから、人との距離感が分かりません。突然話しかけてきたりすることもありますが、びっくりせず返事をしてくださいね。逆に突然話しかけられたても答えることができないときがあります。決して無視している訳ではありません。

かんたんな ことばで話してね

一方的に話をしたり、又うまく話せない子どもが沢山います。
言葉のキャッチボールが苦手。2、3才の小さな子どもに話しかける程度の簡単な単語を使って、優しい口調で話しかけてね。

るーるを 教えてね

迷惑な事、危険な時は、突然どなったり、怒ったり、無理にやめさせるのではなく、優しく、静かに教えてね。大きな声や音は苦手です。

いやな ことばもわかるんだ

嫌な言葉を言われると傷つきます。みんなと同じで悲しいです。

なかよくしてくれると うれしいな

僕たちの事を知ってくれるととっても嬉しいです。僕たちは生まれた時から、おみこしを担いでいるけれど、家族や先生、地域の人たちと一緒に担いでいるから楽しいよ。

はありません」とありますけど、これも本当にそう。物理的にも距離感が取れないんで、たとえばエスカレーターに乗るときも人と接近して立ってしまったりする。わたしも息子に「もう一つ下の段のほうが良いな」って教えたりしています。

熊：お互いに理解し合うということですよね。話しかけられるのが唐突に感じられたとしても、本人的には脈絡があってのことですものね。

冨：うん、声のボリュームやトーンなんですよね。慣れている方は対応してくださるんですけれども、慣れてらっしゃらないとやっぱりちょっとびっくりしちゃう。だからまずは知っていただくことが重要ですよね。

熊：そのとおりに思います。

冨：「かんたんなことばで話してね」ってありますけど、わたしたちって、結構複雑な言葉の使い方をしているんですよね。うちの息子にも、「これをこうしてください」ってシンプルに伝えたほうが伝わる。

熊：自分たちの普段のコミュニケーションが照らし返されるようです。

冨：そう、「優しい口調で話しかけてね」ってありますけど、結構、定型の人は打ち消しで話すんです。これをしないでください、あれをしないでくださいって。しちゃいけないことを言うんじゃなくて、して欲しいことを言っていただきたいんですね。たとえば「そこで走らないでください」じゃなくて、「そこは歩きます」って。あとは、「大きな声を出しません」じゃなくて、「静かにします」とか。

熊：ああ。否定とか打ち消す言葉だと、語調も強くなりがちですよね。

冨：そうですね。怒った口調で伝えられると、彼らにとってマイナスの刺激になってしまうんですね。すごく不安になったり、癇癪に繋がってしまったりするので、そういうことは落ち着いて、安定した声で伝える必要がある。

熊：なんかまあ、それって、障害の有無に関わらず、人間全般に必要なことな気もします。

冨：ねえ。「いやなことばもわかるんだ」、これも、わたしは本当にうなずきました。全部わかってます。うちの子どもに関しても、インプットは100以上だと思います。100以上のことをインプットできてアウトプットが数%っていうアンバランスさがあるんですけど、周りが自分のことを悪く言ってるのもすぐわかります。むしろわたしたちよりも敏感に感じてしまうために、わたしたちが感じ取れていなかったり意識できていないこともわかっていて、ちょっと不穏になってしまうということもあります。アウトプットが少ないということで、「いやなことばもわかる」ということが、なかなか理解されないんですよね。

熊：アウトプットの量が少ないからといって、インプットが少ないとは限らない。

冨：その通りです。

熊：それもハッとさせられます。

約束したつもりがないけど、守らないといけないルール

冨：案外、そういう空気は読めちゃうんですね。公園でもいろんなルールがあると思うんですが、それが理解できないと、やっぱりヒソヒソ言われたりもしますよね。そうすると、「やっぱり僕はいっちゃいけないのかな」って自分なりに感じ取って、遊びに行かなくなります。

熊：ああ、約束したつもりがないけど、守らないといけないルールというものが、結構あるんですよね。

冨：それで言うと、わたし、去年、ある会報に寄せた挨拶の中で、お話しさせていただいたのですが...。

熊：ある会報に寄せた挨拶？

冨：まあ、はい、それは「見えないルール」っていうタイトルにしていたんですね。というのも、日本に戻ってきてほぼ3年になるんですけど、14年間海外で生活してまして、子どもたちはみんなヨーロッパで育ってる感じなんですね。日本が大好きで帰ってきたんですけど、「見えないルール」がすごいことに、私も改めて気づくことがいっぱいある。そして、指摘を受けるとき大体怒られるんですね。

熊：ああ、「教える」が「怒る」になっちゃう。

冨：そう。

熊：「おみこしかるいな」の「る」は、「るーるを教えてね」ですけど、「迷惑な事、危険な時は、突然どなったり、怒ったり、無理にやめさせるのではなく、優しく、静かに教えてね。大きな声や音は苦手です」ってありますね。

冨：本当にそうなんです。「見えないルール」を知っているという前提で、怒られるんです。優しく静かに教えてはもらえない。長いこと海外で生活してる子であれば、たとえばエスカレーターだったら自然と真ん中に乗りますよ。

熊：ああ。

冨：端っこに乗るってことは、そもそも危ないし怖いですからね。

熊：エスカレーターを長持ちさせるためには、メーカーとしては本当は真ん中に乗ってもらいたいそうなんですよね。みんなが端っこに乗って重力が偏るから故障の原因になるらしいんです。でも、「見えないルール」って、一旦定着すると、それ以外の選択肢が吟味されることがあまりないですよね。それを疑わずに守って当然となってしまう。

冨：やっぱり障害を持っていたり、弱い立場にいる人たちにとってはすごく怖い。優しく教えてもらえないし、怒られるし、舌打ちされるし。エスカレーターに限らず、「見えないルール」に気づいた時には、「〜しないように」とは伝えず、「すること」を伝えています。都度、教えてあげないといけない。最初が肝心なんで。

熊：言われてみたら、かなり難易度というか負荷が高い気がしてきます。

冨：「メルトダウン」と言うんですが、一種のパニックのような状態で、本当に手がつけられないほどになることがあるんですね。何時間も自傷したり、他害したり、ものを壊したりとか。癇癪とは違っていて、本人も原因がわからない。もうわけわかんなくなっちゃってる感じですね。そのメルトダウンというものを、コップの水にいつも喩えているんです。

熊：コップの水。

冨：不安な気持ちなどのマイナスなことがずっと積み重なって溜まっていって、最後の一滴がなんなのかっていうのは関係がないんです。でもその一滴でこぼれてしまう。

熊：こぼれちゃう。

冨：そう。最後の一滴によってコップの水が溢れると、どんどん溢れ出してしまって、癇癪、自傷、他害、大きな声を出してしまうこともあります。

熊：コップの水が溜まりやすい社会なのか、そうではない社会なのか。そうやって考えると、「見えないルール」が前提となって、教わるというより怒られるということが多いと、キツいですよね。

冨：そうなんです。禁止事項が多いっていうのは、親にとっても本当に生きづらい。「あれも駄目らしいよ、これも駄目らしいよ」っていうのを子どもに通訳する感じですかね。ダメとは言えないので、ダメを使わずにしてほしいことを伝えます。

公園に行って、泣いて帰って来る

冨：知的障害があると、重複して自閉スペクトラム症かあったりもするんですけど、やっぱり親が安心して外に連れ出すことができない。子どもが小さい時期は特に公園が必要だと思うんですけど、もう本当にハラハラして落ち着いて遊ばせることなんかできません。時には親子で泣いて帰ってくるようなことの連続。

熊：公園に行くと、泣いて帰って来る。

冨：そうなんですよね。大体つらい思いをして帰ってこなくちゃいけない。ルールを守れないし、人との距離感がつかみづらいから子どもの輪のなかにスッと入っていって、「変な子が来たよ」ってされちゃう。定型発達の一般のお子さんたちと遊ぶことってすごく良いんですけど、やっぱり仲間外れにされるところを見なくちゃいけないし、やっぱりこうなるんだっていう現実を見させられる。だから公園って、つらい場所でもあるんですね。親にとっては、突き付けられます。比較をしちゃいけないし、そうするつもりもないんだけど、目の前でそういう状況が展開されているので。

熊：つらい場所としての公園。

冨：公園が必要な時期って、子どもの年齢が2、3歳から小学校低学年くらいですよね。そのタイミングは、親の「受容」の時期と重なるんですよね。

熊：ああ。

冨：本当は違うんじゃないかと思いたいじゃないですか。障害なんてないって。けれどもやっぱり比べると明らかに違う。親も結構傷つきやすい時期なんですよね。なので、公園のことを考えるとそこはちょっと複雑だなって思いながら、でもやっぱり、公園は安心して遊べるところであって欲しいですし、やっぱり私もいろいろ活動をしていて感じる、何が一番大事かって言うと、人との繋がりだっていうのはもう本当に思います。繋がっていくことと、障害を知ってもらって、理解してもらうことですね。

人との繋がりと、理解を育む

冨：たとえば知的障害とか自閉スペクトラム症って、目に見える障害ではないこともあって、知ってもらうことに時間がかかる。だから、こういう子がいるよっていうことで、わたしは息子を連れ回します。耳にはイヤーマフって言うある程度の音を遮断するものをつけて歩いてたりとか、首振りとか声を上げたりとかを繰り返すチックぽい行動もします。今のような季節の変わり目の時期って、うち子に限らず、そういった癖が強くなるみたいですね。

熊：季節とコンディションがつながっているんですか。

冨：みんなそうだと思うんですけど、うちの子に限らず、難しさが表面化しやすい時期かなと感じています。

熊：さっきの「コップの水」の話で言うと、季節の変わり目は、かなり水が溜まっている状況ということになるんですかね。

冨：そうですね。なので、親がそれを理解できているといいんですけど、そうじゃないとその「最後の1滴」のところだけを見てしまうんですね。でも違うんですよ、いっぱいあるんです。全てが積み重ねなので、学校での出来事かもしれないし、登下校の何かかもしれないし、スーパーに行ったときの何かかもしれないし、テレビで見た印象的なものだったかもしれない。「これだ」っていうのがないんですよね。なので、一番いいのは、切り替えができるように育ててあげるっていうことなんですけど、なかなかそれも簡単なことではありません。だから、たとえば「茶話会」という形でお母さん、お父さんたちで情報交換ができたり、グチを言い合えたりする場所があると本当は良いんですよね。

熊：まずは親自身が、人との繋がりと理解を贈り合えるような機会。

冨：わたしは日本に帰る前にロンドンで子育てをしていたんですけど、向こうにはそういう場所がいっぱいあるんですね。自分でも「ケセラの会」というのを立ち上げて、日本からの駐在員とか、旦那さんがイギリスの方でっていう人が利用してくれていて、日本語で喋れるよっていうところがポイントなんですけれども、そこで情報交換とか、困りごととか話してちょっとスッキリしようっていう。

熊：そうか、母語で話せるというのも結構貴重なんですね。

冨：そうです。

熊：ケセラ？

冨：「なるようになるさ」のケセラセラですね。

熊：ああ。

冨：なるようになる、大丈夫。そうやって寄り添っていたいっていう。

ロンドンの学校の、コーヒーモーニングという自然な寄り合い

熊：心理的なところも含めて支えがないと、倒れてしまう。ロンドンでは、そうやって支え合える集まりがたくさんあるんですか。

冨：学校では、「コーヒーモーニング」っていうのがあってですね。もう言葉のままなんですけど、お国柄、安全上、向こうでは子どもを親が学校に送らなくちゃいけないですよね、特別支援学校はスクールバスが来ますけど。それで、子どもを学校に送った流れで一緒にコーヒーや紅茶でも飲みながらグチを言いませんかっていう、コーヒーモーニングという名のグチ・情報交換大会。でも、それが大事なんですよね。その中に特別支援教育が必要な子どものお母さんもいたり。

熊：そうかあ。日常的な生活動線のなかに、そういった機会が埋め込まれているのは、なんだか理にかなっている気がします。学校も、そのためにスペースを提供してくれているわけですよね。今回の公園の話に置き換えて考えてみても、示唆的な感じがします。

冨：そうですよね。わたしも、英語の練習にもなるし、ママ友づくりということで行ってたんですけど。ただ、どうしても日本人のお母さんがいらっしゃらなかったので、日本語で喋るところが必要だっていうことで、「ケセラの会」をつくったんです。

熊：まず、親がケセラセラになれるように。

冨：はい、「親の心の拠り所」っていうのがメインテーマです。

公園にいると、「ねばならない」を手放せる

冨：子どもが小さい頃は、本当に手が出てしまうんじゃないかっていうことが、何回もあって。その度に、主人に「ごめん、ちょっと早く帰ってきて、今、精神的にちょっと良くない」って。

熊：「助けて」というシグナルを出せたんですね。

冨：はい、それが言える相手ですし、もう、近所の人にも、みんなにヘルプって言っていました。息子の成長のなかで、想像しきれないことも出てくると思っていますから、周りに味方だったり、逃げられる先っていうのがないとって。でも、多分、わたしの性格もあるんじゃないかな。助けてサインを出していくのは簡単なことではないで

すよね。あと、公園って外の目があるじゃないですか。そういうところだと、精神的な追い込まれを逃がすことができるという部分もあると思うんですよね。

熊：公園だと、精神的な追い込まれを逃がすことができる。

冨：まず、公園が安心して行ける場所になっていれば、たくさん行けると思うんですね。

熊：その状態を目指したいです。今、そうなっていないので。

冨：はい。その上での話なんですけど、わたしの経験として、外で自分の子どもをみることで可愛いなって思い返せる時期があって、わざと外に出るようにしていました。

熊：外に連れて出るのが大変なのにも関わらずですか。

冨：大変なんですけどね、皆さんそうかはわからないんですけど。

熊：それは、お子さんが楽しそうに遊んでいる様子を眺められるからというニュアンスなんでしょうか。

冨：いや、家の中でも遊んでいるじゃないですか。

熊：たしかに。

冨：家の中だと、自分が掃除したり、綺麗にしているところを汚されたり、壊されたりすると腹が立つじゃないですか。自分の思い通りにいかないと怒りに変わってしまう。でも外だと、そういう苛立ちは起きないし、少し客観的に見ることができて、子どもをかわいいと思える本来の感情が蘇ってきた気がしていました。

熊：ええっと、非常に、公園の本質的な可能性に関する深い議論であるように感じます。

学びを、プロジェクトとして捉えると

冨：日本でも「フルインクルーシブ」の議論がありますけど、そもそもの教育観を考え直す時期に来ているんですよね。

熊：フルインクルーシブって、障害のあるなしに関わらず子どもたちが同じ教室で学んで一緒に生活することをめざす教育の考え方ですよね。

冨：そうですね。その環境を求める希望者に対してのことなのか、完全に全員がフルインクルーシブなのかとか、いざ導入のことを考えると、色々と考えないといけないことがたくさんあるんですけど、そもそも、特別支援学校が持っている専門性や安全性というものは残して言っていいんだと思います。

熊：いずれにしても、そこにある知見は大切にすべき社会的な資源である、と。

冨：わたし、イギリスの学校で障害のある子どもたちのサポートをしていたんですけど。

熊：え、そうなんですね。

冨：はい。イタリアはフルインクルーシブと言われていますけど、同じように専門的な資格を持った支援員がちゃんと入っていて、一人ひとりに付いているんだそうです。それで、そのイタリアに住んでいる友人に、障害のある子もない子もどうやって一緒に勉強してるのって訊いたら、教科書を覚えるようなことではなくって、プロジェクト型で進めていくっていうことなんです。

熊：ああ、そうか。それこそ教育観そのものが違う。

冨：プロジェクトだから何かテーマを決めて協力して遂行していくわけですけど、一緒に生活する中で障害のある子も含めてお互いの、何ができるかとか、何に興味関心をもっているのかっていうのをわかっている。だから、それぞれどういう役割にしていくかっていうことを自分たちで考えていくそうなんですね。

熊：へー、良いな。役割があることで居場所が生まれるし、プロジェクトチーム全員のそれを考えるところからが、もう学びですね。

冨：そうなんですよね。たとえば、運動会のリレーで競争する時に、足の遅い子がお荷物扱いされたり、嫌な顔をされたりしてしまうじゃないですか。

熊：一斉に、同じことを、同じようにやる。そういう仕組のなかでは、自ずと、みんなと同じじゃないとダメってなりますよね。

冨：なので、そうじゃなくって、いろんな子がいた方が良くなるっていう仕組みにしていく必要があるわけですよね。誰も答えを持っていないような事柄に対して、どうやって協力し合いながら自分たちなりの考えを導き出していくのか。それって、そのプロセスを重視するということだと思うんですよね。

熊：現に、今の社会がそうなっていますし、このプロジェクトそのものが、まさにそれですし、そうありたいところです。

冨：そういうことなんですよね。

阿部裕太朗さん

迎え入れることを備え続ける公園的な地域へ

取材日：2024年11月21日

名前のついていない遊びが生まれる、かつての駄菓子屋のような場所

熊：阿部さんが館長になってから、地域で「環境楽習館」のことが話題になることが増えている感じありますよね。実際に子どもたちを中心に、たくさんの人で賑わっているし、地域の居場所としてとても機能しているように感じます。

阿：ありがたいですね。特に特別なことをしているつもりもないけど、なんか、なんだろう、多分それって、他のところが「駄目」が多すぎるということもあるだろうなって。

熊：駄目が多すぎる。

小：そういえば天井の方に上がって挟まったボールとれました？

阿：あ、はい、とれました。

熊：ん、ここ室内ですけど、子どもたちがボール遊びをしてたんですか？

阿：柔らかい軽めのボールで、玉入れみたいにして遊んでて、そうしたら、ぶわぁー、うぁーあ、みたいになって、え、そんな遊び方あるの？って。斬新な遊びが日々更新されていくんですよね。

熊：名前のついていない遊びが生まれる場所。

阿：そう、怪我しないで、壊さないでいてくれたら、まあ良いかなって。

熊：まさしく「駄目」とすぐ言わない。

阿：さすがに、という時は言いますけどね、「ちょっと待って、こっちならどうぞ」って。

熊：ん、でも、頭ごなしに否定はしないんですね。

阿：これならどうぞって言えることはあるんで。

熊：なるほど。夏休みにお邪魔したときに、たくさんの子どもたちが、雑談したり、勉強したり思い思いのくつろいだ過ごし方をしていてビックリしたんですね。人数の多さもそうですし、そのバラバラで気ままな具合にも。

阿：人数で言うと、夏休みを明けて最近の方がむしろ多くって、放課後の時間に20人くらい来てくれるんですよね、学年もバラバラで。それで、幼稚園や保育園が一緒だった子同士が、ここで再会して、「あ、誰々」って名前を呼び合うみたいな。

熊：あー、地元の関係が結び直される場所。

阿：大人でもそういうことあるなって。

熊：たしかに。そして、それは豊かな地域社会のあり様な気もします。

子どもが、一人の人として対応をしてもらえる場所

熊：にしても「環境楽習館」って、小金井市の環境学習の拠点と言いますか教育施設ではあるとは思うんですけど、子どもたちって、ここのことを何だと思っているんですかね。

小：昔の駄菓子屋っぽいですよね。実際にここで駄菓子を売っているというのもあるんですが、集まれるし、遊べるし、くつろげるし。それに、トイレもあるし、お水も飲める。

阿：子どもがちゃんと「お客さん」になれる場所って、そんなになくって、やっぱ親の付属みたいな感じの「お子様」としてしか扱われないことが多いので、なんだろう、うん、子どもたちが一人称を持っている一人の人としてちゃんと扱われるみたいな所かなと思ってます。

熊：素敵です。具体的な質問なんですが、それで言うと、ここに訪れる子どもたちが入口から入って来たらなんて声をかけるんですか。

阿：「おかえり」とか「おつかれさま」とか。

熊：あー、お客さんとしてという対応もありつつ、そこは「いらっしゃいませ」ではないんですね。

阿：「ただいま」って言ってくれた子がいて、なるほどって思って。

小：「おかえり」って、嬉しいですよね。

熊：敬意の現れとしての「お客さん対応」。親しみの現れとしての「おかえり」。子どもたちが駄菓子を買ったり、ドリンクを注文している様子は見てましたけど、極端なことを言ってしまえば、何も買わなくても、お金を使わなくてもここに居て良いんですよね。

阿：うん。おもちゃもあるんでね、好きにしてって。

熊：好きにして。

阿：基本的にこっちでなにか遊びをすることはないので、自分で決めて自分でやってねって。例えば、「人が足らないから人生ゲームを一緒にやって」とかだったらやりますけど、仕事が暇なときはね。そういう感じで頭数で必要なときは手伝うけど、基本的には自分たちで何かやったらいいんじゃない？って。そこで、あれがない、これがないって、例えば「ハサミある？」って訊かれたら、はいどうぞって。

間に立つ人

熊：「好きにして」というのが、突き放しているわけではなく、お互いに好きに過ごしていく中で、何か重なるところがあったり、できることがあれば、もちろん助け合うよっていうのは、子どもや大人に関わらず、自立した人間同士が共に居るということの、基本原則なような気もします。

阿：「具体的にこういう人がいるからこうしよう」みたいな形で、一緒にこの場をつくっているという感覚があって。

熊：顔が見える関係性のなかで、場を育んでいきたいということですよね。

阿：はい。だから、今かなり子どもに寄ってるんですよ。

熊：子どもたちがたくさん来てくれるから、というね。

阿：自分は、「調整役」みたいなものと思ってて。だから、今後、シニアの方とか、それこそ今回のplay hereのようにインクルーシブな公園を必要とされている方などと出会えていけば、伸ばしていくべきものも変わってくるし、変えていきたくもあるし。

熊：阿部さんの出会いが豊かになればなるほどに、ここが豊かに変化していくということですよね。それは、当然だけど珍しいことだとも思いますし、そういった出会いを受け止めているからこそ言える言葉だな、とも。え、で、阿部さんは、ご自身でもともとケータリングなどのフードの仕事もされてますし、ここでは飲食を出したりもしているけど、ここでは自分のことをある種の調整役として捉えているんですか。

阿：なんか、それがあるからどうとでも形づくれる、みたいな触媒というか。なので、なんか別に食べ物を作りたいわけでもないしって言うと、語弊があるんですけど、用が足りれば十分かなって。いきなり腕まくりして料理を出す場所でもここはないよねっていう話なので、もちろん必要になったら出しますけど、求められるものに合わせてやっていく、みたいなことのほうが大事。

熊：なるほどです。自分自身を、場所だったり他者に押し付けることはしたくないということですよね。そうなってくると、どんな化学反応を起こすべき触媒なのか、どんな変化をもたらすべき調整なのか、という倫理観というかビジョンの話にもなってくるような気もするんですね。それで言うと、そもそも、この「環境楽習館」って、元々はなんなんでしたっけ？小金井市における位置づけはどういう形になっているんですか？

小：元々は、いろんな環境に配慮した設備を体感するっていうことで、太陽光発電システムや床下暖房を取り入れている「住宅型研修施設」です。

熊：環境により良い暮らしを、家を通して伝えていくと。より広く多くの市民に、この施設をひらいていくために、今の形がとられているということだと思うんですが、日比谷アメニスさんの指定管理のもと、地域で活動をされていた阿部さんが館長として運営をやり始めたのは、2024年度からでしたよね。

小：はい。直接的な環境教育につながる使い方しかできなかったので、地域の交流の場としても使えるようにするために条例を改正したことによって、いろんなイベントもできるようになったという経緯です。

熊：まさに「交流」が生まれているし、「公園的」になってきてるっていう印象を受けますけど。

小：そうですね。

熊：でもまあ、環境に関するポスターや展示もあって、僕自身もそうでしたが、なんとなく訪れて、「へー、そうなんだ」みたいに、学ぶ機会にはなってはいるので、当初の志が同時に叶っているような気もします。

小：来てもらわないと、伝えられないんで、まずは来てもらうってことを今年は目指してるっていうところがあります。半年終わった時点で、既に去年の2倍の来場があるんです。

熊：え、このペースで行くと、昨年度の4倍の来場者を記録すると。

小：はい。

熊：もちろん、いわゆる来場者数だけで成果を測るわけではないものの、とはいえ、僕もたまに来ると雰囲気が良いなとは感じていて、その来場者数はその結果でもあるわけですよね。

人が地域を育む、地域が人を育む、その両方

熊：阿部さんにお話をお伺いしたかった理由の一つとして、この半年で環境楽習館で起こっていることは、一つの成功事例として、この地域や社会で広げていくべきものがあるんじゃないか？という想いがあるからなんですね。素直な言い方をすれば、「真似すべきを真似すべき」と思うんです。なんだけども、「じゃあ、何を真似すべきなのか？」というところをしっかり吟味しないと、ただのコピー＆ペーストになっちゃうんで、たとえばカフェをやれば良いとか、フリマをやれば良いとか、安易なコピーになっちゃう。

阿：そう。

熊：お話を始めて、ここまでまだ15分くらいしか経ってないですけど、子どもや仕事や地域に対する考え方や観点に関する話がたくさん出てますよね。おそらく安易なコピーにしないためには、そういった哲学のようなところをみんなで磨いていくようなことが欠かせないと思うんです。でも、それは時間がかかるから、みんなそれにあまり時間を割かない。急がば回れって言いますけど、まさに、そうしたい気持ちもありまして。

阿：ぜひ。

熊：あと、あらかじめ言っておきたいんですけど、良い事例が生まれると、「あれは、あの人だから、できた」「あそこだからできた」と、批判されることが自ずと増えていくんですよね。つまり、属人的だとか、再現性がないとか。

阿：うん。

熊：ただ、「再現性がない」という批判フレーズは、安易にも使えるので、地域社会で良い事例の芽を潰しちゃうというか、そのための土壌を貧しいものにしちゃうと思ってるんですね。で、議論すべきは、「まず、再現すべきと思うか？」なんですよね。「再現すべき良い事例だ」とみんなで思えたなら、「その再現の確率を上げていくためには、どんな工夫をすれば良いんだろうか？」ということをみんなで考えるという、事の進め方を選びたいなって。

阿：好きに振る舞える環境を整えてもらってるので、そこはデカいかなと思ってて。

熊：ああ、そうそう、ある意味、小金井市という行政、日比谷アメニスという指定管理者、阿部さんという地域の実践者が協働しながら成果を出していくためには、どのような制度設計が必要か？みたいな検証や議論になっていくようにも思っています。まず、確認なんですが、日比谷アメニスさんが、阿部さんを雇い入れている形ですよね？

阿：そう、契約社員という形です。よく雇ってくれたなと思って。こんな、ちょっと前までフリーターみたいな、履歴書だけを見たら、よくわかんない人だし。

熊：いやでも、それは、素晴らしい状況だなと思うんですよね。地域の方々との関係性づくりみたいなところは、地域と縁のなかった日比谷アメニスさんが満足にやるには、なかなか骨が折れると思うんですよ。そうしたときに、もともと地域でといろいろと活動をしていた阿部さんが、小金井の公園や緑地の指定管理という業務の一員を担っているということは、注目すべき事実だな、と。その上でなんですが、「好きに振る舞えている」と思えているという。

阿：数値化できるものが全てじゃないけど、利用者とかリピーター率とか、一応、数字で表せる成果は残っているので、自分が好きでやれて、アクセル踏むべきところはどんどん踏んでいこうって。そのなかで、苦手なところは、会社側がやってくれているんです。

熊：持ちつ持たれつ、と。たとえば、行政側は、阿部さんのような地域の個人の実践者には、そうしたくても、仕組み上、なかなか発注や契約ができないんですよね。一方で、日比谷アメニスさんは、小金井市立の公園の管理を網羅的になさっていますけど、そういった面的なことも、個人ではなかなか担えない。

阿：そうですね。

熊：このplay hereにおいても、パシフィックコンサルタンツという大きな会社さんと小金井市さんと、地域で実践していた僕という枠組みがあるんですが、ほとんど同じ話なんですね。まあ、僕も怪しく見えると思うんですけど、それは置いておいても、目利き力と寛容性は問われますよね。そして、どういうフォーメーションを組めば、地域に成果を落とし込んでいけるのか？という議論は、環境楽習館の成功事例をもとに、もっと考えていくべき話題ではあるであろうと思っています。そうやって、特に若い人が、地域で挑戦して成長していくことによって、その地域も成長していくみたいな話は、本来のあるべき姿であるようにも思います。今って、個人の成長と、地域の成長が切り離され過ぎなんですよ。

誰かの困りごとを、みんなでどうにかすること

熊：インクルーシブ遊具を置いて終わりではないという話は、何回も繰り返して強調していくべきだと思ってて。トイレの整備も必要だし、移動手段のケアも必要だし、心のバリアフリーという人々の理解や認識という側面も欠かせないし、当然のように考えるべきことがたくさんある。さらには、あらかじめ準備したチェックリストを完了させて終わりにするのではなくって、そのチェックリストそのものを更新し続けていくようなコミュニティというかコミットメントが必要だし、そのようなスタンスでプロジェクトを構えておくことの方が大切だよなって思っているんですね。阿部さんが言うような、出会いによって、その場も可変的に豊かにしていくという感じで。

阿：そうですよね。

熊：僕もやりながら学んでいるんですが、「摂食嚥下（えんげ）障害」がある子どもたちの保護者の方々と話をしていたら、食事をブレンダーでペースト状にするわけですけど、夏だと腐りやすいから気にして出掛けづらい、と。レストランとかでブレンダー使っていると怪訝な顔をされることがある、と。だから、公園のインクルーシブ化というものを考えるときに、食のインクルーシブという観点もあるんだなって。

阿：これ美味しいよねって、感じ合いたいし、言い合いたいよねっていう。

熊：ほんと、まさに、それです。

阿：ハードルが多すぎますよね。

熊：いきなり完璧にはできないにしても、ある程度見通しというか論点をしっかり見据えておかないと、仕事したことにならないなと感じるんですね。とはいえ、わりとちょっとしたことでも、状況が良くなることってある気がしてて、例えば、マイボトルをスターバックスとかに持っていくと洗ってくれるじゃないですか、あんな感じで、「ブレンダー、洗っときますか？」みたいに、お店で自然に声がかかる環境になったら良い気もするんですよ。それって、そんなに難しいことでもないような気がしてます。

阿：そうですよね。なんか同じところまでに行くハードルが高いと本当に全部諦めたくなるじゃないですか。

熊：全部諦めたくなる。

阿：「うー、なんで普通というものを当然のように享受してんだよ」「普通の側にいるの、うらやましい」ってなるのが結構あるんですけど、まあ、それはそれなんですけど、そういうところの想像はできるんで。

熊：「普通」というものからはみ出る、「生きづらさ」みたいなものって、みんな大なり小なりあって、たとえそれを感じずに暮らせているとしても、それってずっと続くわけじゃないとも思うんですよ。あくまでも、暫定的な「普通」状態。そういうことを、改めてみんなで認識する必要があるんじゃないかなと思います。その上で、誰かの困りごとや生きづらさを、みんなでどうにか解消していくというところが、社会や国家というものがあることの大義名分だったはずだよねとは思うんですよね。

制度が追いついていない存在

熊：play hereでインタビューを続けていると、皆さんの言葉に自分自身がとても突き動かされている感覚があるんですね。だから、こちらもいろいろと頑張れるというところがあります。同時に、言葉を紡がざるを得ないというか、沈黙も含む言葉というものに向き合わざるを得なかった時間や状況の蓄積というものも感じます。

阿：ある意味、うちもそういう時期が長いことあって、20代のときに家庭が欲しいなっていうところにすごい執着してて。

熊：家庭が欲しい。

阿：ただ日本の制度だとちょっと無理っていう。

熊：ああ。

阿：だから、養育里親みたいなことをすごい調べたり、そういうお話会とかにも参加したりしてたんですけど、あ、駄目なんだ、みたいな。どこまでも社会の、その「正しい」とされている形から排除されていくみたいな。

熊：自分自身が「普通」というカテゴリーに入っていない上に、社会の制度にも入っていない。

阿：そうそう。なんて言うの、このままいくと独居男性の孤独死みたいな感じで終わる人生だなと思って、それ、絶対嫌と思って。

熊：それこそ、先程おっしゃっていた、「普通になるための、ハードルが高いと本当に全部諦めたくなる」という。

阿：そうそう。

熊：いま笑いながらお話をされていますけど、それって、この社会が生きるに値すると思えないという、強い言葉でいってしまえば、希望を感じることができないということでもあるわけですよね。

阿：そうそう。今日のヒアリングの趣旨と離れちゃってるかもしれませんけど。

熊：いや、離れても全く問題ないんですけど、かといって離れている感じもしなくて。というのも、宮崎駿さんが、「子どもたちに『この世は生きるに値するんだ』ということを伝える」という心構えを先人から受け継ぎつつアニメ制作に臨んでいると語ったというニュース記事が、ずっと頭にあったんですね。で、「公園を障害のあるなしにも関わらず、誰もが遊べるインクルーシブなものにしたい」という、このプロジェクトが目指すべきところは、つまり、それなんだと思ってたんですよ。だからこそ、良い兆しという希望を持ち寄って、分かち合っていきたい気持ちがすごくあります。

阿：普通にも色んなパターンがあるし、今、それが増えてきていると思うんですけど、最初から自分自身がフィットするパターンが社会のなかに存在していないことに、ずっと腹が立ってて、「外国ならそれあるよ」って言われても、「それって、ここから出ていけってこと？」ってなるんで。だから、ここで生きていくためのロールモデルがないことにずっと悩んでて。ただ、それがなくても、働くことの楽しさや、賑わいを自分の周りに構成していくのはできるから、ご近所付き合いが気薄なこの社会のなかで、なんかちょっとなるべくいろんなところで、「よろしくお願いします」ってやってます。環境楽習館みたいなところで働いていたら、孤独死も避けられるだろうから、80代まで働ける施設をつくるしかない。

熊：あー、それは希望がありますね。なんというか、公園って、法的にも公共の福祉であったり、人々の健康の増進というところがその存在根拠でもあるわけですよね。イギリスは2018年に、孤独が国を挙げて取り組む社会問題であるということで、「孤独担当大臣」というものを設けたわけですけど、公園を、そういう意味での心身ともに健康を醸成する場所として活用していくポテンシャルはまだまだあるんじゃないかなとは思っています。

託し、託されることのネットワークと生活の張り合い

阿：自分が死んだ後に、「あとは任せた」ってやりたいんですよね。思い出したのが、数年前に、お世話になってた料理家の先生がお亡くなりになってしまって、形見分けをみんなでしてたんですよ。先生独身だったんですけど、「これだ」って思って。受け取ってもらえるように、うちの形見にすごい価値がでるようにがんばろうって。

熊：受け取ってもらえるように、ですか。その先生は、心の師匠でもあったんですか？

阿：そうそう。

熊：なんか、血縁とか地縁とか、人と人の縁のつくられ方ってありますけど、そういう血や地の繋がり以外で、人と人はどのように縁を切り結ぶことができるのか？というのは、今の社会の大きな問いであるようにも思います。お墓とか町内会とかPTAとか、これまで強制力のあった縁のあり方が、問い直されてますもんね。ちょっと話が飛びますけど、できれば、地域の公園で結婚式やお葬式ができたら良いなとは思っています。

阿：結婚式、楽しそう。

熊：冠婚葬祭を地域ごととして営み直すというのは、必要な気もしているんですよね。

阿：お葬式はどうしましょう。公園で散骨？

熊：なははは。法律や制度の話はありますが、樹木葬も流行っていますし、それができると地元への感情も変わってきそうです。文字通り、骨を埋めたくなるくらい、地元が好きという。半分冗談ですが、自分の身も心も預けたくなる地域であるためにはどうしたらよいのか？ということは、結構重要な議論ではあろうかと本気で思っているんですよね。あと、例えば、友人や家族が埋葬されている公園では、ゴミのポイ捨てとかは絶対しなくなるとか。

阿：そういう妄想って、いいですよね。

熊：そういう感じに社会がなっていったら、阿部さんがおっしゃる「あとは任せた」ということがしやすくなる気がします。

パッケージを買うだけで出来上がる公園にしないために

阿：それぞれの場所に特色がある地域になるのも面白いかなって思うんですね。今、ここは、子どもの居場所みたいなことになっているから、その部分が強いけど。

熊：うん、国立公園とかならいざ知らず、市の管轄の公園の話になってくると、一箇所で全てをまかなうということは、そもそも無理なので、その人らしさというものを大切にするように、その場所らしさを大切にした公園というものがあったほうが本当は良いはずなんですよね。だから、ある程度の共通の水準はあるにしても、それぞれの公園の特色をどうとらえるか、という議論は大切であろうと思います。極端な言い方をしちゃえば、なんとなく出来上がった公園も多いと思うんですよね。遊具メーカーが、遊具をパッケージ化してくれているから、それを選んで設置するだけという。

小：宅地造成でつくられる公園では、あらかじめ整備の要項みたいなものをつくるんですけど、そこで例えば、ブランコ、滑り台、砂場ってあって、こっちがパッケージ化しすぎちゃっているところはありますね。

熊：そのほうがつくりやすいですもんね。ただ、つくりやすいことが、すなわち良いものになるという確約はないし、そこで立ち上げるべき議論は、「何が欲しいか？」というものよりも、「わたしたちは、この場所でどういう暮らしを営んでいきたいのか？」みたいなところだったりもするはずなんですよね。とはいえ、じゃあ、そういう議論をどういう枠組みでやっていくのか？ということを実際的に考えるのはかなり難しい。なんで、ある程度は、あらかじめの論点の整理であったりとかの、実りのある議論をするための下地が重要であろうと思うんですが、そこはもうホントに試行錯誤をしていきながらやるしかない社会状況だなとも思っています。パッケージ化されたものを置くだけみたいなことだと、梶野公園のような「遊具がないからこその意味や価値を、みんなで積極的に見出していく」というような現在の状況は訪れていないと思うので、そういう地域に既にある良い事例における知見を、地域でしっかり蓄積していけると良いはずですよね。

小：3,000平米以上の敷地の開発の場合、事業者が、その面積の6％以上の公園などをつくることが義務付けられていたんですけど、事業者側もより良いものにしていくために、地域と向き合ってコンセプトをしっかり考えてくれたりもしているんです。

熊：そっか、なるほど。

小：事業者側も、その場所の価値をあげていくことのミッションがあるので、行政側が変にその可能性を狭めてしまうよりも、パッケージにあるものを安易に置いて終わりじゃないという方向性に上手にナビゲーションをしていきながら、意味のある提案を受け止めていけたら良いなとは思いました。

熊：なるほど。良い仕事ができるように、お互いに励まし合うような関係性を育んでいきたいです。

公園の潜在的な可能性は、ネットワークの中で発揮される

熊：環境楽習館からも近い、三楽公園も今回の整備対象なわけですけど、その整備プランなどを見て、どう思われました？

阿：自分が小さい頃に学校をサボっていたので、あ、いいな、こんな公園があったらって。

熊：え、サボって、どこにいってたんですか？

阿：よく考えたら、公園だなって。

熊：いつくらいの頃ですか？

阿：中学生。個人個人はいいんですよ。集団になると何か得体の知れないでかい意識がバーンって、「無理！」みたいな。おばあちゃんが近所に住んでたので、家に確認しに来るんですよ、「ちゃんと行ったか」って。だから、息を潜めるか、公園に行ってウロウロする。

熊：そのウロウロ時間も濃厚ですね。

阿：「みんなよくやってて偉いわねっ」て思いながら、「ちゃんとやるって大変」って。もっとシリアスだったと思うんですけど、そのときはね。

熊：今、振り返っているから言えること。

阿：そうそう。でも、なんか学校はあんまり行ってなかったんですけど、年取って、全然違うところでそんときの同級生とかとばったり再会して、趣味でやっているケータリングとかも毎回手伝ってもらったりして、人生のボーナスタイムが来た、みたいになりました。

熊：良いですね。まあ、趣味のケータリングでなかなかゴールドマン・サックスとかに出向く機会もないと思うんで、趣味とは何かということもありますけど。それで言うと、障害がある子どもたちの保護者の方々が、みんなおっしゃるのが、外食に行けないということだったんですね。それで思っちゃったんですけど、インクルーシブ化を検討している三楽公園の隣には、立派な家屋の集会所がありますけど、つまり、公園で遊んだあと、その集会所に阿部さんのケータリングを頼んで食事をするという、なんか幸せな地元体験ができるんじゃないかと。

阿：全然やりますけど。

熊：その集会所って、トイレも誰でもトイレになっているし、建物も老舗旅館みたいな風情があるし、障子をあけると日本庭園の眺めが広がるという、なんと言うか、惨めな気持ちにもならないし、貸し切れるから大きな声が出ても大丈夫だし、大広間もあるから横にもなれる、医療的ケアをするスペースもつくれる、みたいな。阿部さんのその趣味のケータリングも含めて、地元で発揮されるべき資源というか可能性というものが、まだまだある気がするんですよね。お金をたくさん掛ける整備ではなくって、そういう地域資源を改めて見直して紐づけていくようなことができればって。

小：集会所が使えるということを知らない人も多いんですよね。

熊：ですよね。集会所って、営利活動はNGなんでしたっけ？

小：どう整理するかですね、可能性がゼロではないと思います。

熊：今ちょっと考えているのが、公共性とか公益性というものを、誰がどのように担保し続けられるんだろうかっていうことで、例えば、公益的な場所でお金を稼いじゃいけませんってなると、その公益的な場所で公益的な活動をする人は、公的に助成金とかを獲得した人やお金に余裕がある人だけになるなとは思ったんです。例えば、阿部さんみたいに、お金だけが欲しいわけじゃないけど、とはいえやっぱり生活もしていかなきゃいけない、けども、なんか自分の腹落ちしないことはやりたくないっていうか、やれないという人たちが集まり、個人がその個人の信念のまま、公益性を担保するってことっていうのは、あり得る状況だと思っているんですね。ただ、制度や社会習慣がそこに追いついていない。それは、公園にグローバルチェーンのカフェを誘致してバンザイ！とかじゃない意味での、民間と行政のより良い連携を考える議論にはなってくるだろうなと。環境楽習館に、阿部さんのような人

が居てくれているということの意味や価値を捉えた時に、同じようにして、公園にそのような方が居続けられる仕組みはいかにして可能か？、という話にはなってくる気もしています。

阿：なんか自己犠牲になりすぎない設計が前提としてあるっていうのが、やる側も安心できるので。なんか「うわー大変」っていうのと、「楽しい！」っていうのの塩梅がね、ちゃんと自分の中で帳尻が合うようにできて、それをちゃんと公的なところがいいよって言ってくれるってすごいデカくて。やっぱ、個人でやってると続かないけど、なんかバックアップがあるので、本当に安心してできるなと思います。

熊：うん、それと、バックアップって、もちろん資金的なものもありつつ、とはいえその資金になるもの、つまり税金の限界もあるじゃないですか。

阿：そうですね。

熊：もちろん、税という形で、社会の中で富の再配分をして、あるところから必要なところへ資金を流していくことは必要だと思っていて、最近思うのは、それと同時に「これは意味や意義がある」っていうことを公的に見出していくということの必要性なんですね。資金的な根拠がないと頑張りづらいですけど、同時に、もちろん個々の信念でやっていることだとしても「お前の活動は意味がない」となっても頑張れない。

阿：なるほど。

熊：「まだ珍しい事例かもしれないけど、これにはこういう意味や意義があるよね」って語る力っていうものを、地域社会が失いつつあると思っていて、なのでplay hereでは、こうやってやたらと語り合うということをしている気がします。地域社会でボキャブラリーをみんなで育んでいくということをしないとなって。ヒアリングの聞き手でありながら、阿部さんに触発されてたくさん話しをして、それを聞いてもらっているという。

阿：全然、良いですよ。

熊：ありがとうございます。

言葉の積み重ねで、人もプロジェクトもできあがる

熊：机の上に置いてある書籍が、ずっと、気になっていたんですけども。

阿：なんか、なんとなく今回のヒアリングにつながるかもしれないと思って。キーワードを仕入れるために、本を買うことが多くて、でも5ページぐらい読んで、はい次みたいな読み方してて、多分普通に読書する人からするとお前は邪道だなみたいな感じなんですけど、たまにピンとくる部分があったりするので。

熊：それこそボキャブラリーを豊かにしていく行為ですよね。なんとなく、表紙を味わうだけでも、ぐっとくるものがありますね。例えば、「ペアレントネーション〜親と保護者だけに子育てを押し付けない社会の作り方」もまさにですし。

阿：うちは子育てしたかった側なんですけどできないから、代わりにできることがあったらなんでもやるよって思っているわけです。

熊：まさにみんなで子育てできる社会が望ましいなとは思います。次が「遊びと利他」で、これは帯も読み上げたくなるもので「コスパと管理から自由になるために、公園と遊具から考える！」っていう。

阿：これは、もう、みんなに配布したいなと思って。ひと目見て、わっ、これ、我々の本だ！と思って。

熊：コスパが良い、管理がしやすいというのが、良い公園の定義ではないというね。3冊目が、「アルベール・カミュ　生きることへの愛」。

阿：本の裏側に書いてある言葉が良くて。

熊：「それぞれの世代はおそらく世界を作り直すことが自分たちの義務であると信じています。しかし、私の世代は世界を作り直すことはあるまいと知っています。ただ、その任務はもっと大きなものでしょう。それは世界が崩壊するのを防ぐことなのです」、と。

阿：それを読んで、これは買わなきゃって思ったんですよ。変えれなくても、防ぐ程度の防波堤にはなろうと思って。

熊：なるほど。変えられたかどうかだけで考えないモノサシは確かに必要な気がしています。

阿：みんなでせき止めましょ。

熊：防波堤という言葉を胸に置くだけで、またインスピレーションが広がりますね。

阿：いろんな言葉の積み重ねで人格形成されると思ってるんで、インストール、インストールって。

熊：一人の人格もそうですし、プロジェクトも、そういった言葉の積み重ねで出来上がっていくと思います。防波堤で言ったら、公園がそうであるというのもありますよね。

阿：自分が中学の時に公園がなかったら、多分、今、生きてないかも。それにも増して、今って、本当にお金を払わないとどこにも居られないじゃないですか。駅前なんか特にそうだし、だからやっぱ、何もしなくていい場所っていうのは本当に誰にとっても大事だなって思って。ちょっと外出ると、何かにつけてただ居るだけでお金がかかるから本当に嫌だな思って、みんな「モモ」読んでよって。

熊：ミヒャエル・エンデのね。まさに「コスパと管理」が強まっていくことの様子が童話的に描かれていますよね。コスパと管理を求めれば求めるほどに、大切なものを気が付かないうちに失っているという。

阿：それが今じゃ童話じゃなくて、現実の世界で。なんだろう、お金がないと存在意義がない客体として扱われてる腹立たしさみたいな。なんか出掛ける度に、「ここに居ていいよ」という承認を、現金と交換している感じがあって、それはある意味買い物の楽しさでもあるんですけど、なんかやっぱり、お金がないときだったらしんど

い。子どもって基本的にはそもそもそこにアクセスできないので、こういう「何してもいいし、何もしなくてもいいし、お金もあれば、ちょっとおやつぐらいは買えるけど、でも必要以上は別にいいよ」みたいな場所であり続けるのは大事だよなって。大人は多少選べますけど、子どもは選べないから本当に肝に銘じておこうって。だから、今、そこで吊り下げている干し柿だって、美味しいかわかんないけど、「そこで取れた柿だし、タダで食べていいよ」って。

熊：貨幣経済と自給自足を行き来して。

阿：春先には、そこに生えているフキを茹でで子どもたちと食べてます。金柑も実っているから、甘露煮でもつくろうかなって。

熊：袋菓子よりも、断然、健康的ですし、嬉しい。

阿：なんかまとまりのない話でしたけど、大丈夫ですかね。

熊：いや、子どもたちを迎え入れ続けていくという営みの大切さをずっと感じていました。それが、公園にも必要だよなとも。

阿：ねえ。

倉石篤さん

地域の植栽から考える、これからのインフラ

取材日：2024年11月21日

緑を大切にしてきた街の樹はいろんな形をしている

倉：小金井は植物が大きくて、緑が濃いんですよ。

小：「緑が濃い」って言うんですね。

熊：え、それって、いろんな地域の植栽管理の仕事をされているから感じとることができることですよね。他の街と比べても、小金井は緑が多いということですか？

倉：多いし、植物が大きいんですよ。

熊：へー。

倉：他の地域だと、もともと樹が生えていたような場所を造成して土地をならしてから、建物をつくる開発をしているから、樹が大きくないし、道路や敷地のへりなどの境目に樹が生えていないんですよ。多分、小金井は、緑を

残したまま、隙間隙間で開発をされてきたんじゃないかな。だから、敷地の境界に生えている大きな樹がすごいたくさんあるんですよ。

熊：えー、言われてみれば、そんな気もしてきます。その当時の、この土地の人たちの心構えが伺い知れて非常に興味深いです。

倉：広場の中に大きい木が1本だけある広場が、結構あるじゃないですか。

小：既存の樹木を意識的に残して、周りを開発しているんですよね。

熊：武蔵小金井駅前の広場に、立派なメタセコイヤが残されていますけど、維持管理という側面では大変だと思いますが、それを地域のプライドだったり、暮らしがいというものに繋げていくようなことができたらな、とは感じています。大体、そもそも、この辺りは、武蔵野の森だったわけですもんね。

倉：そうですよね。それが切り拓かれて出来ている街ですよね。都市部って全部開発した後に、緑を増やさなきゃいけないということで、改めて植えたところが多いんですよね。だから、一回、植物を無くした後に、また植えていることになる。

熊：あー、面白いですね。一方で、この地域では、根こそぎ植物を無くすということではなく、むしろ人間が隙間を縫うように開発をしていたという。

倉：都市部では、武蔵野の森って言って、逆にこっちの森を真似たものをそのまま移設するっていうのがちょっと昔から流行ってて。植木畑で育った樹って、まっすぐ生えて同じ形になっていくんですけど、こっちって、自然の形が残ってて、斜めに生えていたり、曲がっていたり、片側だけに枝が残っていたりする。だから、そういう風景をつくりたいっていう声も多いんですね。

熊：うわー、なるほど、非常に重要な示唆がそこにあるような気がします。

地元の公園の管理を誰がどうしていくべきか？という問い

熊：その土地の緑のことをどう考えていくか？ということは、やっぱりかなり深い話になってくるなと思いました。で、植物も生き物ですから当然ケアが必要なわけですけど、誰がそのケアを担うか？というのも同じように深い話ではあると思っているんですね。現在の社会状況で言うと、公園の指定管理者制度がどんどん広がってきているわけですよね。ここ小金井市でも、まさにスゴい小さな公園もひっくるめて、全部の公園を一元的に民間事業者が管理する形を取り始めたところだと思います。そこに、倉石さんが所属されている日比谷アメニスさんが担い手としていてくれているという。一元管理ということで、効率化や合理化が計れるよねっていうことで、予算が潤沢にあるわけではない。効率化や合理化を進めていきながら、同時に、地域らしさを磨いたり、地元地域との連携を深めていく。そういうことがどこでも求められ始めてはいますが、言うは易しというもので、そこの知見を社会的に醸成していく必要があるんだろうな、と感じているんです。日比谷アメニスさんが、小金井市全域の公園の指定管理を始めたのは、ここ半年くらいですよね？

倉：そうですね。

熊：管理している公園の数で言うと、どのくらいなんでしたっけ？

倉：今、221ですね。

熊：うわー、かなりの規模ですね。たまに報道もされていますが、倒木や枝の落下による事故もあるにはありますから、そういった事故防止も仕事の範疇に入ってくるわけですもんね。

倉：はい、基本はもう見回りですよね。そして、掃除。

熊：221もあったら、そういった基本的なメンテナンスだけで、かなり時間がかかりますよね。

倉：行政だけでやっていたら、こまめに回ることもなかなか難しいわけですから、もう見て回るのが主みたいにはなりますね。倒れたり落ちてきそうな樹や枝がないか、公園にゴミが落ちてないか、フェンスが倒れそうじゃないかとか、挙げていくとたくさんあるんですけど。

熊：そうですよね。ここ数年「グリーンインフラ」と言う言葉が出てきているじゃないですか。インフラというと、社会の基盤として当然の如くあるもんだから、普段はあまり感謝されないんだけど、なにかトラブルがあると怒られるという宿命を背負っているわけですけど、蛇口をひねれば水が出てくるという水道インフラというのも、日々のメンテナンスの賜物なわけですよね。電気やガスなどのエネルギーや道路もそうだと思うんですよ。そして、グリーンインフラと言うように、地域の公園や植物のメンテナンスやケアも同じようなことだよなとは思うんです。

倉：うん、うん。

挨拶が持つ、インフラの性質

熊：で、ここからplay hereの話に展開していくんですけど、行政の仕事というのは、基本的にインフラ的な領域を豊かにしていくようなことであるとは考えているんですね。で、じゃあ、インフラって何か？って言うと、「モノ」が不足していた時代は、住宅や電気や水道などを含めたモノが行き届くようなことが一つの公共的なインフラ事業だったと思うんですけど、それはそれでありつつも、何かに参加する「機会」だったり、人と人との繋がりという「関係」ということが、公共的なインフラ事業に求められて久しいとは思うんですね。

倉：はい、はい。

熊：「公園を、障害のあるなしにも関わらず誰もが自由に遊べる場所にもっとしていきたい」というこのプロジェクトの話に置き換えると、いわゆるインクルーシブ遊具という「モノ」を設置して終わりではなく、地域社会に参加する「機会」だったり、いろんな人との「関係」というところも豊かにしていかないといけない。

倉：そうですね。

熊：で、ですね、倉石さんたちに、「じゃあ、ということで新しくインクルーシブ社会の実現に向けたイベントなどの新しい業務をバンバン実施してください」というオーダーを投げるのも、キツいはずなんです。ただ、その221の公園の見回りをしている時に、障害のある方々を見かけたら気にかけて欲しい。とはいえ、障害と一口に言っても、色々なコンディションもありますし、一目見て分かるということだけでもないですし、そもそも、挨拶をするとかしないとかに、障害の有無は関係ないので、とにかく、挨拶やちょっとした会話が生まれている状況がスタートでもあるし、同時に、ある意味目指すべきゴールだなとも感じるんですね。まずは、そういう「インフラとしての挨拶」みたいなところが担保されるだけでも、結構、状況が変わるんではないかと思うんです。と言うのも、当事者の方々が口を揃えておっしゃるのが、公園が「自分たちが居て良いと思えない」ということなんです。「声をかけてもらえるだけで、結構行きやすくなる」とも。「で、具体的にどうしたら良いの？」というところは、その人間関係の基盤さえあれば、あとはまあ、みんなで考えたり、知見を深めていけば良いなって。どうですかねえ。新規業務として捉えるよりも、基礎業務の延長線上で捉えていけないか？という話なんですが。

倉：それは全然大丈夫ですね。もともと、我々もスタッフには挨拶をするように言ってますし、実際、やっぱりユニフォーム着て地域を回っていると、いろんな話を聞くことになります。それに、「ちょっと、これが気になる」みたいなコミュニケーションがとれていれば、大きなアクシデントや、それこそ苦情にまで発展する前に解決することができるんですよね。公園の見回りに行くと全然帰ってこれない、顔が知られているスタッフもいます。

熊：おー。

公園を見回りしてくれているという営みが持つ、インフラの性質

熊：社員の労働力や時間をどこにどのように当てるのかというのは、業務管理的なお立場からするといろいろとあろうかと思うんですが、その「雑談も含めて話に花が咲いて、外回りから帰ってこれない」というのは、好ましいし、可能性がある状況だなと感じます。「公民館のしあさって」という地域の自治や社会教育のあり方を探求する書籍を編集執筆したんですけど、そのときの取材で体感したんですが、活躍されている公民館職員と一緒に街を歩くと、あっちこっちで話しかけられて、数百メートル進むだけでも、ものすごい時間がかかる。でも、そういう立ち話や井戸端会議のような機会こそが重要であろうという気もしていました。

倉：話ができる人がいるだけでも、だいぶ助かるとは思うので、多分それと同じですよね、きっと。

熊：ですね。もっと言うと「話に花が咲いた雑談」を情報源としてしっかり吸い上げると言うか受け止めて、そこから何かを見出して、実際的なアクションにつなげるというサイクルを回していくということが、その両輪として重要なはずなんですよね。それができていれば、「地域の人と雑談も含めた会話をする」ということが、仕事の一環として位置づけしやすくなる。逆に考えると、そのサイクルが回らないと、極端な話、それが「仕事をさぼっている」ということになりかねない。好循環の芽が既に生まれているんであれば、それを広げて深めていければ良いだけと言っちゃえるきもしてます。やっぱり「地域住民の話を聞こう」という公的な機会を設定することも大切ではあるんですが、偶然というか非公式的な、公園や路上での会話からわかることは結構多い気がするんですよね。となると、もちろん植栽管理という実業務を邪魔しすぎないという常識を踏まえつつ、「ジャンバーとか着て作業をしているなかでも話しかけたりしてもOK」というスタンスをうまいこと情報発信していけば良いんだなという気になってくるんですよね。

倉：市内を回ってる中でどうしても何度も顔を合わせてるから、だんだん何か話すようになったりとかもしますしね。

熊：あー、そういうことだと思います。そういう顔見知りが生まれる習慣が地域にぽこぽこ生まれる状況が理想だな、と。

倉：そういう方から、逆にいろいろと教えて頂くことがあるんですよね。

熊：素敵です。いわゆる「市民参加型のグリーンインフラの維持や発展」みたいな話っていうのは、今の社会的にも、そういう方向でことは動いてるし、議論が活発化しつつあるように思います。なので、あえて大げさに言っちゃえば、「地域のグリーンや、公民連携に関する最先端の挑戦を、小金井でしている」と捉えちゃったほうが、見通しがつくこともあるよなと感じています。

地域の共有地を共につくるということ

熊：「市民参加型のグリーンインフラの維持や発展」という話を、具体的に展開するんですが、栗山公園の池が、今、汲み取りのポンプが故障したということもあり、枯れている面積が多い上に、安全管理のために立入禁止のガムテープが張り巡らされていて、見た目としては非常にさみしい感じになっているんです。で、一方で、play hereの話にも接続するんですが、当事者の方々にヒアリングやアンケートをしたところ、「水遊びをしたい」という声が非常に多い。ということもあり、当初、新しく水遊び場の整備を検討したんですが、数千万のコストがかかる上に、その維持管理費もかなり発生するということがわかり、断念した経緯があります。そうした時に、既にある池をしっかりとメンテナンスして、障害のある方も親しめるような水辺空間にしていくことが、そもそものこの公園の魅力を維持向上させていくことなんじゃないかとも感じたんです。現状は、雨水が溜まったりして、たまたま鴨が居着いてくれたというものではあるんですが、もう少し動植物にとって居心地の良い状況がつくれれば、それこそトンボなんかが育つコンディションに持っていければ、夏の蚊対策にもなるであろうという見込みもあります。あそこは、夏は蚊が結構スゴイんです。で、そのビオトープ化というプロセスそのものを、障害がある方々、近隣の方々、play hereで開催したイベント「栗山公園のんびりデー」にも来てくれた不登校の中学生も含めて、みんなで取り組めたら楽しいだろうなって。で、ですね、「市民参加型のグリーンインフラの維持や発展」ならぬ、「市民参加型のビオトープづくり」なるものを、その立ち上げからメンテナンスまで、その全部を、「小金井市の公園を網羅的に管理されているんだから、日比谷アメニスさんお願いします」とするのも、無理があるじゃないですか。とはいえ、市民側だけだと不安もある。それに、なにか市内に面的に広げていく意義や意味を見出だせたらそうすべきでもある。となると、市民側と日比谷アメニスさんという民間と小金井市という行政が、どんな形で手を組めたら良いんだろう？って。お互いのことを、知らぬ存ぜぬで、バラバラとしてしまうのも良くないというか、もったいないじゃないですか。すみません、一息でたくさん喋っちゃったんですが、どうですかね。

倉：いえ、ビオトープに関わらず、どなたか熱い想いを持ってリーダーシップをとってくださる方がいればなんとかなるだろうって。ただ、そういった方を探すのが我々は外から来たから難しくて、かといって自分たちで育てるのも難しくて。指定管理だと期間限定なので、短いと5年で終わってしまう。なので、我々で始めてしまうというよりは、市民の中からそういう声が上がって、どなたか続けられる熱い想いを持った方がいれば、サポートするのは全然やぶさかではないです。

熊：おー、心強い。今日の議論の本質は多分そこだと思っていて、地域側だけだとできないことが、もちろんある。そこを日比谷アメニスさんが担保する。同時に、日比谷アメニスさんだけではできないことがあるなら、それを地域側が担保する。っていう、健康な関係をどうやったら作れるのか？というのを考えているんですね。「環境楽習館」で働く阿部さんと、話してきたんですけど、まさに地域で活動をしていた阿部さんを、もちろんそれだけが理由ではないかと思いますが、日比谷アメニスさんが雇い入れることで、館長というポジションを得て、地域のネットワークを醸成しながら素敵に動けている。まさに理想的なあり方だなとは感じるんですね。で、そういう方を、地域側のコーディネーションが無い状態で、日比谷アメニスさんのような民間が地元で発掘していくのは結構大変だとは思うんですよね。

倉：うん、外から来た我々には到底見つけられないですね。

熊：そうですよね。外から来た人に見つけなさいっていうふうな仕様にするのもちょっときつい気がしてるんですよ。だからまあ、持ちつ持たれつで、「共に、良い地域にしていこうね」ということを目指していくためには、どんな仕組みが望ましいか？ということが問われている状況ではあるので、環境楽習館も含めて、地域内外の事例を参考にしつつ、play hereでその実績を重ねていければと考えています。阿部さんのケースは、ほんと大切にすべきだし、注目すべきことだと思います。

倉：うちも結構手広く指定管理をやらせていただいてるんですけども、阿部みたいな、あそこまで地域に密着した人材は会社で多分初めてじゃないかな。

熊：指定管理にまつわる予算というものに上限はあるし、そもそも、その財源が潤沢ではないので、そこはどうしても制度上、無理がある気がするんですよね。一方で、副業的に地域で少しでも稼げるような道を担保していくという考え方もあると思うんですね。公園にグローバルチェーンのカフェを誘致して「稼げる公園です」とすると、それが地域経済を活性化しているのか？という疑念が出てくるんですが、地域のいろんな人のスモールビジネスを後押ししていくことには、結構可能性があるはず、とは思うんです。具体的に言うと、阿部さんであれば、ケータリングなどの食の仕事を個人的にもされているじゃないですか。例えば、休館日の環境楽習館で、貸し切りパーティができるようにしてあげるというスモールビジネスのメニューが立ち上がることで、阿部さんの雇用条件にエクストラが生じる、みたいなことだって議論できる気がするんですよね。実際に、play hereでも、当事者の方々から「外食に行きたくても行けない」という声が多く寄せられています。ニーズと、それを叶えることができる人と場所のマッチングの精度を、地域で上げていくことはもっとできるような気もしています。

倉：なるほど。今までは、こちらがお願いした業務をやってもらうということが、働き方だったわけですけど、阿部はいろんなことができるので、お願いした以上のことができるし、お願いをしていること以外のこともやるしっていうところを、どう整理していくのが良いのかっていうところは、課題といえば課題ですね。

熊：阿部さんがアクセルを踏める状況というのは、地域としては望ましいわけですが、それが阿部さん個人と、日比谷アメニスさんという会社と、管轄する行政それぞれのメリットとして受け止められるような仕組みとはどのようなものか？ということは、かなり重要な議論な気がしています。良いことがたくさん起こりつつある現場だからこそ、そのあたりの環境や仕組みの構築ということは同時に検討を進めていくべきだろうなって。そのあたりの議論、引き続きまたさせて頂いても良いでしょうか。

倉：もちろん。

KOGANEI
PARKS

星郁子さん

それぞれの経験が持ち寄られる地域を目指して

取材日：2024年12月9日

なにが叶えば、話を聞けたと言えるのか

星：うちの息子は支援学校の小学2年生なんですけれども、そこのPTA会員向けにplay hereのチラシが配られて、一気には読めなかったんですけど、インタビュー記事もじっくり読んでたんですね。「ただインクルーシブ公園をつくればオッケー」みたいな感じではないところに共感して、こういう活動もあるんだって凄く感動して。

熊：嬉しいです。

星：周りのお母さんも読んでて、「分かり過ぎて、涙が出て読み進められない」という方もいらっしゃったんですね。そういう感動の熱が冷めやらないうちに、インタビュー記事にも登場されている冨永さんが、小金井市役所の小林さんを連れてきてくれて。

熊：おお。

星：冨永さんは学校の先輩ママででもあるので、この1年、よく顔を合わせるご縁があって、その冨永さんが「低学年のお母さんって、小学校に入学したからやれやれって思っている頃だと思うけど、今のうちに将来のことを見据えたり、学年や地域に関係なくネットワークを広げておくといいと思うよ」っておっしゃっていたんですよ。

熊：息をつく間もなくって感じですが、リアルです。

星：冨永さんは海外で子育てをされて、そこでご自身でコミュニティをつくってて、それによって救われたお母さんがいるというご経験があるので、そういうことをここでもやりましょうって。

熊：おお。

星：でも、別に大げさに「来て！来て！」ってやるよりも、自分たちの知っている範囲のお母さんに声をかけて、ちょっと集まって雑談ができればいいよねっていう会なんですね。そこで思ったのは、そういう場があって普段から困りごとなどを取りまとめて、何かの機会があったときに、「わたしたちは、こういうふうに思ってるんです」ってすぐ出せるとか、そういうことができたらどうなのかなってことなんですね。

熊：おお。長くなっちゃうかもしれないんですけど、ここ最近考えていたこととシンクロしているので、ちょっとお話させてください。まず、えっと、何か困り事があるとして、それを解決しようとした場合に、その困っている当事者の方の存在に意識を向けないと、その解決が叶わないというのは、ごく当然なことだと思うんですね。

星：はい。

熊：でも、その当然のことが長らく無視されてきた。だからこそ、2006年に国連で採択された「障害者の権利に関する条約」のキャッチフレーズが、「私たちのことを私たち抜きで決めないで（Nothing About us without us）」だったわけですし、そのフレーズであることの意味や意義が非常にあったんだろうなと感じています。そして、その重要性は今でも全く色褪せてないとも。

星：ええ。

熊：で、そうした時に、重要だなと思うのは、「本音のようなものが、そう簡単に語られるとは思ってはいけない」ということだと感じているんですね。「それでは、今から本音トークをしましょう」って、いきなり言われても、胸の内を語るのは結構つらいじゃないですか。それと、困りごとの多くが、「本人がその困りごとの渦中にいるということを認識しづらい」という側面も考えておいたほうが良いとも思っています。

星：はい。

熊：何が言いたいかといいますと、だからこそ、今おっしゃったような、日常的な井戸端会議のような雑談の機会は非常に大切なんだろうな、と強く思うんです。行政施策である今回のプロジェクトを推進する立場から言えば、アンケートを取るだけだったり、短時間のヒアリングだけだったりすると、こぼれ落ちることがたくさんあるって感じているんですね。もっと言うと、「意見や話を聞きました」という証拠残しのためにだけ使われる参加型ワークショップのようなものはしちゃいけないとも考えているんです。ただ、じゃあ、どうしたら良いんだろうか？っ

ていうのは、絶対的な正解はないかと思うんですが、地域の日常的な会話を育んでいくということと、そこと行政施策をつなげていくことが、かなり重要だろうなという感覚があります。なので、まさにまさにです。

「役所仕事」が褒め言葉になる日は来るのか

熊：「play hereの取り組みに感動した」ということをおっしゃって頂いて、励みになるし、こちらが感動するんですが、具体的にどういうポイントにグッと来たというのはあるんでしょうか？

星：やっぱり、「The行政」みたいな感じではないところ。「公園つくって終わりです」という役所仕事じゃないところ。そういうところですかね。

熊：それは、これは本気なんだなって感じることができたということですか？

星：そうですね。

熊：本気だからこそ、話を聞く姿勢があるんだなとも感じ取れて、実情を伝えたくもなるという。

星：ええ。

熊：「役所仕事」という言葉って、褒め言葉としてはあまり使われないですよね。それって、「仕事におけるプロジェクトや、言っちゃえば自分自身というものを変える気がない」というニュアンスだよなって思っているんですね。

星：そう、結論や答えありき。

熊：小金井市役所の小林さんとも良く話をしているんですが、結論ありきで、プロジェクトに変更を加えるつもりがないのに、当事者の方々の話を伺うのは失礼だよねって。なので、こうやってヒアリングを重ねながら、結構ダイナミックにプロジェクトのあり方を軌道修正したり、検証項目を増やしたりしていますし、自分たち自身が深まっている感覚にもなっています。

星：そういうことも、インビュー記事で書かれてましたよね。それも良いなって思っていました。

熊：ああ、ありがとうございます。

星：それこそ、いろんなママの声とかを取りまとめてメールしようかと思ったぐらいです。

熊：めっちゃ嬉しいです。というのも、やっぱりジレンマみたいなのがあって、こうやって、ゆっくりじっくりお話をお聞きしたり議論したりするという機会を増やしていきたいんですが、それはそれで使える時間の限界はあるわけですね。で、play hereの仕事は果たしてどういう仕事なのか？ということを考えると、当事者や地域の方々の代弁をしたり代理をすることだとは思っているんです。公共的な仕事の本質はそこだよな、と。となると、良い仕事ができたということの尺度は、ちゃんと代弁ができていたり、代理ができているか？また、それ以上のことができたか？ということになるわけですけど、ただそれはそもそも、めちゃくちゃ難しいことでもあるはずなんで

す。お前に代弁して欲しくないしみたいな声だって当然あるでしょうし。とはいえと言うか、だからこそ、そうやって、いろんなところから声が届く状況が訪れるというのは、とても有り難いし必要なことだと感じています。

星：そういうことをしたいなって、勝手に思っていました。

熊：めっちゃ嬉しいです。星さんの後ろ側に何人もの保護者の方や子どもたちがいるということになるじゃないですか。本人じゃない限り、完全な代理や代弁は不可能ではあるんですが、少なくとも、そういうことを目指して考えていかないと、公共性というものは担保されないと思うんですよね。その上で、予算の上限はあるわけですから、いろんな判断基準やそのプロセスもできるだけ全て公開して、やれることや、やれないこともしっかり共有していく。なんかそういうこととして、play hereを進めたかったんですよね。そうでもしないと、代理や代弁をして良いという存在になれないと思うんですよね。

簡単に訪れる絶望

星：個人的な話なんですけど。

熊：個人的な話の積み重ねが、社会的な話になるので、ご無理ない範囲でお聞きしたいです。

星：まだ自分の子どもの障害っていうことにピンときてなかったり、そもそもこれって障害なの？みたいな、あやふやな時期に、幼稚園のプレに行った時に、一番泣きそうになって。

熊：泣きそうになる。

星：自分の子どもと、他の子どもとの違いが凄すぎて、このぐらいの年の子って、こんなにできるんだと思って。「お母さんと一緒にお絵かきとかやってみましょう」ってなると、みんなワーッとできるわけですよね。でも、うちの息子はもう全然違うところに行って、椅子の下に潜ったり、もう、ぐるぐるぐるぐるってなったり。その時が初めて。

熊：初めて。

星：世に言う定型発達の子と自分の子の違いっていうのを初めて知って、もうちょっとその場から居なくなりたいっていう。ただ、児童発達支援センターに行ってその話をしたら「無理しなくていいから」って言われて、すごく安堵できたんですね。なので、今、通っている支援学校でも、幼稚園とか保育園から来ましたっていう人と、療育園から来ましたって人は、やっぱり違ってくるんですね。

熊：療育園。

星：発達支援のための専門家がいるところですね。だから、そういう先生方だったり、お母さん同士だったりのネットワークや情報交換があるところからの小学校進学なので、「もう、わたし無理」みたいな感じの方は少なめなんです。でもやっぱり、幼稚園とか保育園から来たお母さんというのは...。

熊：ギリギリであると。

星：例えばお遊戯会のようなものがあると、どうしたって右へ倣えでみんな同じふうにやらなきゃいけないから、その子も頑張ってやってるんだけれども、一生懸命やってても他の子と違ってくる。これも、直接お母さんから聞いた話ですけども、運動会にしても、もう一番最後でチョロチョロチョロチョロと頑張っている我が子に対して「頑張れ頑張れ」って応援されるのも、それが辛いって。もう何も言わないでって。うちの子だけがなんかもう晒されて、もうほっといてくれ、もう頑張ってるからって。どうしてもそうなるって。私もそういうのがあったし、幼稚園や保育園に通わせていた方はさらに押しつぶされそうな想いをしながらだったりするんですよね。ママさんで、なんかもう疲れすぎちゃって、自転車の後ろに子どもを乗せながら、このままトラックとかにぶつかった方が楽なんじゃないかってなっていた方もいて。そのママはすごくユニークな方で、そのときのことを「棺桶時代」って。いやあ、あのときは方っぽの足を突っ込んでたねって。

熊：本当に、今でこそ、やっと言えることな気もします。

星：そのときは、もう将来は真っ暗じゃんとしか思えない。

熊：光が見えない絶望というものが、気を張らないと簡単に訪れるけど、一人で気を張り続けることは、限りなく不可能。

星：ですね。年を重ねればこういうときってこうしたらいいよねっていう、その知識が、親も少なからずついてくるので、子どもがワーッて癇癪になっても、こうしたらいいんじゃないかとか、知恵があるんですけど、やっぱり小さければ小さいほど情報もないし、経験もないし、ネットワークもない。だから本当に無理みたいな感じになっちゃうんじゃないかなって。

会話を失わないために、相互理解の糸口を失わないために

熊：雑な質問になっちゃうんですが、どうしたら良いんですかね。絶望がもの凄い身近にある時に、せめてもの糸口みたいなことが少しでも見つかればなって。

星：やっぱりもうね、会話が大切だとすごく思ってて。

熊：会話。

星：同じ境遇のママさんとかと話してるからこその、あるある話ができる会話。これが普通の幼稚園に行ってるママさんだと「？」になっちゃうんですよね。同じ境遇のママさんだと「そうだよね、そうだよね。そんなことできないよね、そのうちできるよね」なんだけど、そうじゃないと「そんなこともできないの？」みたいになっちゃう。言われたことはないですけど…。

熊：話題を出す前に、そういうリアクションが返される未来が見えて、話を持ち出すことが不可能になる、と。言われたことがないにしても、似たような経験が蓄積されているわけですよね。

星：まあ、そういうことに一つずつ傷ついてきているんですよね。仕方がないっちゃ仕方がないんですけども。

熊：うーん。

星：とはいえ、そういう深い悲しみにあるお母さんに対して、同じ境遇の私が「もう大丈夫だよ」って言っても、なんかもう、目が上の空だったり...。

熊：そういう言葉を受け取るコンディションにないというか、気持ちを分かち合う機会がなさ過ぎると、分かち合えると思うことができないというか。

星：うん、同じ環境があればみんながハッピーかと言われると、そうとも言い切れないんですけど、でも、やっぱり発散するところ、聞いてくれるところ、教えてくれるところがないと余計に悪い方向にいっちゃいがちな感じがしますから、できるだけ早くそういう機会があればなって。これは、今、小学2年生の子のお母さんに聞いた話なんですけど、子どもが外で乱れちゃって、こう、よしよしってなだめて抱っことかしていると、わざと聞こえるように「あら、あんなに大きい子が抱っこしてもらっちゃって」って、全然見ず知らずの人に嫌味を言われたりとか。

熊：それも、心が削られますね。

星：できるだけ溜め込まないように機会をつくっておかないとですよね。目が見えない方が困っている時に、支援をしようとしたとしても、手や服を急に引っ張ると、逆に不安にさせてしまうというのがあるじゃないですか。一緒に歩くという感じで、肘や肩を持ってもらう方が良いって。

熊：そうですね。足並みを揃える方が安心して歩ける。

星：例えばうちの子も興奮しちゃうとワーッってなっちゃうので、おかしな子って見られちゃうんですけども、同じ境遇だったり、理解があるお母さんから見ると、「あらあら、楽しいのね」とか「そうだよね、そうだよね、頑張ったよね」とかってなる。そういう、ちょっとわかってもらえる機会があったらいいなっていうふうに思ったんです。

熊：インクルーシブ公園の話をするならば、そういう理解が浸透しない限り、やっぱり公園に行くということのハードルが解消されてないことになるんだろうなと考えています。だから、先ほどの目の不自由な方が困っていそうな時の声の掛け方が少しずつ広まっているのと同じように、そういった理解が、当たり前になっていく必要があるはずなんですよね。ちょっと深堀りしていく話になっちゃうんですが、同じ「頑張る」という言葉でも、受け取り方が変わってくるということは結構重要な気がしています。先ほどの、保育園の運動会とかで障害がある我が子が「頑張れ、頑張れ」と周りから言われる時のしんどさ。一方で、街なかで、我が子がパニックっぽくなった時に、「頑張ったね」と言われることの救い。その違いはなんなんだろう？って。と、今、喋りながら気がついたんですが、後者は過去形だから、常に既に、頑張っているということが前提になっているんですね。で、実際にそうしないと、生きていけない、生活がままならない。にも関わらず、「頑張れ」と言われると、「もう、ギリギリになるまで頑張っている、ずっと」と返したくなる。

星：うん。なんでしょうね、療育園でも「頑張れ、頑張れ」って言うんですけど、それって、もう「走っているだけで、そこに居てくれるだけで天才」という感じ。

熊：ああ。そういう、そもそもの存在の肯定感というものは障害の有無にも関係なく、すべての子どもたちが感知できる環境が望ましいはずだよなと思います。きっと、先程おっしゃっていた「右へ倣えでみんな同じふうにやらなきゃいけない」という環境そのものから見直していかないといけないんでしょうね。

集まる機会も場所も必要

熊：会話の大切さというものをおっしゃっていましたが、当事者の方々で集まる機会をつくってみてどうでした？どんな感じだったんですかね？

星：まあ、自己紹介と、ちょっとこういうことが困っているんですけど、みなさんどうされてます？とかっていう話をして、あとは、子どものことだけで話を終わるより、自分のことも話そうよって、冨永さんが言ってくれて。

熊：あー。

星：それでその冨永さんって、お子さんの学年が上というのもあるんですが、もう学校の中では信望されていて。

熊：いろんな会長やっていらっしゃいますもんね。

星：その冨永さんが、「こんな失敗しちゃった」ということを結構話してくれたんですね。だから、しっかりしてる冨永さんでさえこういうことがあるんだみたいな感じで、なんかちょっと救われるじゃないですけれども、良かったなって思える。あとは、学校の管轄とか、PTAとかじゃなくって、本当に何のくくりもない会だったんで、なんかこういうふうにふらっと来て話せるのっていいよねって言ってくれたお母さんもいらっしゃったんで、やっぱり継続して続けていけたらいいなって思っています。

熊：わー。ちなみに、集まる場所はどうされていたんですか？

星：支援学校の近くに、地域の集会場があって、そこの鍵を管理している方と仲良しになったお母さんがいたんですね。そのお母さんのお子さんも支援学校に入学したし、そこが本当に学校から徒歩1分ぐらいのところなので、子どものお迎えのついでに行けたり、話の途中でも、お迎えに行くから帰るわっていうのもしやすいし、無料で借りられるし。管理されている方からも「どうぞ」って言ってもらえたんですね。

熊：そういう「ついで」ができる場所があると結構変わってきますよね。保護者の方々は、分刻みで行動されている印象があるんですけど、集まる場所の立地で、集まれるかどうかというところが大きく変わっていく気がします。

星：そうなんですよね。

熊：集会所は、僕らも結構注目していて、誰でもトイレに改修されているところもあるので、必要とされている方が利用しやすい状況をつくれないかなって感じています。現状は、申請や鍵の受け渡しが、ちょっと大変なんですよね。そういうところこそ、デジタルが上手く使えたらとは思うんですけど、とにかく集まりやすい場所があることで、集まる機会が生まれやすくなるのはありますよね。

星：そうですね。別にかしこまった場所にしたいわけじゃないので、お茶飲みながらお菓子食べながら、世間話ができたら良いんですよね。一応、支援学校に通ってる保護者限定っていうことで、知ってる範囲で声をかけて、出欠席とか全然いらないから、もう来れたら来てくださいって。一人でも来てくれたら良いし、来れなくても良いし。

熊：軽やかというか、気軽さというものを、どうやって担保し続けるかって、本当に大切な気がします。集客というか動員というか、そこだけが目的になってしまうと、どんどん重苦しくなる気もします。精神分析や現象学が専門の村上靖彦さんという方の「すき間の哲学」という書籍を読んでいたら、とある自助会の主催者である発達障害当事者の発言が紹介されていて、とても印象的でした。それは、「参加者がいなくていいっていうよりも、参加者が会場にいなくてもいい。参加者はすでにいるんですよね。社会のどこかに。どこかにいるんですけど、その人たちがたまたま会場にいなかったというだけで。その参加者は、別に会場にいる必要はない」というものだったんですけど、要するに行けないにしても、それがこの社会に「ある」ということで、分かち合える希望というものがある気はするんですよね。

希望を持ち寄ることの必要

熊：play hereって、公共的な仕事なので、やっぱりどこかで仕組みや制度だったりするものに落とし込んでいかないと仕事したことにならないんじゃないかと考えているんですね。そうでもしないと、小林さんのような熱量のある公務員がいなくなったとたんに、終わってしまう。ただ、仕組みができれば、自動的に回っていくというわけでもないので、結局のところ人の存在も重要。とはいえ、誰かのやる気や思いやりという気持ちに依存する状況は避けたい。と、いろんなジレンマを感じながら、ぐるぐる考えているわけなんですけど、結局のところ、当事者の方々や地域や行政との関係性を広げたり深めたりしつつ、それを一歩ずつ育んでいくことが大切なんだろうなとは感じているんです。そのなかで、より良い地域社会の構想力や実現力をみんなで磨いていくことが大切だよなって。素直に言っちゃえば、それを希望につなげていきたいという。そうじゃないと、先程の話で言うと、絶望の「棺桶時代」にすぐ戻っちゃうじゃないですか。

星：いつでもやってくるというね。

星・熊：なはははははは。

熊：ですよねえ。今、小学校に入って、海で言うと一時の凪かもしれないけど、その後の就労とか、自分が先に天国に行った後のこととかを考えると心が荒れてしまうという話も、これまでたくさんお聞きしてきました。

星：たまに考えると不安になりますよね。だから、なんかもう、玄関開けたら棺桶時代。

熊：「玄関開けたら二分でご飯」って、昔のCMがありましたよね。

星・熊：なはははははは。

熊：まさに玄関開けたら棺桶時代なわけですから、ささやかでも良い兆しだったりするものを、みんなで持ち寄って絶やさないようにすることを、意識的に自覚的にやっていかないといけないんじゃないかなって思います。より

良い地域社会の構想力や実現力ということを考えていくと、そこの土台には「共に生きていくための作法のようなもの」がある気もしているんです。

星：やっぱり理解が促進されていくとねえ。立場が変わればね、障害者に縁がない方からすると、全く関係ない話かもしれないんですけど、やっぱり突き刺さる目線というものがあるかないかだけでも、親としてはかなり変わってくるんですよね。それって、助けてくださいというわけじゃなくて、もう少し優しい目を向けてくださいっていうことで、理解ということまでいかないにしても...。

熊：理解までは求めないというのも、なんか上手く言えませんが、いろいろと感じるところがあります。地元の公園で言うと、遊んでいる人同士の地元が一緒だったりするわけですし、少なくともそういった作法が育まれる場としての公園の機能ということは、もう少し考えていかないとなんだろうなと思います。

「迷惑をかけてごめんなさい」という気持ちが生まれる根のところ

星：いつもそばにいて「ああ、危ない危ない」みたいな、そういう先回りが、私の中でもう癖がついちゃってたんで、極力、他の子に迷惑かけないために、あんまり混んでる公園には行きたくないとか、休みの日はどうしても混むんで行かないようにするとか、行ったとしても遊具では遊ばないようにして散歩だけするとか。公園で言うと、そういう感覚なんですよね。

熊：play hereっぽく言えば、「あそこで、遊ぼう」「ここで、遊ぼう」という、ある意味当たり前のことが、当たり前ではなく、そう簡単には叶わない。

星：はい。なので、「そういう子どもが居て良いよ」「居たくなる」っていう場所が地域の中であれば、親としても、そういう先回りをしないで、ちょっと遠巻きに見て見守ってみようかなっていう気持ちがきっと働くんでしょうけど、やっぱりどうしても迷惑かけないようにってなります。

熊：気をつけないと「迷惑かけて、ごめんなさい」という感情がデフォルトになってしまうという話は、保護者の方々からたくさんお聞きしています。それって、「棺桶時代」に一直線なコースですよね。この世より、棺桶の中のほうが幸せにすら思えてくる。もうこれ以上は頑張れませんって。常に既に頑張り続けていますって。

星：そう。

熊：教育の領域では「個別最適化」というキーワードも上がってきていて、みんながみんな同じことをやらないといけないという一斉授業ではないスタイルも模索されてきてはいます。そういうふうに制度だったり社会習慣が変わっていけば、そのような生きづらさも少しずつ是正されていくような気もしています。「足並み揃わなくてごめんなさい」と思わないで済むという。そうあって欲しいんですが、とはいえ、いきなりは変わらない。

星：ええ。

熊：根本的な課題は何なんだろう？ということも考えるんですね。整体とかで言うと、ほぐした方が良いコリのようなものはどこにあるんだろう？って。多分なんですけど、「人は、迷惑かけちゃいけないし、失敗してもいけない」という人間観をゆるやかにしたほうが良いだろうなと感じています。先程、冨永さんの失敗談のような話を聞

けて良かったというエピソードもありましたが、つまり、そこには、そういう社会のコリをほぐすマッサージ効果もあるよなって思います。

星：そうかもしれません。

熊：僕らって、みんな迷惑をかけたりかけられたり、失敗を許してもらったり許したりとかしながら生きているじゃないですか。それを忘れちゃうとなんか良くない気がするんですよね。

本当に欲しいのは、心のインクルーシブ

熊：話は尽きないし、尽きない方が良いと思っていますし、結局、僕がたくさん喋りまくっているのですが...。

星：いえいえ。

熊：一旦の最後の質問として、play hereというプロジェクトへの期待感のようなものを改めてお聞きしたいです。

星：心のインクルーシブ。それがないと、インクルーシブ公園ができたとしても、「迷惑かけちゃうから」ってなって子どもを連れて行けない。あと、子どもが大きくなると運動量も上がっていくから、囲いがある公園だったらいいんですけど、果てしなくどっかに行っちゃたりして、「やばいどっかに行っちゃった」みたいな感じになるのも怖いです。もちろん、普通の公園よりは絶対利用はしやすいでしょうけれども、やっぱり「インクルーシブ公園ができました」っていうことで、手放しで「やった！」とはいかないだろうなって。

熊：おっしゃるとおりに思います。

星：でも、そういう公園で、みんなが少しずつお互いのことを知るっていう風潮が生まれてきてくれれば、親としては、自分の子どものことを先回りしすぎないで見守ってみようかなってできるかもなって。わたし、子どもには極力自由に育ってもらいたいなって思ってるんですけど、結局道を歩いてても「危ないから」って引っ張っちゃったりするんですね。以前、わたしの兄弟が「ちょっと面倒みるよ」「ゆっくりしてなよ」ということで、来てくれたんですけど、わたしだったら「迷惑になるから」「危ないから」ってやっちゃうようなところで、本当に見守ってたんですよね。そのときにふと、わたしって、息子のためと思ってやっているけど、実は自由を奪ってたんだって思ったんですよね。

熊：んー、とはいえ、あまりご自身を責めてほしくないですけども。

星：紙一重のところですし、やっぱり危険なものは危険だって教えてあげなきゃいけないし、あまりにも人に迷惑かけちゃう行為は止めなきゃいけない部分もあるんですけど、それが当たり前になりすぎちゃってたなって。実は息子はできることかもしれないのに、先回りをして、なんか自由を奪ってたなって。最近は少しずつですけれども、いつもこう先回りをしていたところを、ちょっと見守ろうかなって思えるようになってきたんですよね。自分の兄弟を通して気づけました。けど、やっぱりどうしても障害のある子のお母さん方って、「やめなさい」「危ないから」って言う場面が多いと思うんです。我が子は電車に乗りたいんだろうけど、電車に乗ると騒いじゃうから、絶対乗らせられないって言う知り合いのお母さんもいるし、本当だったら、電車に乗ればすぐなのに、乗せた

くないっていうのもある。なぜならば、騒ぐのが目に見えてるから、もう親がしんどい。だから、我が子の気持ちはわかっているんだけど、叶えてあげられない。

熊：うん、はい、そうっすよね。目の前にそれがあるのに、それができない。そういう当たり前が当たり前じゃない方がいるということを、play hereでは重みをもって受け止めています。で、ですね、なんか当事者の方々は、常に自分自身のことを振り返りながら、ある意味で言うと反省しているっていうことが非常に多い気がしているんですね。ちょっと抽象的な言い方をすると、物事に、原因と結果というものがあるとして、その全てを1人で受け止めている感じが凄いするんですね。今、起こっているあらゆることの原因は自分であるって。それって美しくもあるけども、あまりにも背負いすぎているということでもあるし、そうさせている社会があるとも感じます。我が子の命を守るためには、へその緒が必要であったように、先回りするような手綱を引いておくというのは、ある意味でいうと当然というか必然だったわけですよね。その手綱を緩めることを可能にするのは、そのお母さんの心構えだけでなく、社会側の工夫も必要だと思っているんです。社会側にもその原因があるわけですから。例えば、公園にフェンスのようなものがあれば、道路に急に飛び出て轢かれちゃう心配がなくなり、見守れるということであれば、それが用意された社会にすれば良いはずという。電車も例えば、一つの車両は、時間の限定があっても良いかもしれませんが、「大きな声が出ても、泣いちゃっても、全然OKっす」みたいになっていれば、しんどい気持ちが軽減されそうですよね。人口減少社会って、原理的には、人が少なくなる分、一人ひとりが大切にされる社会に転じていくチャンスとして捉えることができると思うんですよ。だから、そういう議論を社会に巻き起こしたい気持ちがあるんですよね。そういう話、またさせてもらっても良いでしょうか？

星：もちろん。

熊：正確に言うと、議論を巻き起こしたいというより、みんなで解釈を豊かにしていきたいんですね。あ、公園のフェンスで言えば栗山公園では、まさにそのような理由でフェンスが整備される予定です。それって、安心安全を生み出すためのものではあるんですけど、そういう事情を知らない場合は、極端な話をしてしまえば、人々を分断する壁に見えてしまうかもしれない。とはいえ、その同じ壁も、表現やコミュニケーションを育むキャンバスとして捉えることもできる。そのようにして、とにかく、できるだけポジティブな解釈や運用に持っていきたいんですよね。

鞍田愛希子さん

こころとからだと環境は切り離せないから

取材日：2024年12月23日

健康を捉え直すことの必要

鞍：梶野公園も栗山公園も近いので、どちらも外出プログラムで行くことがあって、ストレッチをやったり、もしものときの避難所にもなっているので、防災訓練としてみんなで確認しながら巡ったりとか。その時に、栗山公園の池が枯れててもったいないねって、なんかバリケードみたいになってるねって、ちょうどみんなで話をしてました。

熊：そう、なんか黄色いテープが張り巡らされてて、事件現場みたいになっててね。

鞍：そうそうそう、なんか悲しいねって話していました。丘もあるし、良い使い方ができそうなのにねと。なので、このplay hereのプロジェクトが立ち上がったので、良くなったらいいなって。

熊：ねえ、あそこがビオトープみたいになって、人にも生き物にも良い形になったらなと。みんなで良くしていきましょ。

鞍：ぜひぜひぜひ。めちゃくちゃありがたいです。

熊：こちらこそ、ありがたいです。みんなで足元の環境をより良くしていきたいんですよね。

鞍：わたしたちの「こらだ環境研究所」の「こらだ」っていうのは、中井久夫先生という精神科医の造語で、心と体を合体させた言葉なんですね。例えば心の問題からくる身体症状や、トラウマだったりするものも含めて、コントロールの利かない形になっている「こらだ」を、自分たちで色々と分析をして分解していくということを大切にしています。心と体が分けられないように、「こらだ」と環境も混ざり合っているものですよね。というのも、環境からの影響や変化は、いつの間にか個人の中に入り込んでくるので、それが自分なのか環境なのかって意外と分からない。環境を変えたら、一気に変わるみたいなこともありますよね。

熊：なるほど。それぞれ切り離せない、心と体と環境。それぞれの捉え方がなんか豊かになる感じがします。

鞍：そうなんですよね。その分析の過程で、自分たちに必要なパーツを見つけていく。環境であれば、生育環境もあったり、自然環境もあったり、教育環境もあったりと、いろいろな切り口があると思うんですけど、自分に合った環境を見つけたり、生み出すことで、「こらだ」をコントロールできるものにしていく。そういうことを「こらだ環境研究所」のコンセプトにしています。なので、そうやって環境を整えていくとか、自分たちの手で、自分たちが欲しい環境をつくっていくみたいなことは、まさしく、わたしたちもやりたいことなんですよね。

熊：めちゃくちゃ、やりたいし、やって欲しい。ですし、公園の話をするならば、公園って、人々の健康に寄与することが法的にも、その存在根拠だったりするじゃないですか。そうしたときに、その健康の定義を捉え直すと言いますか、豊かにしていくということが、今、めちゃくちゃ必要とされている気がするんですよね。まさに、心と体と環境が不可分なものとしての健康。

鞍：そうそうそう。

今を、傷を、大切にすることが裏打ちする

熊：鞍田さんが、小金井で最初に立ち上げたのは「ムジナの庭」で、就労継続支援B型事業所。その次に、今日お邪魔させて頂いている「こらだ環境研究所」を立ち上げられて、ここは自立訓練（生活訓練）事業所。制度的にはどういう形なんですかね？

鞍：障害福祉サービスでは段階が設定されていて、医療から福祉、福祉から企業みたいな感じに、就労への階段がつくられていたりするんですね。医療っていうと、一番大変なときは入院じゃないですか。入院からもう少し安定して退院に移っていくときに、いくつかのサービスがあるんですよね。そのサービスと似た感じなんですよ、自立訓練って。それを医療側でやるか福祉側でやるかっていう感じです。例えば脳梗塞とかで、手や足が身体的に不自由になった場合には、医療ではリハビリ、福祉では「機能訓練」ということになって、理学療法士さんとか、作業療法士さんが入られる。一方で、心のコントロールや生活リズムを自分で作るのが難しいとか、外出できず日中活動を思うように送れないとか、精神的なサポートを含む場合には、医療ではデイケア、福祉ではうちのような「生活訓練」というのもあって。まずは2年の期限の中で、精神保健福祉士や社会福祉士と一緒に、訓練を重ねて生活を作っていく。そこから就労支援に繋がっていく。なので、B型の手前ですね。

熊：なるほど、わかりやすい。「ムジナの庭」に加えて「こらだ環境研究所」もやることで、できるだけ視座を広くとっておきたいという感じだったんですか？

鞍：もともと「ムジナの庭」で目指してたものっていうのが、就労とケアの両立だったんですよね。働きながらケアされるような場所をつくるっていう。それは環境からのケアも含まれていて「ムジナの庭」も、窓からいつも金蔵院さんの四季折々の風景が見えるので、目からケアされるものもあれば、鳥の声とか、風の音とか聞こえてくるので耳から癒される部分もあったり。働きながらお金を稼ぐっていうことで自尊心を回復させつつ、こころ・からだプログラムに参加しながら、同時に環境からもケアされる場作りを実践したんですよね。ただ、3年にわたる実践の中で、就労にどんどん向かいたいという方もいれば、ゆっくりと自分が回復することに時間を使いたいっていう方もいて、それぞれに特化した方がより効果が発揮しやすいということもあり、一旦、その就労とケアの機能を分けてみようっていうことでつくったのが「こらだ環境研究所」ですね。

熊：急ぎたい人はそうできるし、ゆっくりしたい人もそうできる、と。

鞍：そう。「こらだ環境研究所」がケアの要素を持っていて、「ムジナの庭」が以前よりも就労の方向を強めるっていう形でちょっと役割分担をさせてみたんですよね。「こらだ環境研究所」は午前中2時間、午後2時間、全てプログラムで回っていて、例えば、からだプログラム、こころプログラム、あと調理。で、自分自身のことを深掘りして、分析してみたり、自分たちが経験してきたことを言葉にまとめたり、漫画にしたり、そういう「こらだ環境研究」というものもやってます。「生活とは生きること」がスローガンなので、必ずしも症状や障害のことを考える必要はなくって。生活するための訓練とか就労するための訓練とかっていうふうに、すごくまっすぐに1本道を作っちゃうと、その間のいろんな豊かな要素が抜け落ちてしまう。それがもったいないなってずっと思ってたんです。いろんな「暮らし方」「働き方」があるはずですし。訓練ではあるんだけど、でも自分たちが本当に心が動くプログラムだったりとか、自分なりの生活の仕方みたいなのを見つけていけたら、それがそのまま、生きる喜びとか生きる幸せとか、生きる意欲だったりに繋がるんじゃないかって思っています。

熊：何かができるようになるための訓練ではあるものの、そうなると、できたかどうか？だけが問われる感じがあるけども、その結果の前に、プロセスそのものも大切なんじゃないか、と。

鞍：そうですね。その傷のようなものや、何かできないことをカバーするとか、できるようにするとか以外に、もうちょっと味わい尽くしたいみたいな感じですかね。

熊：いやあ、うん、はい、もう、はい。

鞍：なんかそういう場所がないなと思って。自立や就労に向かっていくっていうことは、もちろんみんなも目指したいし、わたしたちもそれをサポートしたいっていうのは同じなんですけど、なんか、もう少しその過程を寄り道したりとか、小道を探してみたりとかしながら、一緒に向かっていけるといいなっていうふうに思っていて。その余白をもつことでその人の「生きる力」っていうのをさらに発掘できるんじゃないかなと考えているんです。就労のための生活スキルって言われるような、例えば自炊ができるとか、早く起きられるとか、そういうのって、その人の中に何か本当にやりたいことの動機が生まれてきたら、自ずと達成されていくものだったりもするんで。

熊：生活スキルというものだけを取り出して考えない。

鞍：そうです。わたし、もともと植木屋だったんですね。

熊：そこがユニークではあるんですけど、なんとなく必然性も感じるところですよね。当時の植木屋さんって、今よりも更に、女性が働き先として飛び込む先という雰囲気はあまりなかったと思うんですよね。

鞍：ええ。でも、大学のときに不眠で、自分は眠れないタイプだと思い込んでいて、気持ちも鬱々としやすかったんですけど、植木屋に入って毎日朝5時に起きて手押し車とかで鍛えられて、外でお弁当を食べてって過ごしていたら、もうぐっすり寝てて、そりゃそうだよねって。

熊：なははは。

鞍：自分自身の経験もあって、そういう単純な方法で回復できる、生きていけるっていうのを大事に考えてるんですよね。だから、ね、やっぱり人の輪にもまれるとか、思いっきり走るとか、汗をかくみたいなところで、人間としての本能的な動物的な力が蘇ってくるっていうことを、ちょっといろいろ試したいなって思っています。

一緒に探求していくこと、経験が他の誰かの糧になること

熊：鞍田さんが言うプログラムって、学校のカリキュラムというニュアンスよりも、一緒に生活の色々なシーンを大切にするという感じがするんですね。生活のなかで、いろんなことにおっしゃるように寄り道しながら、迂回しながら、ふとした出会いも味方につけながら、なにかをやってみたいというエネルギーが湧いてきたりもする。

鞍：うん、うん、うん。あとなんか例えば症状や障害っていうことを考えるにしても、それを真ん中に置くんじゃなくて、「ネガティブ感情ってなんで湧いて来るんだろう」「環境ってどうやって自分の中に入り込んでくるんだろう」みたいな問いを大切にしたいなと。そうすることで、病気や障害の有無に関係なく一緒に議論ができる。そういう仲間として、ここに集まった人と一緒に探求していきたいんですよね。なので、研究所っていう名前にしたんです。みんなのことを研究員って呼んでて、そういう意味では研究の先輩だったりして。

熊：サービス受給者というよりも、研究員だし、先輩。

鞍：やっぱり障害の受容ってものすごく難しい。先天的なものだったとしても、自覚されるのって、もっと大人になってからだったりもするので、大人になってから自分の障害を受け入れようとすることってすごいことですよね。だから、みんな自分のことをものすごく考えたり調べたりしている。

熊：まさしく先輩研究員。

鞍：そう。健常者の人であったとしても生きづらさを持ってて、だけど自己理解がなかなか難しかったりする中で、やっぱりここにたどり着いてサービスを使いたいっていうふうにわざわざ来てくださる方は、そこが一歩先を行ってるんですよね。その意味でもすごい尊敬があって、自分の弱い部分とか、なにかこう助けてほしい部分っていうのをさらけ出して、サービスを受けるというところまで気持ちを持っていくのってみんなできることじゃないなと常々感じています。

熊：そうですよね。ジョアン・C・トロントという人の「ケアリング・デモクラシー」という書籍を読んでいたら、「市民が踏み出すべき第一歩であり、かつかなりの勇気を要するのは、各人が人間の傷つきやすさを認めるということである」とあって、かなり腑に落ちる感覚があったんですよね。なのでまさに、みんながすべきところを、勇気を持って既に踏み出してくれている先輩方なわけですよね。

鞍：社会から醸し出す空気とか、わたしたちが作り出している環境が、その勇気を持つのを難しくしているとも思うんです。やっぱり、誰よりも人を優先してきた人だったりとか、誰よりも優しかったり真面目な人が精神疾患になりやすかったりもして。過酷な生育環境にある中でも、親のことを否定できなかったりとか、何か自分が我慢すれば何とかなるっていうふうに環境に適応しようとしてきた人たちだったりもするんで、誰よりも優しい人っていうふうに捉えることができると思っているんですよね。みんな、今まで自分がしてきたつらい経験っていうのを無駄にしたくないとか、誰かの役に立てたいとかっていうふうによく言ってくれるんですけど、ここでやっていることをもう少し一般向けに広げていけたときには、みんなが講師。

熊：そういうことになったら、めちゃくちゃ良いですね。希望を感じます。

「多」で「疎」な人間関係の豊かさ

鞍：福祉の領域にも居なかった人にもケアに関わってもらうっていうことを大事にしてて。

熊：関わりの幅を広げて緩くしていくことは、これからの時代、かなり重要な気がしています。

鞍：うん、そうですよね。それで言うと、評論家の宇野常寛さんがやられている「庭プロジェクト」に参加しているんですが...。

熊：建築から文化人類学まで幅広い専門家や実践者が集まって、これからのまちづくりを深めていて、面白いなって思って見ていました。

鞍：ありがとうございます。そのプロジェクトのイベントで、「これからの都市に必要なものは何か？」っていうテーマで、それぞれがフリップを書いて出すっていう機会があって、わたしが出したのは、「多で疎」。

熊：「多で疎」。

鞍：多いけど、まばらっていう。精神科医の森川すいめい先生が、自殺希少地域をリサーチされたときに「その島のひとたちは、ひとの話をきかない」っていう本を書かれていて、そこで出てくるんですね。よく言われるのは「少ない関係で密が良い」っていうことじゃないですか。親友が欲しい、恋人が欲しい、そうじゃないと自分は幸せじゃないっていうふうに日本では考えられやすく、みんなそれを目指す。けれども、毎日のように挨拶だけはする、顔は見てるから安否確認はできているみたいな、そういう関係性も必要なんじゃないかなっていう話をしてて。

熊：あー。

鞍：「庭プロジェクト」でも、SNSが実空間を奪っていったみたいな話をしているんですね。例えばSNSの人間関係だけで人が精神を病んでしまったり、自殺をしてしまったりとかする中で、実際の、この実空間の中に、インターネットの掲示板のようなものをつくれないかなって話をしてて、例えばアメリカのポートランドには、もう読まなくなった本を入れておいて、それを誰かが持っていけるような箱が街なかにあったり、詩のための掲示板があって、それを読む人がいたり、書き加える人がいたりする。そういうリアルなコミュニケーションが生まれるための仕掛けが点在しているんですよね。一緒に密な時間をずっと過ごすわけじゃないんだけど、点と点で関わった何かが少し自分の生活の中に入っていく。これだけ人口の多い東京の中では、「少で密」ではなく、「多で疎」な関係性ってすごく可能性がある気がしているんです。例えば、植物の種とか苗を持ち寄って置いておける箱があったり、育てることができる畑があって、次に来た時には、花が咲いているのを見られたとか。顔が見えなくても気配は感じられる間接的なコミュニケーション。そういう機会を街のなかにつくれないかなって。

熊：「疎」のまま、ゆるやかな関係を維持できるっていうね。都市生活の喜びというか可能性をそこに見い出すことができるかも、ということですよね。なるほどです。なんかコミュニティという言葉からは、前のめりで「密」な印象を感じやすい気がして、それに気後れする気持ちも湧くんですが、「多で疎」ということでコミュニティというものを捉え直すと、また変わってきそうな気がします。

鞍：宇野さんも、「自分のような『陰キャ』は、コミュニティなんてものに入れるわけがない」という話をされるんですよね。うちに来られる方も、やっぱり「一般的なワークショップや教室には入れない」ってみんな言うんです。やっぱりコミュニケーションのスピード感も違うし、生きてる世界も違うし、行っても引け目に感じてしまって終わるんじゃないかとか、距離感がわからずクタクタになるとか。だけど、さっきの種や苗の仕組みがあったら、多分、ハードルが少し下がると思うんですよね。人と面と向かって話さなきゃいけないということだけじゃないコミュニケーションのあり方っていうのを、模索していきたいなと。

熊：その議論も、非常に興味があります。北山修という精神科医が、「共視論」という書籍を出していて、まさに人が向き合うコミュニケーションではなくって、同じものに注意を向けながら育まれるコミュニケーションのあり様を、浮世絵などを分析することで日本文化に見ているんですね。おそらく、そういったコミュニケーションモードが、社会を成り立たせるためには必要だという共通認識がかつてはもう少し豊かにあったんだろうなと考えているんです。play hereの話で言えば、公園がそういうことを模索する場になったらなと思いますし、一緒に探求してほしいです。

鞍：ぜひぜひぜひ。

本来あるべき、愛着形成の多様なバリエーション

鞍：「庭プロジェクト」で上がるキーワードに、「愛着」というのがあって。母子の愛着もそうですし、土地に対する愛着もそう、物に対する愛着もある。いろいろとあると思うんです。「こらだ環境研究所」でも、愛着を含めた心の安定の土台をつくるということを大切にしているんですけど、心の問題となると家族関係だけが着目されやすいんですよね。それも大事なことで続けていく必要があると思うんですけど、それ以外のことも大切にしていきたい。例えば、動物のアニマルセラピーは良く知られていると思いますが、植物もグルーミングすると、オキシトシンっていう愛情ホルモンや、セロトニンっていう幸せホルモンと呼ばれているものが放出されるみたいなんですよね。
熊：へえええええええ。

鞍：例えば、栗山公園で、みんなでビオトープをつくるっていうことの経験が、土地との愛着形成を生んでいくと思うし、自分の変化とともに、土地も変化していく様子を見届ける経験のなかに、環境から個を変えていく作用っていうのがすごくあると思うんです。

熊：めちゃくちゃ興味あります。

鞍：「多で疎」みたいな形の関わりしろが、そういうところにもあるのかなって思うんです。

熊：そういうこととして、考えていきたいです。なんか話をお聞きしながら、頭の中でつながる感覚があるんですが、先ほど話題にあがった「ケアリング・デモクラシー」という書籍は、その中心に、民主主義というものが「ケア責任の分配に関わるもの」というモチーフがあるんですね。で、おそらくやっぱり「少で密」といった人のつながりが成り立っていたことの裏側には、女性の過剰なケア責任という「シャドウ・ワーク（影の労働）」的な状況があったと思うんですよ。鞍田さんがおっしゃっていた「福祉の領域にも居なかった人にもケアに関わってもらうっていうことを大事に」ということも繋げながら考えていくと、やっぱりこれからの社会のあり方の構想に直結していくな、と。そういった見通しのようなことも大切にしつつ、具体的に、じゃあ、公園のビオトープづくりをどのように進めていけばよいのか？というところはかなり手探り状況なんですけども。

鞍：いろんなやり方があると思うし、宇野さんは「わたしたちの実践が失敗ってなっても面白いですよね」って言ってくれたんですね。もちろん、人の人生を預かっているので、そこは、きちんと責任を持っているんですけど、例えば、当初は「就労とケアの両立」というものを考えていましたけど、利用してくださる方が変わっていくに従って、動いていくものなんですよね。

熊：想いはまっすぐ、歩みはジグザクという。そう思うと、いろいろと動きやすくなる感覚があります。

目標や計画という考え方と上手に付き合う方法

鞍：「庭プロジェクト」の参考図書の一つに、ジル・クレマンの「動いている庭」があります。最初から計画された庭ではなく、風とか地形とか、いろんなものによってどんどん変遷していく庭のありようを紹介している本なんですけど、「ムジナの庭」も「こらだ環境研究所」も、まさしく計画をバチッとつくるっていうよりは、ちょっとずつ変遷していくと面白いなと思って始めた場なんですよね。人は、学校であれ、仕事であれ、計画やルールの中で生活をしてきているから、計画がないと不安になりやすいらしいです。でも、今って「VUCA時代（Volatility／変動性、Uncertainty／不確実性、Complexity／複雑性、Ambiguity／曖昧性の頭文字を取った言葉でブーカと読む）」で、何が起きるか分からないって言われていたり、それこそ昨日まで価値があると言われていたものが突然、無価値になってしまったりする。だから、そもそも期待通りには進まないことを前提として、不確定な要素を面白がれたり、遊べたりすると、ストレスを感じにくくなるはずなんですよね。計画ありきで、それが予定通りにいかないと、何かが折れたりしやすい。

熊：そうですねえ。庭でいうと「ハプニングツリー」と呼ばれているものが好きなんですけど、鳥とか虫が運んできた種が大きくなった樹とかで、「おや、これは植えたつもりはないぞ」というものが生えてくるというハプニング。でも、そういうハプニングのようなものをどう受け止めるか？というのは面白い話なんですよね。ハプニングを全て排除していると、庭として面白くならない。それこそ「動いている」ことにならない。それって、この仕事

もそうで、向かうべき方向性は変わってないとは思うんですが、誰に会うかによって少しずつ変わっていく、確かなものになっていく。逆に、変わらないことのほうが出会う方に対して失礼なような気がしています。そうやって考えていくと、「PDCAサイクル（Plan／計画、Do／実行、Check／評価、Action／改善の頭文字を取った言葉で、目標達成のために使われる考え方）」でガチガチに固めちゃうと、ハプニングというものを受け取れるすき間が生まれないなって。

鞍：めちゃくちゃわかります。うちの法人名のアトリエミショーも、「実生（みしょう）」という日本語が由来で、まさしく鳥のフンから芽が出た樹のことを指してます。福祉もPDCAが原則で、それがハマる方はトントンと乗っていけるんですよね。「職業準備性ピラミッド」って言われるような、安定した就労という目標に向けて、どんな準備が必要かっていう要素を示す図があって、土台の最初のところから順番に、次のスキルへ進んでいくっていう。それが得意な方は良いんですけど、そうじゃない方ももちろんいるんですよね。

熊：職業準備性ピラミッドというステップがあるんですね。

鞍：いろんな書き方や呼ばれ方があるんですが、土台が健康管理で、次に日常生活管理、それで対人スキル、その次に労働習慣で、最後に職業適性って。

熊：なるほど。

鞍：最近、それを提唱された相澤欽一先生の研修を受ける機会があってお話を伺ったら、「本人にハードルを課すということではない」とおっしゃっていて、「どのような配慮が必要か」っていう視点でとらえる必要があるって。福祉の業界では、ハードルの代表のように語られることが多いので、目からウロコでした。それと、働きたい意欲だったり、その先に実現したい目標があることによって、就労がケアにもなるということもおっしゃるんですね。就労とケアというのは、まさしくテーマではあったんですけど、現場の感覚で言うと、目標設定をすると、途端にそれが強迫性を持って実現せねばならない何かになって、わくわくするものではなくなる。逆に不安を抱かせることにもなるんですよね。

熊：わかります。会社経営者と良く話すのは、「PDCAを強固に回しすぎると、社員が達成できそうな目標しか掲げなくなる」ということだったりするんですが、それと似ています。教育の現場で言うと、「目標を掲げたのは、あなたなんだから、自分で選んだんだから、決めたんだから、ちゃんと頑張りなさい」と言質を取られるみたいなことが起こるのは良くないなって感じているんですが、総じて自己責任論みたいになりがちで、苦しくなるという。

鞍：そうですね、自分の中にどういう変化があるのか？ということを振り返る意味では、PDCAサイクルの考え方は良いんですけどね。そうやって苦しくなる先の未来が見えてしまうと、あれしたい、これしたいという肝心の希望を口に出しづらくなっていくんですよね。

熊：そこの欲望というか気持ちというかエネルギーを形成していくことが、まさに大切ですものね。

鞍：どうしたら良いんだろう？っていろいろと調べた時に、PDCAに代わるVUCA時代のキーワードとして、ビジネス用語なんですけど、「OODA（Observe／観察、Orient／方向づけ、Decide／意思決定、Act／行動）の頭文字を取った言葉で、意思決定と実行の流れを表す考え方）」というものがあって、問いを立てるところから始めるの

が重要とされているんですね。目標設定が苦しくても、問いを立てるのは大丈夫だったりする。そういう方たちは、言葉をもう、たくさん、なんて言うか抱えたまま生きてきてて、外に出さないまま溜めて溜めていることが多い。そういう場合は、書くことじゃなくて、話すってことがとても必要で。

熊：目標設定だと、書くことが求められることが多いと思うので、話し言葉が大切にされていくのは、とても対照的に感じます。これは喩え話ですけど、同じ山を登るにしても、いろんな登り方もあるし、なんなら登らずに、遠くから眺めながら楽しむみたいなこともあるという感じで、いろんなスタイルがあるということを確認していく作業なんですかね。

鞍：そうなんですよね。わたしたちのできることがもしあるとしたら、いろんな選択肢を増やすために、いろんな考え方に触れてもらう、いろんな環境に触れてもらうっていうことだけかなっていうふうに思います。

熊：ホント、なるほどです。play hereを進めていきながら、自分自身が当事者でもあったりするわけなんで、いろいろと考えるわけですが、なんか上手く表現できている気もしないんですけど、障害というものをどう捉えるかということで言うと、「同じこの世に生きている、ただ、他の人と別の方法で、というだけ」というニュアンスもあるなと思っていて、となると、「生き方には、いろんな方法があるんだよ」ということを、みんなで認識したり、その方法を豊かにしていくことが大事なんだろうなって。

鞍：そうだと思います。

熊：play hereで言うと、公園を、そういうことの舞台にしていくことが重要な気がしています。小林さん、どうですかね？なんか、毎回思いますが、今日もこう、深まっていく感じがありますよね。

小：はい。いろんな気付きがあって、わたしの想いとしてもですが、障害に対する認識を変えられるんじゃないかって思えてきています。そういう想いを持った方とたくさん出会えてきているので、行政としても、そういう方々が動きやすい環境をつくっていければ良いんだなっていうことを素直に思えるというか。愛着という言葉で言うと、この街に愛着を持って暮らしていきたいとちゃんと思える場所にしていきたいですし、そのための拠点に公園がなるんじゃないかなって。今、本当にたくさんの方に注目頂きつつあって、機運は高まってきているので、ここから何ができるかっていうことが問われているなって。

鞍：これからですね。

熊・小：ですね。